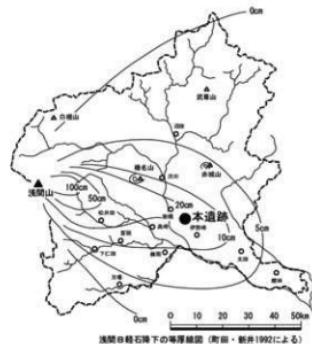


# 南部拠点地区遺跡群No.1

前橋市南部拠点地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）



2009.3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団





調査区（5区）から楼名山・浅間山を望む



平安時代末期の水田（5c区 As-B層下水田）



古墳時代の水田（5区 Hr-FA層下水田）



古墳時代の溝（2・3区1号溝）



基本層序（5c区）



## 序

前橋市は関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情にあふれる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前の旧石器時代から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じることのできる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋の地は、800余りの古墳が存在していたように、上毛野の国の中心地として栄え、また、統く律令時代になってからは總社・元總社地区に山王庵寺、上野国分僧寺、上野国分尼寺、上野国府など重要な施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東四名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され、日本の発展の一翼を担うなど、まさに、歴史性豊かな街です。

南部拠点地区遺跡群No.1は、市の南東部に位置し、前橋南インターチェンジ一帯の土地区画整理事業に伴う道路建設に先立つ事前発掘調査です。調査の結果、平安時代の天仁元年（1108年）の浅間山噴火に伴う軽石に覆われた水田跡が発見されました。本水田跡は、高崎市日高遺跡に代表される日高条里との関連を考えられ、前橋・高崎大地に広く展開する貴重な条里製造構です。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面的ご配慮の結果といえます。また、湧水の中、泥んこになりながら直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成21年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
団長 依田 三次郎



## 例　　言

1. 本書は、前橋市南部拠点地区土地区画整理事業に伴う南部拠点地区遺跡群No.1 の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長依田三次郎）が主体となって実施し、調査業務は委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が行った。調査担当者は、同研究所員の有山径世・高橋清文・長井正欣である。
3. 発掘・整理調査期間は、平成20年10月28日～平成21年3月19日である。
4. 本遺跡は群馬県前橋市鶴光町360-1(ほかに所在し、遺跡のコード・面積は下記の通りである。

遺跡コード：20661　　面積：1面目 5,244 m<sup>2</sup>、2面目 2,495 m<sup>2</sup>、合計 7,739 m<sup>2</sup>
5. 本書の編集実務は、有限会社毛野考古学研究所が行い、同研究所員の高橋・有山が担当した。
6. 本文の執筆については、Iを山下歳信、II～IV・VII～VIII・X-1を高橋、V～VI・X-2・3を有山が担当した。IXの自然科学分析は株式会社古環境研究所に依頼した。
7. 調査に関わる資料は、一括して前橋市教育委員会文化財保護課が保管している。
8. 発掘調査・整理作業に携わった方々は下記の通りである。(順不同・敬称略)

[発掘調査] 高木義明 黒岩拓也 天野由利子 井口ヒロ子 碇井俊夫 狩野友好 駒形邦子 高井雄一  
高田進弘 竹内忍武 竹生正明 角田宇三郎 永井祐二 早津敏男 穂口久雄 松本喜久治 締貫瑛一  
[整理調査] 土井道昭 池内麻美 大塚規子 濑尾則子 半澤利江 深谷道子 真下弘美
9. 発掘調査の実施から報告書刊行に至る過程で、下記の機関・諸氏の御指導・御協力を賜った。記して感謝を申し上げる次第である。(順不同・敬称略)

株式会社スカイサーベイ カネコハウス有限会社 山下工業株式会社 有限会社スマヤ測量  
坂口 一 鈴木徳雄 外山政子 中村岳彦 前田和昭 三浦京子 山口逸弘

## 凡　　例

1. 掃図における座標値は世界測地系（国家座標第IX系）を使用した。方位記号は座標北を示す。
2. 等高線や造構断面図における水準値は海拔標高を示す（単位：m）。
3. 本書掲載の造構図ならびに遺物実測図の縮尺は、各掃図中にスケールを付した。
4. グリッドは、原点(X=37,300-Y=67,400)より西から東へX 0・X 1…、北から南へY 0・Y 1…と付した。
5. 本調査における造構断面図および出土遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局)を使用した。
6. 本書ではテフラの呼称として次の記号を用いる。

As-B:1108 (天仁元) 年に噴出した浅間Bテフラ。 Hr-Fa: 6世紀初頭に噴出した榛名一二ツ岳浜川テフラ。  
As-C: 4世紀初頭に噴出した浅間C軽石。
7. 条里型地割は六町方格（南北：条、東西：里）の地割を基準とした古代の土地区画制度である。これを36等分した一町四方の区画を坪という。
8. 本書掲載の第1図は国土交通省国土地理院発行1/200,000「長野」「宇都宮」、第2図は同院発行1/25,000「前橋」「高崎」、第3図は前橋市都市計画図1/2,500を一部改編して使用した。
9. 表紙には『昭和61年航空写真集前橋市全域』の空中写真を使用した。
10. 写真図版1には国土交通省国土地理院撮影（2001年10月）の空中写真を使用した。

# 目 次

## 序

I 調査に至る経緯 .....	1	5 平安時代末期の小穴（ピット） .....	22
II 遺跡の位置と環境 .....	1	VII 古墳時代から平安時代の遺構と遺物 .....	34
1 地理的環境 .....	1	1 Hr-FA混入土層水田 .....	34
2 歴史的環境 .....	2	2 Hr-FA層下水田 .....	34
III 調査の方法と経過 .....	4	3 級状遺構 .....	35
IV 遺跡の概要 .....	4	4 古墳時代から平安時代の溝 .....	35
1 遺構・遺物の概要 .....	4	5 古墳時代から平安時代の小穴（ピット） .....	40
2 基本層序 .....	6	6 古墳時代から平安時代の遺構外出土遺物 .....	40
V 中近世以降の遺構と遺物 .....	7	VIII 漢文時代の遺物 .....	40
1 中近世以降の溝 .....	7	IX 自然科学分析 .....	55
2 中近世以降の土坑・小穴（ピット） .....	10	1 土層とテフラ .....	55
VI 平安時代末期（As-B層下面）の遺構と遺物 .....	19	2 プラント・オバール分析 .....	58
1 As-B層下水田 .....	19	Xまとめ .....	60
2 As-B層下足跡列 .....	21	1 古墳時代から平安時代の水田・溝について .....	60
3 平安時代末期の溝 .....	22	2 平安時代末期の水田について .....	63
4 平安時代末期の井戸 .....	22	3 中近世以降の溝について .....	65

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置 .....	1	第23図 平安時代末期の溝（2） .....	33
第2図 周辺の地形 .....	3	第24図 古墳時代から平安時代の全体図（1） .....	41
第3図 調査区の位置 .....	5	第25図 古墳時代から平安時代の全体図（2） .....	42
第4図 基本層序 .....	6	第26図 Hr-FA混入土層水田 .....	43
第5図 中近世以降の全体図（1） .....	11	第27図 Hr-FA層下水田（1） .....	43
第6図 中近世以降の全体図（2） .....	12	第28図 Hr-FA層下水田（2） .....	44
第7図 中近世以降の溝（1） .....	13	第29図 級状遺構 .....	44
第8図 中近世以降の溝（2） .....	14	第30図 古墳時代から平安時代の溝（1） .....	45
第9図 中近世以降の溝（3） .....	15	第31図 古墳時代から平安時代の溝（2） .....	46
第10図 中近世以降の溝（4） .....	16	第32図 古墳時代から平安時代の溝（3） .....	47
第11図 中近世以降の溝（5） .....	17	第33図 古墳時代から平安時代の溝（4） .....	48
第12図 中近世以降の溝（6） .....	18	第34図 古墳時代から平安時代の溝（5） .....	49
第13図 平安時代末期の全体図（1） .....	23	第35図 古墳時代から平安時代の溝（6） .....	50
第14図 平安時代末期の全体図（2） .....	24	第36図 古墳時代から平安時代の溝（7） .....	51
第15図 As-B層下水田（1） .....	25	第37図 古墳時代から平安時代の溝（8） .....	52
第16図 As-B層下水田（2） .....	26	第38図 出土遺物 .....	53
第17図 As-B層下水田（3） .....	27	第39図 基本層序柱状図 .....	56
第18図 As-B層下水田（4） .....	28	第40図 プラント・オバール分析結果 .....	58
第19図 As-B層下水田（5） .....	29	第41図 植物組織体（プラント・オバール）の顕微鏡写真 .....	59
第20図 As-B層下水田（6） .....	30	第42図 古墳時代から平安時代における周辺の遺跡 .....	61
第21図 As-B層下水田（7） .....	31	第43図 2・3区8号溝の変遷 .....	62
第22図 平安時代末期の足跡列・溝（1）・井戸 .....	32	第44図 平安時代末期における周辺の遺跡 .....	64

## 表目次

表1 中近世以降の土坑・小穴計測表	10	表5 出土遺物観察表	54
表2 Aa-B層下水田区画計測表(1)	20	表6 テフラ検出分析結果	57
表3 Aa-B層下水田区画計測表(2)	21	表7 犀折率測定結果	57
表4 古墳時代から平安時代の小穴計測表	40	表8 プラント・オバール分析結果	59

## 図版目次

卷頭写真			
調査区(5区)から櫛名山・浅間山を望む	1区Aa-B層下水田作業風景(北西から)	2・3区1a号溝(南西から)	
平安時代末期の水田(5c区Aa-B層下水田)	3区Aa-B層下水田(北から)	2・3区1a号溝埋没状態(南西から)	
古墳時代の水田(5区B-Fa層下水田)	3区Aa-B層下水田(南から)	2・3区1a号遺物出土状態(北西から)	
古墳時代の溝(2・3区1号溝)	園版6	2・3区2a号溝(南西から)	
墓石序(5c区)	5b区Aa-B層下水田(南から)	2・3区3・4号溝(西から)	
図版1	5b区Aa-B層下水田(東から)	2・3区3・4号溝東半部(北西から)	
遺跡の位置と周辺の地形(上が北)	園版7	園版12	
2・3区1面、2・3区2面全景(南から)	5c・d区Aa-B層下水田(南から)	2・3区3・4号溝埋没状態(北から)	
図版2	5c区Aa-B層下水田(南から)	2・3区5号溝(南から)	
1区1号溝埋没状態(西から)	5c区Aa-B層下水田森み列(北から)	2・3区6号溝(南から)	
1区2号溝(西から)	5c区Aa-B層下水田畦畔(北から)	2・3区7号溝(南から)	
1区2号溝(北から)	5c区Aa-B層下水田畦畔断面(北から)	2・3区8b号溝(南から)	
1区2号溝埋没状態(南から)	園版8	2・3区8b号溝埋没状態(南から)	
2・3区11号溝(南から)	5d区Aa-B層下水田(南東から)	3区構造認定状況(北から)	
2・3区12号溝(南から)	5d区Aa-B層下水田畦畔(北から)	2・3区17~22号溝(南から)	
4区1号溝(東から)	5e・f区Aa-B層下水田(北から)	園版13	
4区1号溝(北から)	5e区Aa-B層下水田(東から)	2・3区17~22号溝(北から)	
図版3	5e区Aa-B層下水田大畠畔	2・3区18号溝(西から)	
5a区1面全景(北から)	・5区15号溝(北から)	2・3区18号溝埋没状態(東から)	
5区1号溝(南から)	5e区Aa-B層下水田畦畔(東から)	2・3区18号溝埋没状態(西から)	
5区2~5号溝(北から)	園版9	2・3区22号溝(北西から)	
5区2~4号溝(南から)	5e区Aa-B層下水田水口(北から)	2・3区21・22号溝埋没状態(南から)	
5区6号溝(南から)	5e区Aa-B層下水田作業風景(西から)	2・3区23号溝(北東から)	
5区7・10号溝(東から)	5f区Aa-B層下水田(南西から)	園版14	
5区8号溝(北から)	2・3区13・16号溝(南から)	2・3区26号溝(北東から)	
5区8号溝南側試掘坑(北東から)	2・3区1号足跡列(北東から)	2・3区27号溝(北東から)	
図版4	2・3区1号足跡列(南西から)	5区16号溝(北から)	
5区8b号溝埋没状態(北から)	5区1号井戸(東から)	5区17号溝(北東から)	
5区9号溝(北から)	5区11号井戸(北東から)	5区18・19号溝(東から)	
5区12号溝(南から)	園版10	5区18号溝(北から)	
5区13号溝(北から)	2区Hr-Fa混入土層水田(東から)	5区19号溝(北西から)	
5区14号溝(北から)	2区Hr-Fa層下水田(西から)	5区20号溝(北から)	
5区1号土坑(南から)	2・3区第2面と2区Hr-Fa層下水田(南から)	園版15	
5区2・3号土坑(北から)	5区Hr-Fa層下水田(東から)	出土遺物(2・3区1a号溝、2・3区2b号溝、2・3区3号溝、5区8b号溝、構造外)	
5区4号土坑(北から)	5区Hr-Fa層下水田畦畔(北から)		
図版5	2・3区試底遺構(西から)		
1区Aa-B層下水田(北から)	園版11		
1区Aa-B層下水田(南西から)	2・3区1号溝(北東から)		



## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市南部拠点地区土地区画整理事業に伴う公共道路建設事業に伴い実施された。

平成 20 年 9 月 12 日、前橋市南部拠点地区土地区画整理組合（仮称）設立準備委員会代表持田頼男より、埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。前橋市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長依田三次郎）（以下「調査団」という。）に対し調査実施について依頼した。しかし、既に市内数カ所において調査団直営による発掘調査が実施されており、調査団直営で実施することは困難と判断した。よって、民間調査会社による発掘調査を進める方針を決め、前橋市南部拠点地区土地区画整理組合（仮称）設立準備委員会代表持田頼男と調査団との間で平成 20 年 9 月 29 日付けで埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結した。

これに基づき、10 月 23 日付けで、依頼者である前橋市南部拠点地区土地区画整理組合（仮称）設立準備委員会代表持田頼男と調査団との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。その後、10 月 28 日付けで民間調査会社である有限会社毛野考古学研究所取締役長井正欣との間で委託契約を締結し、現地調査開始に至る。

なお、遺跡名称は「南部拠点地区遺跡群No.1」（市遺跡コード：20061）とした。

## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

本遺跡は、前橋市南東部に展開する前橋台地上の後背湿地に立地する（標高約 76 m）。前橋台地は、利根川が赤城山・櫛名山間から関東平野に流出する部分に広がる緩傾斜の扇状地性台地である。浅間山噴火に伴う山体崩壊（約 2 万年前）を原因とする「前橋泥流」が、利根川に沿って運ばれることで形成された。一般に、赤色角礫が混入し、黄褐色で縦まりが強い特徴を有するものの、本調査地点では灰白色で粘性が強かった。

前橋台地上には、河川・旧河川が北西—南東方向に流れ、各所に自然堤防や後背湿地を形成する。本遺跡の近辺では、西から南側にかけて利根川、北東側に燐気川が流下する。利根川は本遺跡周辺において前橋台地を貫流するが、前橋台地の北東側に位置する広瀬川低地帯から、天文年間（16 世紀）に洪水ないし人为的な改変により変流したものと想定されている。一方、燐気川は利根川の支流に相当するが、かつては前橋台地北部の湿地帶に源をもつ自然流路であった。この水源は、古墳時代から水田開発に利用されてきたことが明らかになっている。



第 1 図 遺跡の位置

## 2 歴史的環境

以下では、本調査と関連する縄文時代から中近世の事例を中心に、周辺の成果を概観する。

周辺地域における縄文・弥生時代の遺構調査例は少ない。ただし、藤川右岸の微高地上に立地する徳丸住田遺跡(4)で縄文時代草創期の微隆起線土器や有舌尖頭器を含む石器がまとまって検出されており、居住を伴う活動が想定されている。また、明瞭な遺構を伴わないことが多いものの、縄文時代前～後期・弥生時代中・後期の土器が各遺跡で散見されており、前橋台地における活動の痕跡が窺われる。

古墳時代になると遺跡数が飛躍的に増大する。集落は微高地上に占地するものの、時期ごとの変遷が著しい<sup>1)</sup>。前期の集落は後期に水田化してしまうような比較的標高の低い土地に展開することがあり、横手湯田遺跡(31)・横手早稲田遺跡(35)では周溝状の排水施設を伴う住居跡が構築されている。

後背湿地では、火山灰や洪流水堆積物を鍵層として、様々な時期の水田跡が調査されている。周辺では、4世紀初頭のAs-C層下水田、4世紀初頭以降のAs-C混入土層水田・As-C混入土層上水田、6世紀初頭のHr-FA層下水田、6世紀中葉のHr-FP層下水田・Hr-FP泥流層下水田などが報告されている<sup>2)</sup>。また、水田の開発に伴って水路や堰が整備されるようになり、多くの溝跡が調査されている。徳丸住田遺跡(4)・砂町遺跡(51)では、前期に開削された大溝が検出されており、2km程にわたって連続することが見込まれている。

これらの集落やその生産活動を牽引したであろう有力者層の墳墓として、広瀬川右岸の自然堤防上や井野川・鳥川流域に多くの古墳が集中する。これらは前期から後期まで継続して構築され、前期の元島名将軍塚古墳・前橋八幡山古墳・前橋天神山古墳、後期の金冠塚古墳(B)・綿貫音山古墳は、その規模や出土遺物などが卓越することで著名である。なお、前期には微高地上の集落域に接して方形周溝墓が構築され、周辺では西善尺司遺跡(2)・西善尺司II遺跡(2)・公田東遺跡(12)・下瀧梅崎遺跡(41)などで見受けられる。

奈良・平安時代には、律令制の導入と共に前橋市元総社町付近で国府や国分寺が造営される。砂町遺跡(51)では官道「東山道駅跡」に推定される道状遺構が見付かっており、その近辺の一万余田遺跡で大規模な掘立柱建物跡・柵列などが確認された。前橋台地の一般的な集落は前時期に引き続き微高地上に占地する<sup>3)</sup>。

後背湿地では、平安時代末期(1108年)のAs-B層下水田がほとんどの遺跡で検出されており<sup>4)</sup>、躍進的な水田城の拡充が窺われる。西田遺跡(20)では微高地上に營まれていた集落上に水田開発が及ぶ。これらの水田は一町四方の方格区画、「条里型地割」に沿うものが多い。

中近世には、微高地上に排水施設などの機能を有する環濠遺跡群が多数占地する。周辺では、室町時代の城郭跡である力丸城(a)、室町・戦国時代の宿阿内城(b)・新堀城(c)が著名で、力丸城は那波郡を支配する那波氏一族の居城、宿阿内城は那波氏の属城に想定されている。また、多くの遺跡で当該期の館跡・掘立柱建物跡・井戸跡・墓などが調査された<sup>5)</sup>。方形の敷地内に密集する西田遺跡(20)の土壇墓群は特記されよう。

生産遺構として、利根川変流に伴う洪水などに起因する中世のAs-B混入土層水田、1783年の降灰を原因とする近世のAs-A層下水田が報告されている。これらの水田は前時期の条里型地割を踏襲することが多い。水田の他に、洪水で埋没した畠や復旧溝(灰搔き孔)なども散見される<sup>6)</sup>。

註1) 古墳時代の堅穴住居跡が検出された遺跡：前期：2・4・13・31・35・41、中期：31・35、後期：9・10・12・13。

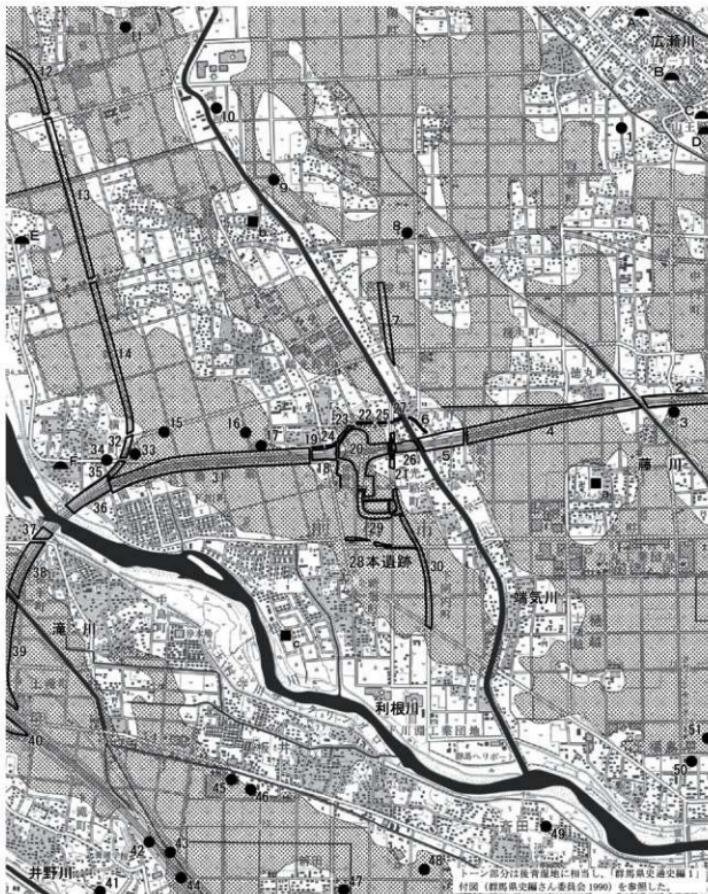
2) 古墳時代の水田跡が検出された遺跡－As-C混入土層水田：4・5・12・13・18・20・38・39、As-C混入土層上水田：30・37・39、Hr-FA層下水田：2・4・12・14・20・29・31・32・35・36・37・38・39、Hr-FP層下水田：31・35・37・38、Hr-FP泥流層下水田：32・36・38・39。

3) 奈良・平安時代の堅穴住居跡が検出された遺跡－1・2・4・5・6・12・13・20・22・25・26・27・37

4) 奈良・平安時代の水田跡が検出された遺跡－2・4・3・7・11・12・13・14・15・16・17・18・20・21・22・23・24・25・26・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・45・47・48・50・51。

5) 中近世の遺構が検出された遺跡－館跡など：1・2・3・4・5・6・12・13・15・18・20・23・26・29・31・37・38・39・40・41、大葬土坑：2・39・41、土坑墓：2・5・14・18・20・26・30・37。

6) 中近世の水田跡が検出された遺跡－As-B混入土層水田など：12・13・14・23・31・32・33・35・36・38、As-A層下水田など：12・39・40、復旧溝など：26・29・30・31・32・35・36・37・38・39・40・45・46・48。



- 1 西善尺司道跡 2 西善尺司道跡 3 西善尺司道跡 4 徳丸仲田道跡・徳丸仲田Ⅱ道跡・徳丸仲田Ⅲ道跡 5 徳丸高麗道跡・徳丸高麗Ⅱ道跡 6 徳丸高麗置道跡・徳丸高麗置Ⅳ道跡 7 萬地中田道跡 8 鹿田道跡 9 川曲道跡 10 佐子山道跡  
 11 上佐鳥中原前道跡・上佐鳥中原前Ⅰ道跡 12 公田東道跡 13 公田池尻道跡 14 鹿里平塚道跡 15 鹿里鉢面道跡・鹿里鉢面Ⅱ道跡  
 16 鹿里曲面Ⅱ道跡 17 鶴光路被引道跡 18 村中道跡 19 村中Ⅱ道跡 20 西田道跡 21 西田道跡 22 西田Ⅱ道跡 23 西田Ⅲ道跡  
 24 西田Ⅳ道跡 25 西田Ⅴ道跡 26 鶴光路被引道跡 27 鶴光路被引Ⅱ道跡 28 南部掘点地区道跡群No.1 29 下阿内光町堀道跡 30 下阿内前田道跡  
 31 横手湯田道跡・横手湯田Ⅱ道跡・横手湯田Ⅲ道跡・横手湯田Ⅳ道跡・横手湯田Ⅴ道跡・横手湯田Ⅵ道跡 32 横手宮田道跡 33 横手宮田Ⅱ道跡  
 34 井戸南道跡 35 横手早稲田道跡 36 横手早稲田道跡 37 西横手道跡群 38 宮宿手三段川道跡 39 上庵根町北道跡 40 上庵五反塙道跡  
 41 下庵崎道跡 42 滝川B道跡 43 上庵社宮道跡 44 滝川C道跡 45 天神前道跡 46 天神前Ⅱ道跡 47 中道西道跡 48 一本木道跡  
 49 田口下屋敷道跡 50 金免道跡 51 砂町道跡  
 A 鳥塚山古墳 B 金保古墳 C 文殊山古墳 D 阿努陀山古墳 E 下川測 3 号古墳 F 浅間神社古墳 a 九城 b 鶴阿内城 c 新堀城

第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

### III 調査の方法と経過

発掘調査は平成20年11月11日から平成21年3月19日にかけて実施した。調査区は事業完了後の道路部分に相当する狭長な範囲で、1・2 a～b・3・4・5 a～f区に分かれる<sup>1)</sup>。また、前橋市教育委員会の試掘調査結果を受けて2面の遺構確認面が設定され、第1面がAs-B層下水田、第2面がAs-C混入土層水田の検出を主目的としている。このうち、2 b区・3区・5 b～f区は第1・2面、1区・2 a区・5 a区は第2面のみを対象としていたが、遺構の検出状況から1区南側・2 a区・5 a区では第1面の調査も実施した。4区は調査区が狭いため第1面のみを対象とし、2 a・5 b区の第1・2面間ではHr-FA層下水田が見付かったことから調査面を部分的に増やした。なお、第2面は3m幅の試掘坑による調査に切り替えている。

各区調査に際しては、調査範囲・廃土置場等を設定し、安全対策を講じた。第1面は、中近世以降の耕作土等を重機で取り除き<sup>2)</sup>、As-B一次堆積層上面を露呈させた。5 a区では同層を包含する錯綜した細溝群が認められたが、近現代の工事車両による壊圧を原因とするものと判断された。重機による掘削後は、人力による遺構確認・発掘調査を進めている<sup>3)</sup>。As-B層下水田は、堆積する軽石を除去するとAs-B層下直前段階の水田面や畦畔が現出する。軽石は上位を勧籠、水田面上を移植ゴテで除去した。As-B層下水田の調査と同時に、As-B層灰以後の遺構確認にも努めている。また、As-B一次堆積層が後世の擾拌により削平された部分では下位の層が露出し、2 a区ではHr-FA混入土層中に耕作された水田の痕跡が認められた。

第2面は、As-C混入土層上面を調査目的とし、上層のHr-FA混入土層を重機で取り除いた<sup>4)</sup>。その後、人力による遺構確認・発掘調査を進めている<sup>5)</sup>。水田耕作土に比定されるAs-C混入土層は部分的に認められたものの、水田面や畦畔の検出には至らなかった。そこで、As-C層下以降の遺構・遺物検出に尽力した。たとえば、一次堆積のHr-FAを包含する無数の僅みが部分的に検出され、Hr-FA層下で営まれていた水田層に想定された。なお、第2面調査の完了後、廃土の埋め戻し<sup>6)</sup>をもって各区の発掘調査を終了としている。

遺構の名称は、各区の遺構種類ごとに通し番号を付けたが、2・3区9・10・14・15・24・25、5区11号構は欠番である。遺構の図化はトータルステーションによる地上測量、遺構写真は35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラで、調査の進捗に合わせて随時実施した。ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影も2度併用している<sup>7)</sup>。また、自然科学分析により層位の年代把握などにも努めた<sup>8)</sup>。調査成果の整理作業・報告書作成などは、発掘調査と一部平行して実施した。

註1) 本調査に平にして、6・7・8区が南側拠点地区道路群No.2として前橋市埋蔵文化財発掘調査團により執行されている。6区は1区の南側、7・8区は5区の北側に位置する。

2) 1区：11月21日、2区：11月11日～13日、3区：11月13～14日、4区：11月21日、5 a区：12月4～11日、5 b～f区1月7～20日。

3) 1区：12月9～26日、2区：11月13～12月3日、3区：11月18～12月3日、4区：2月11～30日、5区：12月16日～2月27日。

4) 1区：11月20～21日、1月21日、2 a区：11月14～17日、2 b区：12月3～4日、3区：12月4日、5区：2月24日～3月5日。  
なお、1区の表土剥ぎは海水のため、一時中断している。

5) 1区：2月9～26日、2区：11月17日～2月28日、3区：12月9日～2月19日、5区：2月26日～3月17日

6) 1区：2月25日～3月2日、2区：2月26～28日、3区：2月25日、4区：3月16日、5区：3月16日～3月19日

7) 2・3区第1面：11月27日、1・4・5区第1面、2・3区第2面：2月19日

8) 2月23日

### IV 遺跡の概要

#### 1 遺構・遺物の概要

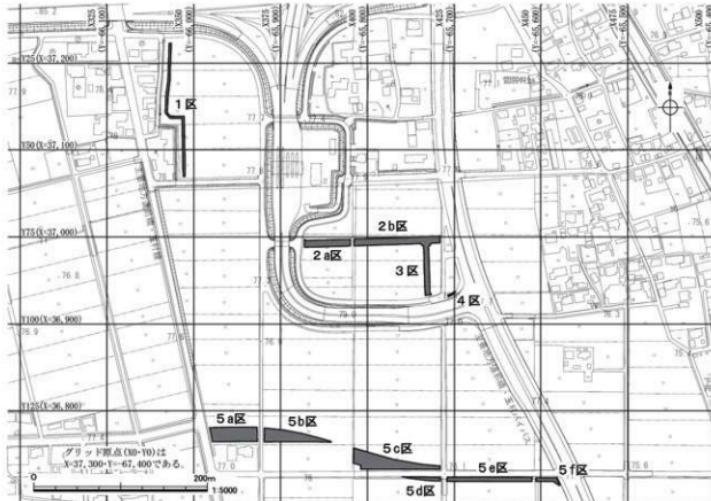
本遺跡では縄文時代から近代に至る遺構・遺物が検出され、中近世以降、平安時代末期、古墳時代から平安時代の3期にわたる土地利用形態を追うことができた。

中近世以降の遺構はAs-B層を擾拌するもので、厳密にはAs-B層下（1108年）以降を対象とする。該期の遺

構として、溝 23 条・土坑 4 基・小穴 15 基が確認された。平安時代末期の遺構は As-B 一次堆積層下で検出されたもので、降下年代である 1108 年に所産時期が求められる。該期の遺構として As-B 層下水田 71 区画・足跡列 1 条・溝 3 条・井戸 1 基・小穴 1 基が確認された。As-B 層下水田は As-B 一次堆積層が良好に残存する 1 区南端・3 区南側・5 b ~ e 区で確認された。古墳時代から平安時代の遺構は As-C 層を擾乱し、As-B 層下に埋没するもので、緻密には As-C 降下（4 世紀初頭）から As-B 降下までを対象とする。As-C 層が明確でない地点の遺構は、埋没状態・出土遺物などで判断した。該期の遺構として、Hr-FA 混入土層水田・Hr-FA 層下水田・歛状遺構・溝 27 条・小穴 5 基が確認されている。Hr-FA 混入土層水田は、水田面が残存せず、耕作の跡込みが及ばない畦畔部分が「疑似畦畔」として検出された。Hr-FA 層下水田は Hr-FA 一次堆積層が残存する 2 a ~ 5 b 区で検出されたが、水田面は削平され耕作痕のみが展開する。

出土遺物は、中世以降の陶磁器類、古墳時代から平安時代の土師器・須恵器・土製品、繩文時代の土器・石器などが出土している。調査面積に比して出土遺物量は少ない。また、小片資料でほとんど占められている。このうち、古墳時代前期・後期の土師器が卓越し、微高地縁辺に位置する 2 a 区に集中する。

ところで、本遺跡に隣接して、西田遺跡（前橋市埋蔵文化財発掘調査団、以下前橋市埋文 1996・1998・1999・2001、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、以下群馬県埋文 2002）、村中遺跡（前橋市埋文 2001、群馬県埋文 2002）・下阿内毫町畠遺跡（群馬県埋文 2001）・下阿内前田遺跡（群馬県埋文 2001）などが調査・報告されている（第 2 図）。これらは本地点と一連の遺跡であり、低地では As-B 層下水田や溝などが連続する。また、本調査区では明確に確認できなかった Hr-FA 層下水田や As-C 混入土層水田も検出されている。西田遺跡の微高地では平安時代（9 ~ 10 世紀）の住居跡が検出されており、水田を担う集落域に想定された。また、西田遺跡・村中遺跡で中世の屋敷跡に伴う溝が報告されており、本調査区との関連が予想される。



第 3 図 調査区の位置

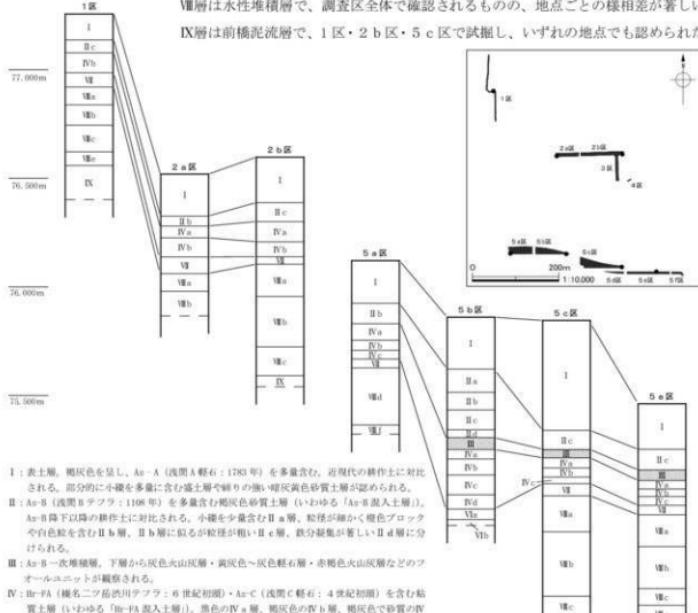
## 2 基本層序

調査区は北西から南東に傾斜し、2 a 区が微高地の脇に位置する。基本層序は以下に示す I ~ IX 層が認められた。I 層は表土層で、現代の水田耕作土などに対比される。II 層は As-B の混入土層で、全調査区で確認できた。II a ~ b 層の 4 級分が可能で、5 a・b 区において良好に残存する。III 層は As-B の一次堆積層で 1 区南側・3 区・5 c ~ e 区で 5 ~ 10cm ほど堆積する。IV 層は Hr-FA・As-C の混入土層で調査区全体で確認できた。IV a ~ d 層の 4 級分が可能で、5 b 区において良好に残存する。V 層は Hr-FA の一次堆積層で、Hr-FA 層下水田の分布域(2 a・5 b 区)でのみ検出された。VI 層は As-C の混入土層で、2 a 区・3 区南側・5 b 区にしか残存していない。5

b 区でのみ VI a・b 層に細分された。VII 層は黒色粘質土層で、調査区全体に展開する。

VIII 層は水性堆積層で、調査区全体で確認されるものの、地点ごとの様相差が著しい。

IX 層は前浜泥流層で、1 区・2 b 区・5 c 区で試掘し、いずれの地点でも認められた。



I : 表土層。褐灰色を呈し、As-A (浅根 A 軽石 : 1783 年) を多量含む。近現代の耕作土に対比される。部分的に小塊多量に含む盛土層や耕りの堆、暗灰褐色砂質土層が認められる。

II : As-B (深根 B テララ : 110 年) を多量含む褐灰色砂質土層 (いわゆる「As-B 混入土層」)。

As-B 層下の耕作土上に對比される。小塊を少額含む II a 層、堅物が細かく褐色ブロックや白色鉱物を含む II b 層、II b 層に似るが堅物が多い II c 層、鉄分凝集が著しい II d 層に分けられる。

III : As-B 一次堆積層。下層から灰色火成岩層、黄灰土へ灰色軽石層、赤褐色火成岩などのワオールユニットが観察される。

IV : Hr-FA (横谷二ノ岳改川テララ : 6 世紀初頭)・As-C (混成 C 軽石 : 4 世紀初頭) を含む粘土層 (いわゆる「As-VA 混入土層」)。黒色の IV a 層、褐灰色 IV b 層、褐灰色 IV c 層、灰黃褐色 IV d 層に分けられる。IV a 層は As-B 層下水田の耕土層に相当し、IV-FA や As-C の混入がない。IV b ~ d 層は Hr-FA・As-B 層下の水田耕作土に對比される。粘性が強いことから、洪水を起源とすることが推測される。また、IV e 層。

IV d 層には鉄分が多く含まれていた。

V : Hr-FA 一次堆積層、灰黄色アラフが観察される。

VI : As-C を含む黒色粘質土層 (いわゆる「As-C 混入土層」)。黒褐色の VI a 層と As-C を多量に含む黒色の VI b 層に分けられる。VI a 層は Hr-FA 層下水田の耕土層。VI b 層は As-C 層下の耕作土に対比される。

VII : 黒色堆積層。褐灰色・砂質土・砂質土などが互層状に堆積する。複雑な堆積状況を示し、観察地點ごとの種相も異なる。各細別層序は以下のとおりである。

■ a : 褐灰色粘質土、■ b : 灰色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック)、■ c : 白色粘土、■ d : 淡黄色粘土・明黄色粘土を含む)、■ e : 黑褐色砂質土 (白色粘土を含む)、■ f : 灰色砂質土 (一部砂質土)、■ g : 白色粘土 (淡黄色粘土を含む)、■ h : 黑褐色粘質土 (砂質土を含む)、■ i : 白色粘土・淡黄色粘土・砂を含む)

IX : 前浜泥流層。灰白色の粘質土で、赤色鐵分を含む。鉄分が多く認められる。

第 4 図 基本層序

## V 中近世以降の遺構と遺物

### 1 中近世以降の溝

#### 1区1号溝（遺構：第7図、図版2）

**位置：**1区南側1面に位置し、東・西側は調査区外にかかる。**形態：**東西に直行し、底面は東側が若干低い。断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-91°-E、残存長3.00m、幅0.75～1.02m、確認面からの深さ16～17cm。**埋没状態：**上層にAs-Bを含む黄灰色砂質土、下層にAs-B・黒褐色粘質土ブロックを含む黄灰色砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態およびAs-B一次堆積層の上面より掘り込まれていることから、中近世以降に比定される。

#### 1区2号溝（遺構：第7図、図版2）

**位置：**1区北側・中央1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。**形態：**南北にやや蛇行して走行し、3条の流路が確認される。土層断面観察地点を除き平面プランのみ調査した。断面は逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-1°-W、残存長85.00m、幅2.23～2.90m、壁面で確認した深さ55～69cm。**埋没状態：**主に、褐灰色砂質土が堆積し、下層には小繰が混入する。**遺物：**近現代の陶磁器片が少量出土した。**時期：**埋没状態や周辺遺跡との関係より、昭和40年代の用水路に想定される。

#### 2・3区8a号溝（遺構：第8図、図版2）

**位置：**2a区中央1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。**Hr-FA**混入土層水田と重複し、本溝が新しい。**形態：**北東～南西に直行し、底面は南側が若干低い。断面は弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-6°-E、残存長8.00m、幅0.35～0.45m、壁面で確認した深さ8cm。**埋没状態：**多量のAs-Bと黒色粘質土ブロックを含む暗灰色砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態・重複関係より、中近世以降に比定される。

#### 2・3区11号溝（遺構：第8図、図版2）

**位置：**2b区西端1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。**形態：**南北に直行し、底面は南側が若干低い。断面は弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-4°-E、残存長7.90m、幅0.67～1.15m、確認面からの深さ22～25cm。**埋没状態：**多量の砂と少量のAs-Bを含む灰色砂質土が堆積する。砂は下層により多い。**遺物：**磁器片・蔽石が各1点出土した。**時期：**埋没状態・出土遺物より、中近世以降に比定される。

#### 2・3区12号溝（遺構：第8図、図版2）

**位置：**2b区ほぼ中央1面に位置し、北側は調査区外にかかる。**形態：**南北に直行し、底面は南側が若干低い。断面は浅い弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-2°-E、残存長7.36m、幅0.40～0.62m、確認面からの深さ25～27cm。**埋没状態：**As-Bを含む灰色砂質土が堆積する。As-Bの混入は上層に多い。**遺物：**土師器・軟質陶器・陶器の小片が少量出土した。**時期：**埋没状態・出土遺物より、中近世以降に比定される。

#### 4区1号溝（遺構：第8図、図版2）

**位置：**4区西側1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。**形態：**南北に直行し、底面は南側が若干低い。断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-3°-E、残存長2.38m、幅0.43～0.56m、確認面からの深さ15～19cm。**埋没状態：**多量のAs-Bを含む褐灰色砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態およびAs-B混入土層の上より掘り込まれることから、中近世以降に比定される。

**5区1号溝**（遺構：第9図、図版3）

**位置**：5 a 区北東端1面に位置し、北側は調査区外にかかる。南側は試掘坑の先で検出されず、試掘坑内で収まるか、浅くなっていくものと推測される。**形態**：南北に直行し、南側は二股に分かれ。底面は南側が若干低い。断面は浅い弧状を呈する。**計測値**：主軸方位N-1°-W、残存長2.36 m、幅0.26～0.48 m、確認面からの深さ5～7 cm。**埋没状態**：主に、褐灰色砂質土が堆積する。**遺物**：出土しなかった。**時期**：埋没状態より、中近世以降に比定される。

**5区2号溝**（遺構：第10図、図版3）

**位置**：5 a 区東側1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。5区5号溝と重複し、本溝が新しい。**形態**：南北に直行する。南側でa～cの3条に枝分かれし、古い順に2 b号溝→2 c号溝→2 a号溝となる。2 c号溝は遺構確認面より高い位置を走行するため、平面図には表れていない。底面は南側が若干低い。断面は方形または逆台形状を呈する。**計測値**：主軸方位N-4°-W、残存長16.85 m、幅0.13～0.25 m、確認面からの深さ7～17 cm。**埋没状態**：灰褐灰色砂質土が堆積する。**遺物**：出土しなかった。**時期**：埋没状態・重複関係より、中近世以降に比定される。

**5区3号溝**（遺構：第10図、図版3）

**位置**：5 a 区東側1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。5区4・5・8 c号溝と重複し、本溝が5・8 c号溝より新しく、4号溝より古い。**形態**：南北にやや屈曲して走行し、底面は南側が若干低い。断面は逆三角形または逆台形状を呈する。**計測値**：主軸方位N-3°-W、残存長16.85 m、幅0.18～0.34 m、確認面からの深さ9～19 cm。**埋没状態**：主に、褐灰色砂質土が堆積する。**遺物**：土師器および陶器の小片がわずかに出土している。陶器は、天目茶碗や「志野」が確認された。**時期**：埋没状態・重複関係・出土遺物より、中世（16世紀）以降に比定される。

**5区4号溝**（遺構：第10図、図版3）

**位置**：5 a 区東側1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。5区3・5・8 c号溝と重複し、本溝が新しい。**形態**：南北にやや屈曲して走行する。中央から南にかけて幅が狭くなり、この辺りから二股に分かれると推測される。東側は遺構確認面より高い位置を走行するため、平面図には表れていない。底面は南側が若干低い。断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値**：主軸方位N-1°-W、残存長16.85 m、幅0.34～0.72 m、確認面からの深さ4～21 cm。**埋没状態**：主に、灰黄褐色砂質土が堆積する。**遺物**：出土しなかった。**時期**：自然科学分析の結果、近世（As-A 降下後）に比定される。

**5区5号溝**（遺構：第10図、図版3）

**位置**：5 a 区東側1面に位置し、南側は調査区外にかかる。5区2～4号溝と重複し、本溝が古い。**形態**：北西～南東に直行し、南東際で南へ屈曲する。底面は南側が若干低い。断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値**：主軸方位N-48°-W、残存長9.75 m、幅0.20～0.35 m、確認面からの深さ4～8 cm。**埋没状態**：褐灰色砂質土が堆積する。**遺物**：出土しなかった。**時期**：埋没状態・重複関係より、中近世以降に比定される。

**5区6号溝**（遺構：第10図、図版3）

**位置**：5 a 区中央北側1面に位置し、北側は調査区外にかかる。5区8 c・8 d号溝と重複し、本溝が新しい。**形態**：北西～南東に緩やかな弧を描くように走行し、底面は北側が若干低い。断面は西側が弧状を呈し、東側が中位に

段を有して立ち上がる。計測値：主軸方位N-21°-W、残存長5.18m、幅0.58~0.84m、確認面からの深さ18~21cm。埋没状態：主に、褐灰色砂質土が堆積する。遺物：出土しなかった。時期：埋没状態・重複関係より、中近世以降に比定される。

#### 5区7号溝（遺構：第9図、図版3）

位置：5a区西側1面に位置し、西側は調査区外にかかる。形態：東西にやや屈曲して走行し、底面は東側が若干低い。断面は浅い逆台形状を呈する。計測値：主軸方位N-89°-E、残存長26.52m、幅0.36~0.57m、確認面からの深さ6~8cm。埋没状態：褐灰色砂質土が堆積する。遺物：出土しなかった。時期：埋没状態より、中近世以降に比定される。

#### 5区8a号溝（遺構：第10~11図、図版3）

位置：5a区中央1面に位置し、南側は調査区外にかかる。5区8b・8c号溝と重複し、本溝が新しい。形態：南北に直行するが、北側を捉えることはできなかった。断面は弧状を呈する。溝の両脇には直径3~4cm程の木杭が打ち込まれていた。計測値：主軸方位N-4°-E、残存長3.00m、幅0.42~0.60m、壁面で確認した深さ42cm。埋没状態：主に、ぶい橙色および灰褐色粘質土が堆積する。最下層には多量の細砂、その上層には少量の小礫が混入する。遺物：近世の陶磁器片がわずかに出土した。時期：埋没状態・重複関係・出土遺物より、中近世以降に比定される。

#### 5区8b号溝（遺構：第10~11図、図版3~4 / 遺物：第38図、表5、図版15）

位置：5a区中央1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。5区8a・8c号溝と重複する。本溝が5区8c号溝より新しく、5区8a号溝より古い。形態：南北にやや蛇行して走行し、底面は南側が若干低い。断面は逆台形状を呈する。溝の両脇には直径3~4cm程の木杭が打ち込まれていた。計測値：主軸方位N-1°-E、残存長16.88m、幅2.80~3.00m、壁面で確認した深さ66cm。埋没状態：北側では下層に褐灰色砂礫、中~上層に礫を含む褐灰色砂質土が堆積する。南側では下層に粗砂を含む灰黄褐色粘質土、上層に小礫と粗砂を含む黄灰色粘質土が堆積する。遺物：南端底面付近の砂礫層から須恵器皿、上層から近世の陶磁器片が少量出土した。第38図17の須恵器皿は小型で器高が低く、器厚が厚いなどの特徴から古代末に比定されよう。口縁部外側に煤が付着しており、灯明皿としての使用が窺われる。時期：埋没状態・重複関係・出土遺物より、古代末~中世に比定される。

#### 5区9号溝（遺構：第9図、図版4）

位置：5a区西側1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。形態：南北に直行し、中に6.40m程の空間を有する。底面は南側がわずかに低い。断面は浅い弧状または逆台形状を呈する。計測値：主軸方位N-1°-E、残存長16.86m、北側幅1.10~1.23m、南側幅1.12~1.16m、確認面からの深さ11~23cm。埋没状態：主に、灰褐色砂質土が堆積する。遺物：出土しなかった。時期：埋没状態より、中近世以降に比定される。

#### 5区10号溝（遺構：第9図、図版3）

位置：5a区西側1面に位置する。形態：北東~南西に直行し、底面は北側が若干低い。断面は浅い弧状を呈する。計測値：主軸方位N-46°-E、残存長7.47m、幅0.19~0.34m、確認面からの深さ2~4cm。埋没状態：灰褐色砂質土が堆積する。遺物：出土しなかった。時期：埋没状態より、中近世以降に比定される。

## 5区12号溝（遺構：第12図、図版4）

位置：5 c・d区1面に位置し、北・南側、5 c・d区間に調査区外にかかる。5区As-B層下水田の小畦畔と重複し、本溝が新しい。形態：南北に直行し、底面は南側が若干低い。断面は逆台形状を呈する。計測値：主軸方位N-1°-E、残存長18.30m、幅0.24～0.37m、壁面で確認した深さ13～14cm。埋没状態：主に、多量のAs-Bを含む黄灰色砂質土が堆積する。遺物：出土しなかった。時期：As-B混入土層の上面から掘り込まれており、中近世以降に比定される。

## 5区13号溝（遺構：第12図、図版4）

位置：5 c区東端1面に位置し、北側は調査区外にかかる。5区As-B層下水田の小畦畔と重複し、本溝が新しい。形態：南北に直行する。底面には凹凸が見られ、南側が若干低い。断面は浅い弧状を呈する。計測値：主軸方位N-3°-W、残存長4.28m、幅0.62～0.79m、確認面からの深さ5～7cm。埋没状態：多量のAs-Bを含む灰褐色砂質土が堆積する。遺物：出土しなかった。時期：埋没状態・重複関係より、中近世以降に比定される。

## 5区14号溝（遺構：第11図、図版4）

位置：5 c区東側1面に位置し、南側は調査区外にかかる。5区As-B層下水田の小畦畔と重複し、本溝が新しい。形態：調査区内では「コ」字状を呈し、区画溝の形態をとる。底面はほぼ同じ標高で、多数の凹凸が認められる。断面は浅い逆台形状を呈する。溝の区画内に5区2～4号小穴が確認されたものの、配置に規則性はない。計測値：南北軸方位N-1°-W、東西長4.63m、南北長3.72m以上、幅0.23～0.41m、確認面からの深さ4～7cm。埋没状態：多量のAs-Bを含む褐灰色砂質土が堆積する。遺物：出土しなかった。時期：埋没状態・重複関係より、中近世以降に比定される。

## 5区15号溝（遺構：第12図、図版8）

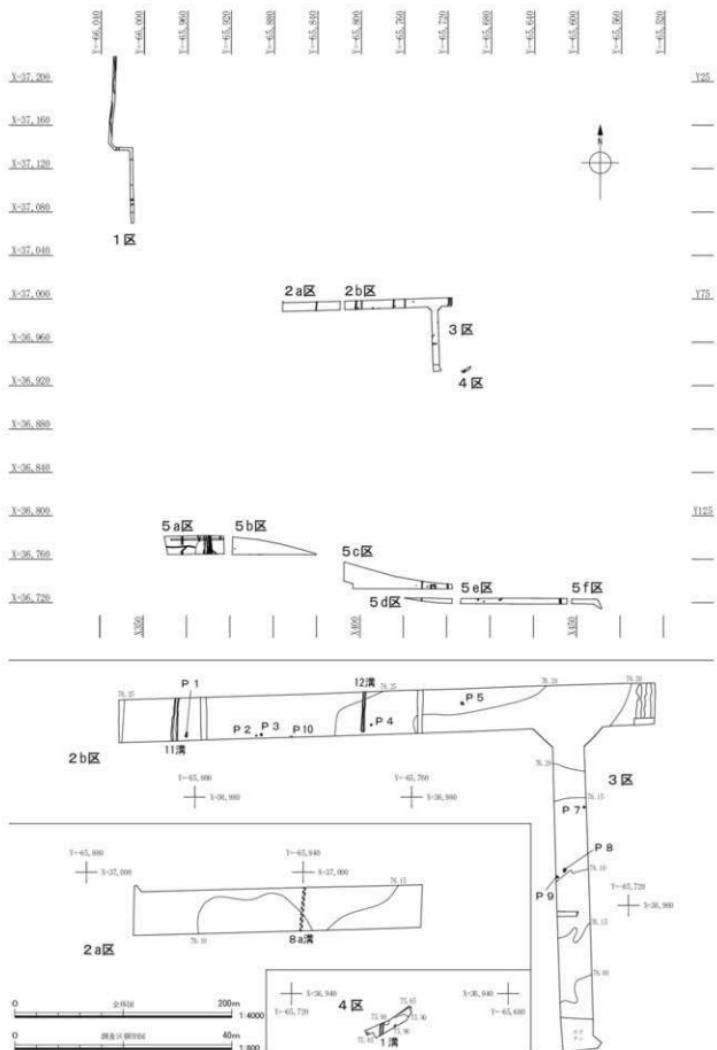
位置：5 e区東側1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。5区As-B層下水田の坪境に当たる2号大畦畔の西脇を並走する。形態：南北に直行し、底面は南側が若干低い。断面は逆台形状を呈する。計測値：主軸方位N-2°-W、残存長5.06m、幅1.46～1.50m、確認面からの深さ44～46cm。埋没状態：下層に黒褐色砂質土、上層に小礫を含む褐灰色砂質土が堆積する。遺物：近現代の陶器片・瓦の小片が多量に出土した。時期：埋没土3層中からビニールが出土しており、近現代の用水路と推定される。

## 2 中近世以降の土坑・小穴（ピット）（遺構：第5～6図、表1、図版4）

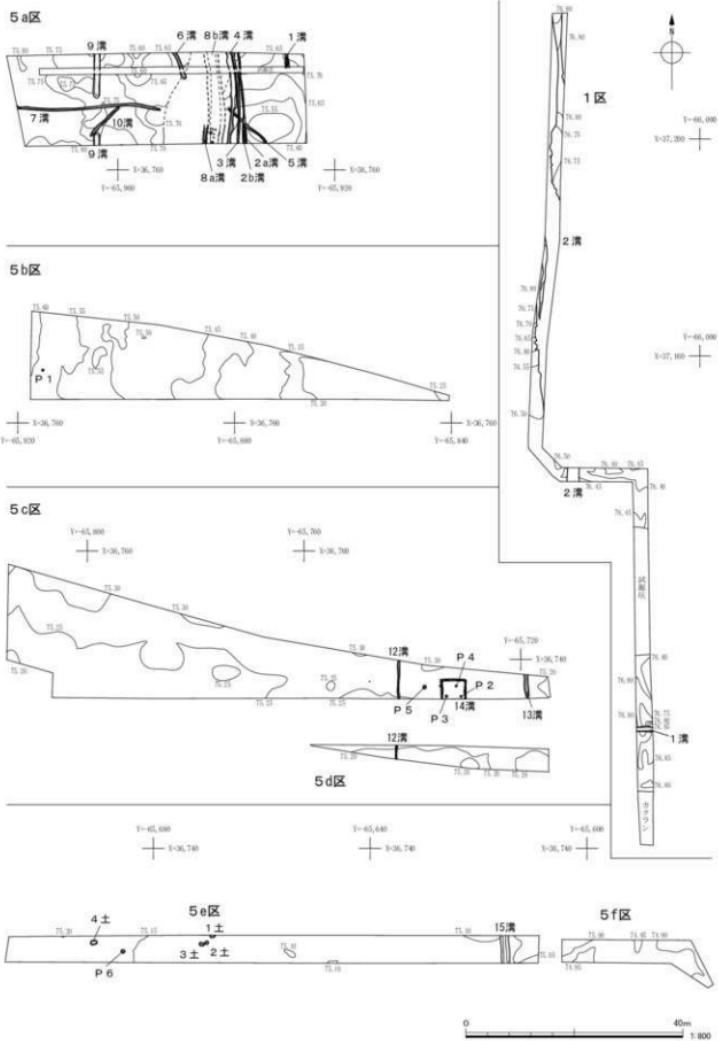
土坑は5 e区で4基が検出された。形態・規模・埋没状態とともに類似していることから、同一の性格を有するものと推測される。小穴は2 b区で6基、3区で3基、5 b区で1基、5 c区で4基、5 e区で1基が検出された。配置に規則性を見出すことはできなかった。土坑・小穴ともに多量のAs-Bを含む褐灰色砂質土が埋没する。

表1 中近世以降の土坑・小穴計測表

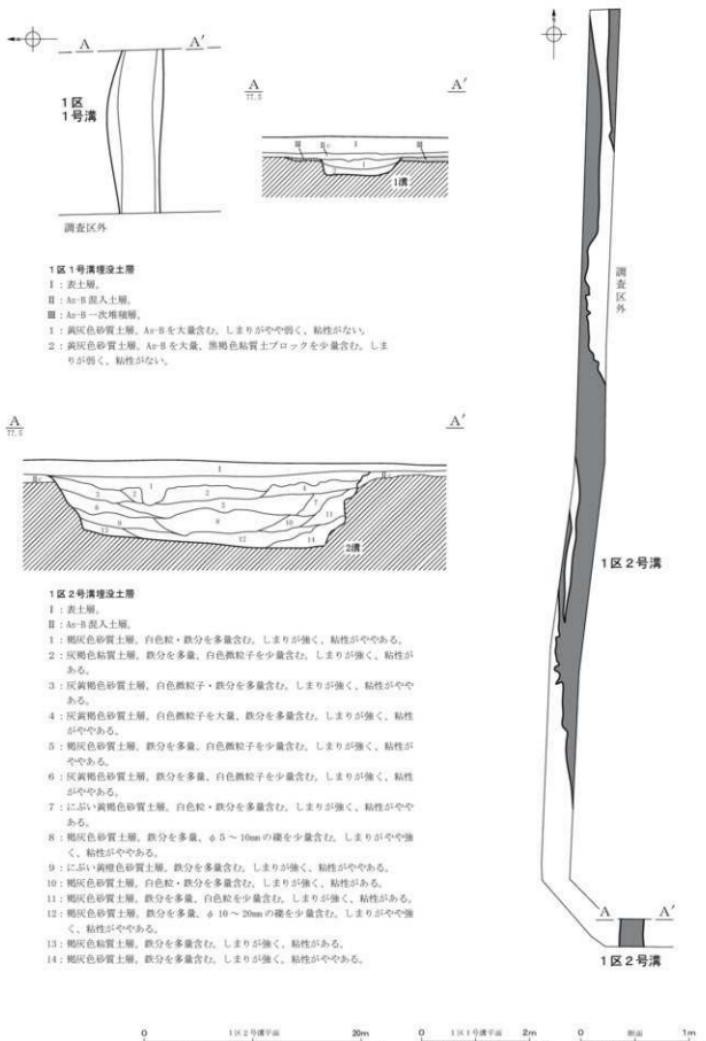
遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ
5区1号土坑	92・44・19	5区2号土坑	75・62・16	5区3号土坑	95・68・20	5区4号土坑	122・82・15				
2・3区P1	45・40・17	2・3区P2	21・21・17	2・3区P3	45・35・3	2・3区P4	34・39・11				
2・3区P5	60・43・2	2・3区P7	40・34・20	2・3区P8	63・44・33	2・3区P9	50・38・5				
2・3区P10	45・26・5	5区P1	39・38・61	5区P2	37・32・32	5区P3	46・39・25				
5区P4	36・34・26	5区P5	29・24・13	5区P6	74・64・16						



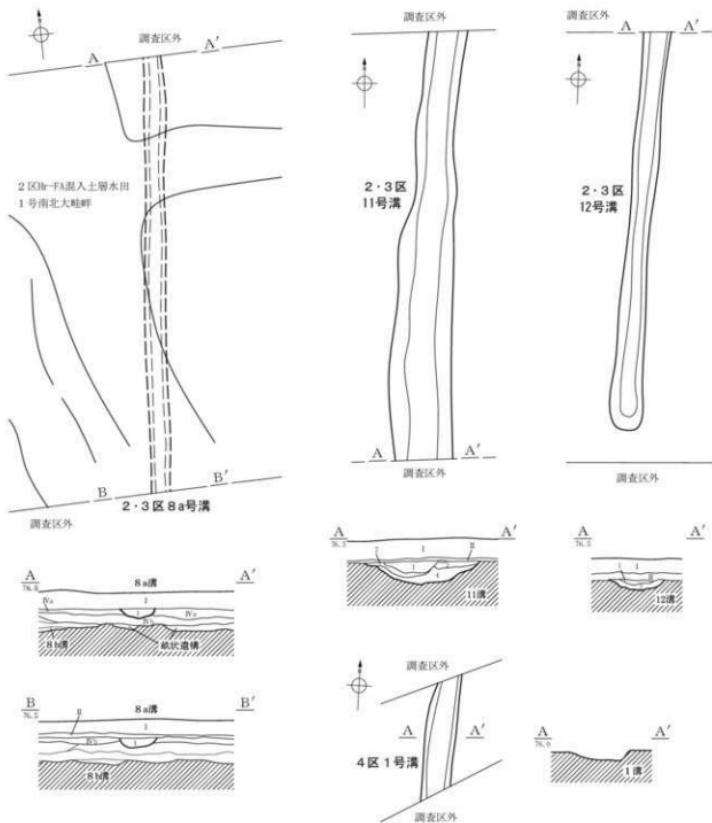
第5図 中近世以降の全体図（1）



第6図 中近世以降の全体図（2）



第7図 中近世以降の溝（1）



## 2・3区8a号溝埋没土層

- I : 黑土層。  
II : Ar-B混入土層。  
IV : Ohr-FA混入土層。  
1 : 硫灰色砂質土層。Ar-Bを大量、黑色粘質土上部ロック・白色粘・鉄分を多量、Ohr-FAを微量含む。しまりが非常に強く、粘性がややある。

## 4区1号溝埋没土層

- 1 : 硫灰色砂質土。Ar-Bを多量含む。しまりが強く、粘性がややある。

## 2・3区11号溝埋没土層

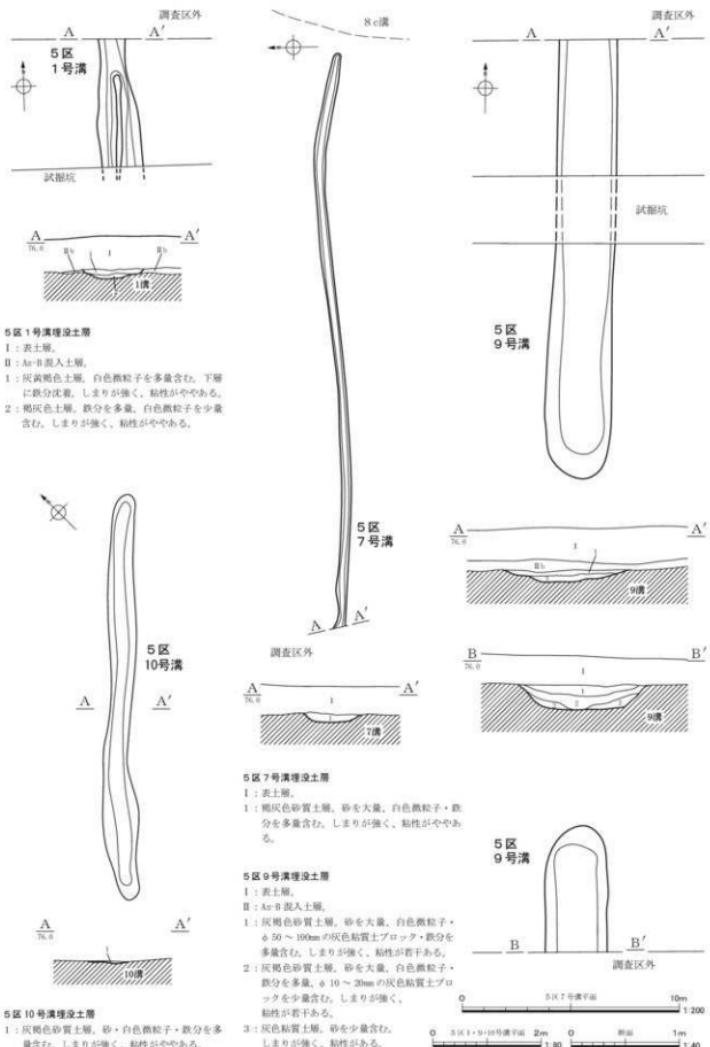
- I : 黒土層。  
II : Ar-B混入土層。  
1 : 硫灰色砂質土層。白色粘・砂・Ar-B・鉄分を多量含む。しまりが強く、粘性がある。  
2 : 灰色粘質土層。鉄分を大量、白色粘・砂を多量、Ar-Bを少量含む。しまりが強く、粘性がある。  
3 : 硫灰色砂質土層。鉄分を多量、鉄分を多量含む。しまりが強く、粘性がある。  
4 : 灰色粘質土層。砂を大量、白色粘・Ar-B・鉄分を少量含む。しまりが強く、粘性がない。

## 2・3区12号溝埋没土層

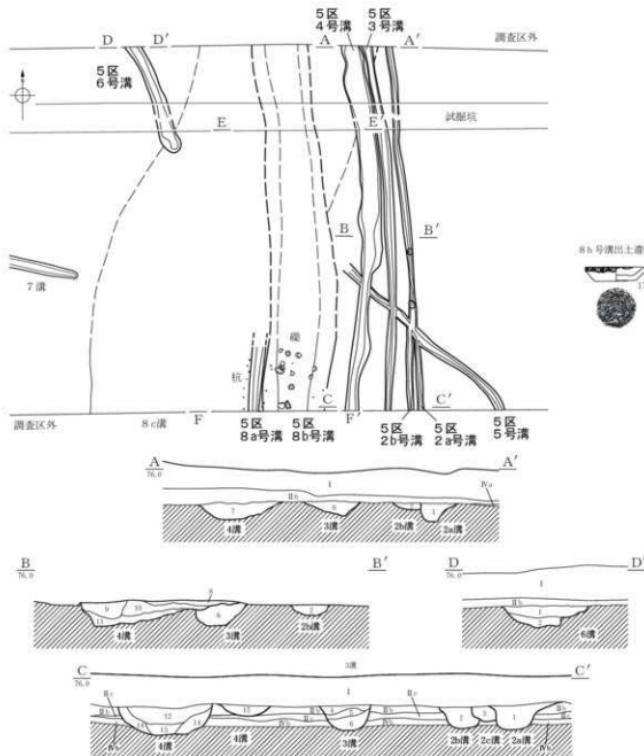
- 1 : 黒土層。  
II : Ar-B混入土層。  
1 : 硫灰色砂質土層。Ar-Bを大量、白色粘・鉄分を多量含む。しまりが非常に強く、粘性がない。  
2 : 灰色砂質土層。白色粘を多量、Ar-B・鉄分を少量含む。しまりが非常に強く、粘性がない。



第8図 中近世以降の溝（2）



第9図 中近世以降の溝（3）



## 5区2～5号溝埋没土層

- I : 表土層。
- IV : Hr-FA 混入土層。
- II : Ae-B 混入土層。
- 1 : 灰黃褐色砂質土層。砂を大量、白色粒・鉄分を多量含む。しまりが強く、粘性がややある。2a. 滝。
- 2 : 灰黃褐色砂質土層。砂を大量、ø 10 ~ 40mm の礫を少量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。2 b. 滝。
- 3 : 灰黃褐色砂質土層。砂・鉄分を多量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。3. 滝。
- 4 : 灰黃褐色砂質土層。しまりが強く、粘性がある。3. 滝。
- 5 : 灰黃褐色砂質土層。鉄分を多量、白色粒を少量含む。しまりが強く、粘性がややある。3. 滝。

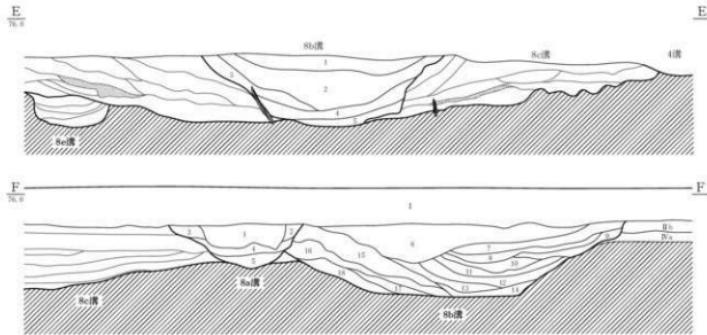
- IV : Hr-FA 混入土層。
- II : Ae-B 混入土層。
- 8 : 灰黃褐色砂質土層。しまりが強く、粘性がある。4. 滝。
- 9 : 灰黃褐色砂質土層。白色粒を多量、鉄分を少量含む。しまりが強く、粘性がある。4. 滝。
- 10 : 灰黃褐色砂質土層。鉄分を多量、白色粒を少量含む。しまりが強く、粘性がある。4. 滝。
- 11 : 灰黃褐色砂質土層。白色粒を多量、鉄分を少量含む。しまりが強く、粘性がある。4. 滝。
- 12 : 灰黃褐色砂質土層。鉄分を多量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。4. 滝。
- 13 : 灰褐色砂質土層。白色粒・鉄分を多量含む。しまりが強く、粘性がややある。4. 滝。

- 7 : 灰褐色砂質土層。白色粒・鉄分を少量含む。しまりがやや強く、粘性がある。4. 滝。
- 14 : 灰褐色砂質土層。白色粒・鉄分を少量含む。しまりがやや強く、粘性がある。4. 滝。
- 15 : 灰褐色砂質土層。鉄分を多量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。4. 滝。

## 5号溝埋没土層

- I : 表土層。
- II : Ae-B 混入土層。
- 1 : 灰褐色砂質土層。白色粒・鉄分を多量含む。しまりが強く、粘性がある。
- 2 : 灰褐色砂質土層。砂を大量、白色粒・鉄分を多量含む。しまりが強く、粘性がある。

第10図 中近世以降の溝（4）



5区Bb号溝埋没土層 (E-E')

- 1 : 褐灰色砂質土層。鉄分を多量、白色粘・橙色粘を少量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。
- 2 : 白色粘土層。鉄分を多量、白色粘粒子を少量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。
- 3 : 褐灰色砂質土層。鉄分を多量、白色粘質土を少量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。
- 4 : 褐灰色砂質土層。鉄分を多量、褐色粘質土を少量含む。しまりがやや強く、粘性が若干ある。
- 5 : 褐灰色砂質土層。鉄分を多量、褐色粘質土を少量含む。しまりがやや強く、粘性が若干ある。
- 6 : 褐灰色砂質土層。鉄分を多量含む。しまりがやや強く、粘性がある。
- 7 : 褐色粘土層。白色粘・鉄分を多量含む。しまりがやや強く、粘性がある。
- 8 : 褐色粘土層。鉄分を多量含む。しまりがやや強く、粘性がある。
- 9 : 褐色粘土層。鉄分を多量含む。しまりがやや強く、粘性がある。
- 10 : 褐色粘土層。しまりがやや強く、粘性がある。
- 11 : 灰黄色粘土層。粗砂を層状に含む。しまりがやや強く、粘性がある。
- 12 : 褐灰色粘土層。粗砂を層状、φ 10~30 mm の小塊を少量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。
- 13 : 灰黃褐色粘土層。砂を多量、φ 5~6 mm の砂礫を多量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。
- 14 : 灰色砂質土層。しまりが弱く、粘性がない。
- 15 : ぶいき褐色粘土層。白色粘を少量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。
- 16 : 褐色粘土層。細砂を多量含む。しまりがやや強く、粘性がある。
- 17 : 灰黃褐色粘土層。粗砂を層状に含む。しまりがやや強く、粘性がややある。
- 18 : 褐灰色粘土層。底面に鉄分沈着。しまりがやや強く、粘性がややある。

5区B a号溝埋没土層 (F-F')

I : 表土層。

II : Ar-B 厚入土層。

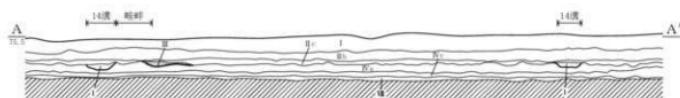
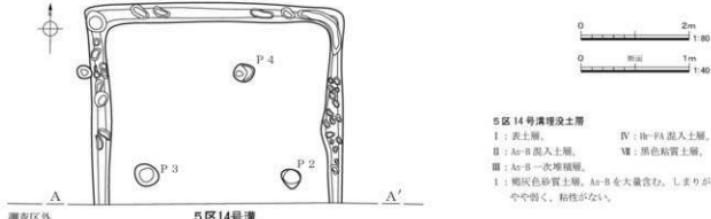
IV : Br-FA 混入土層。

VII : 黒色粘土層。

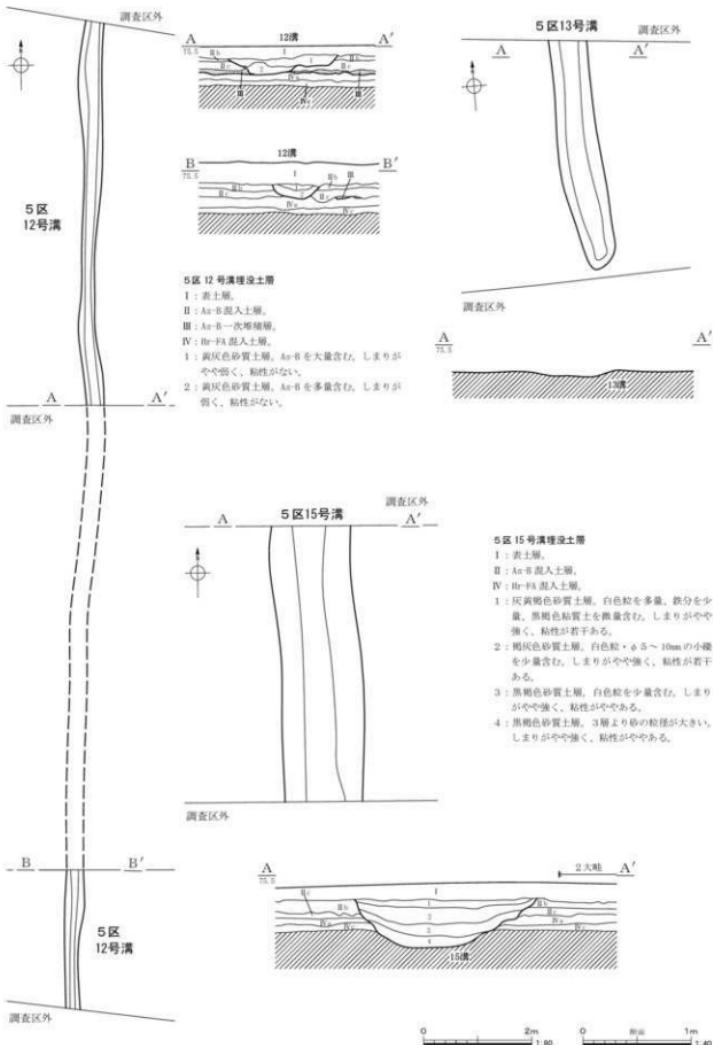
VIII : 黑色粘土層。

IX : 褐灰色砂質土層。Ar-B を大量含む。しまりがやや弱く。粘性がない。

X : 褐灰色砂質土層。底面に鉄分沈着。しまりがやや強く。粘性がややある。



第11図 中近世以降の溝 (5)



第12図 中近世以降の溝(6)

## VI 平安時代末期（As-B層下面）の遺構と遺物

### 1 As-B層下水田

As-B一次堆積層が1区南端・3区南側・5b～e区で良好に残存しており、これを取り除くと、降灰時の1108年に所産時期が求められるAs-B層下水田が検出された。後世の耕作により水田面が検出されなかつた1区北側・3区北側・4区についても、周辺跡の状況を鑑みて本来は水田が存在していたと判断される。

水田面は北から南へ、さらに西から東へとゆるやかに傾斜する。標高は1区で76.84m、5e区で75.09mを測り、直線540mの距離で比高は1.80mとなる。畦畔は頂部が削られているものの、比較的明瞭に確認できた。区画は基本的には南北・東西に走行する畦畔により長方形を志向しているが、5区の区画57～60のように東西畦畔を斜めに設定し、変形区画を採用しているものもある。狭長な調査区のため面積を把握できる区画は少ないが、最小で14.95m<sup>2</sup>、最大で236.54m<sup>2</sup>以上を確認している。水田耕作土はHt-FAの混入する黒褐色粘質土で、粘性は非常に強い。水田面の状態は区画により違いが看取される。2b区東側では南西～北東方向に直行する足跡列が検出された。なお、水田全体から後世の水田耕作に起因するAs-Bを二次的に包含する産みが多数検出され、特に、5c区では大型の不整形な穴が顕著に見られた。灌漑用の基幹水路には5区8c号溝が想定される。

#### 1区 As-B層下水田（遺構：第15図、表2、図版5）

**位置：**1区南端1面に位置する。**残存状況：**南端で3～5cm程のAs-B一次堆積層が水田面上を覆っていた。北側は1区2号溝の存在および後世の耕作で残存しておらず、水田の痕跡は確認できなかった。**地形：**北から南へ緩傾斜する。水田面の最高位は76.85m、最低位は76.80mである。**区画：**東西の小畦畔が1条検出されたのみで、区画は不明である。**畦畔：**幅は105～140cm、水田面との比高は2～3cmである。畦畔は低く崩れた印象を受けるが、上面にAs-B一次堆積層が薄く残存していることから、As-B降下時には既に現況を呈していたと推測される。**水口：**畦畔が途切れる東側に存在する可能性がある。**水田面の状態：**なだらかで浅い凹凸が見られる。**遺物：**出土しなかつた。

#### 3区 As-B層下水田（遺構：第15図、表2、図版5）

**位置：**3区南側1面に位置する。**残存状況：**南側で3～5cm程のAs-B一次堆積層が水田面上を覆っていた。**地形：**概ね、北から南へ、さらに西から東へと緩傾斜する。水田面の最高位は76.12m、最低位は76.08mである。北から南へと段差を付けて耕作され、各水田面間の比高は、北から南へ1～5cm、西から東へ0～1cmである。段差は東西方向に比べ、南北方向が高い。**区画：**8区画が確認されたものの、全容が把握できる区画はない。**畦畔：**幅は南北畦畔が60～108cm、東西畦畔が43～101cmである。水田面との比高は、南北畦畔が2～7cm、東西畦畔が3～5cmである。南北畦畔は1町方格地割の坪境に位置しており、1号大畦畔と呼称した。方位はN-2°～Wを示す。**水口：**3カ所で確認された。すべて東西畦畔の端に設けられ、幅は18～22cmである。**水田面の状態：**なだらかで浅い凹凸が見られる。**遺物：**出土しなかつた。

#### 5区 As-B層下水田（遺構：第16～21図、表2・3、図版6～9）

**位置：**5b～f区1面に位置する。5区12～15号溝、5区1～4号土坑、5区1～5号ピットと重複し、本水田が古い。**残存状況：**5b～e区で1～9cm程のAs-B一次堆積層が水田面上を覆っていた。5b区東側が最も良好に残存し、一部で赤褐色火山灰のユニットも確認できた。逆に、5c区北西・南東側、5e区南西側、5f区には後世の耕作による擾乱が及んでいた。**地形：**概ね、北から南へ、さらに西から東へと緩傾斜する。水田面の最高位は75.60m、最低位は75.05mである。水田面は北から南、西から東へと段差を付けて構築される。

各水田面間の比高は、5 b 区が北から南へ1～2 cm・西から東へ1～8 cm、5 c～e 区が北から南へ1～6 cm・西から東へ0～2 cmである。5 b 区は東西方向の段差が高く、逆に、5 c～e 区では南北方向の段差が高いといふ異なる様相を示す。区画：63 区画が確認されたものの、全容が把握できたのは 4 区画のみであった。面積は、最小が区画 6 の 14.95 m<sup>2</sup>、最大が区画 21 の 236.54 m<sup>2</sup>以上である。平面形は、直線的な畦畔による長方形区画が大半を占めるが、中には畦畔がやや弧状を呈するもの（区画 11・12）や、北東～南西方向の斜畦畔により変形区画をなすもの（区画 57～60）も散見される。畦畔：一町方格地割の坪境には、2 条の南北畦畔が検出され、西から 1・2 号大畦畔と呼称した。方位は N ～ 1°～W を示す。大畦畔の幅は 129～178 cm である。5 c 区 1 号大畦畔のみ幅 63～105 cm と狭い。水田面との比高は 6～9 cm である。なお、5 d 区 1 号大畦畔の中央からは、幅 57～60 cm の浅い溝が確認された。小畦畔の幅は、南北が 30～124 cm で平均 57 cm、東西が 30～110 cm で平均 59 cm である。水田面との比高は、頂部まで As-B 一次堆積層が覆っている畦畔で 4～8 cm を計測した。畦畔の機能を鑑みると低い印象を受ける。また、斜畦畔による変形区画 59・60 は、明確な畦畔の高まりを持たない。

水口：5 c 区で 3 カ所、5 e 区で 4 カ所が確認された。いずれも東西畦畔に設置される。5 c 区では一边の東端に設けられ、区角 29・31 で幅 28～31 cm、区角 41 で幅 93 cm である。5 e 区では一边の東および西端に設けられ、幅 15～25 cm である。

**水田面の状態：**水田面は 1 号大畦畔を境に差異が見られる。1 号大畦畔の西側はなだらかで凹凸が浅く、明確に足跡と判別できるものも少ない。対して東側は凹凸が大きく深めで、5 e 区では区画 54・57 に瘤状の土塊（長径 12～20 cm、高さ 3～4 cm）が多々見られる。東側では、区画 27 で北西～南東方向に走行する円形の崖み列や、区画 28 で南北小畦畔と並行する浅い崖み列なども見られる。

**遺物：**5 b 区から土師器壺および須恵器甕胴部の小片が各 1 点出土している。

表 2 As-B 層下水田区画計測表（1）

面積は畦畔下端面の範囲。田面比高は同一区画内の最大値。畦畔高は田面と畦畔の比高を示す。

調査区	区画 No.	面積 (m <sup>2</sup> )	長軸 (m)	短軸 (m)	田面中央標高 (m)	田面比高 (cm)	南北畦畔高 (cm)	南北畦畔幅 (cm)	東西畦畔高 (cm)	東西畦畔幅 (cm)	備考
1 区	1	—	—	—	76.84	1	—	—	—	—	—
	2	—	—	—	76.83	1	—	—	3	105～140	—
3 区	1	—	—	—	76.10	2	—	—	—	—	—
	2	—	—	6.55	76.08	3	—	—	3	60～70	水口あり
	3	—	—	5.40	76.03	1	—	—	3	42～72	水口あり
	4	—	—	—	76.01	2	—	—	5	48～53	—
	5	—	—	—	76.08	1	3	60～77	—	—	水口あり
5 b 区	6	—	—	10.60	76.06	2	2	73～108	4	92～101	水口あり
	7	—	—	6.05	76.00	1	7	70～80	4	76～89	—
	8	—	—	—	75.98	0	4	85～90	5	62～73	—
	9	—	—	—	75.64	0	—	—	—	—	—
	10	—	—	6.95	75.59	2	6	72～85	—	—	—
	11	—	—	8.79	75.51	0	8	54～58	—	—	—
	12	—	—	—	75.50	0	7	39～55	—	—	—
5 c 区	13	—	—	—	75.64	0	—	—	1	49～51	—
	14	14.95	7.05	2.12	75.58	1	7	68～82	3	46～65	—
	15	21.84	8.40	2.60	75.50	5	6	35～64	6	32～54	—
	16	—	—	2.05	75.49	2	6	41～48	5	30～46	—
	17	—	—	—	75.48	0	5	48～50	—	—	—
	18	—	—	—	75.61	2	—	—	5	64～71	—
	19	—	—	11.13	75.55	4	5	50～68	5	62～74	—
	20	—	—	9.95	75.47	0	5	48～76	5	57～71	—
	21	—	—	7.80	75.45	4	6	44～60	6	50～78	—
	22	—	—	10.70	75.39	8	6	40～79	7	50～60	—
	23	—	—	5.50	75.32	1	3	40～72	—	—	1 号井戸と重複
	24	—	—	11.45	75.28	0	6	44～56	—	—	—
	25	—	—	75.27	0	7	42～45	—	—	—	—

表3 As-B層下水田区画計測表(2)

面積は耕作下限線の範囲、田面比高は同一区画内の最大値、耕作高は田面と耕作の比高を示す。

調査区	区画 No.	面積 (a)	長軸 (m)	短軸 (m)	面積中央 標高 (m)	面積比高 (cm)	南北北軸高 (cm)	南北東軸幅 (cm)	東西北軸高 (cm)	東西東軸幅 (cm)	備考
5 c 区	18	—	—	—	75.27	2	—	—	—	—	—
	19	—	—	—	75.19	1	—	—	6	80 ~ 102	
	20	—	—	—	75.19	0	—	—	4	53 ~ 62	
	21	—	21.12	—	75.30	4	4	39 ~ 72	—	—	
	22	—	—	5.25	75.28	3	1	51 ~ 69	—	—	
	23	(79.58)	11.45	6.95	75.28	0	3	55 ~ 72	5	59 ~ 86	
	24	61.41	8.90	6.90	75.24	3	4	43 ~ 72	3	45 ~ 80	
	25	34.71	6.70	5.18	75.28	0	1	50 ~ 70	5	43 ~ 63	
	26	—	—	—	75.22	2	—	—	4	63 ~ 87	
	27	—	14.25	—	75.30	1	6	51 ~ 71	4	50 ~ 82	
	28	—	15.65	—	75.32	0	4	47 ~ 64	—	—	水口あり
	29	130.40	16.00	8.15	75.28	2	6	30 ~ 55	3	53 ~ 84	水口あり
	30	—	8.20	—	75.24	0	9	32 ~ 45	6	58 ~ 64	
	31	—	8.20	—	75.25	0.5	2	46 ~ 49	2	45 ~ 71	水口あり
	32	—	18.95	—	75.28	1	2	48 ~ 62	—	—	
	33	—	19.23	—	75.26	2	2	56 ~ 68	3	52 ~ 75	
	34	—	13.20	—	75.28	1	3	61 ~ 86	—	—	
	35	—	(13.20)	—	75.25	3	4	54 ~ 57	0.5	49 ~ 72	
	36	—	8.80	—	75.27	1	2	43 ~ 51	—	—	
	37	—	8.80	—	75.23	2	—	—	0.5	47 ~ 55	
	38	—	—	4.20	75.27	0	4	91 ~ 105	—	—	
	39	—	—	4.78	75.22	0	6	83 ~ 92	3	70 ~ 80	
	40	—	—	4.40	75.28	0	6	58 ~ 69	—	—	水口あり
	41	—	—	4.35	75.24	1	8	59 ~ 69	2	77 ~ 88	
5 d 区	42	—	—	—	75.21	0	—	—	—	—	
	43	—	11.23	—	75.19	4	4	65 ~ 80	6	42 ~ 71	
	44	—	—	—	75.24	0	—	—	—	—	
	45	—	—	—	75.23	0	5	46 ~ 55	—	—	
	46	—	9.70	—	75.19	0	3	41 ~ 47	7	47 ~ 70	
	47	—	8.80	—	75.19	2	8	153 ~ 178	—	—	
	48	—	—	—	75.21	0	1	47 ~ 65	—	—	
5 e 区	49	—	—	—	75.17	0	—	—	—	—	
	50	—	19.52	—	75.17	0	5	85 ~ 113	—	—	水口あり
	51	—	19.60	—	75.17	0	0.5	90 ~ 92	0	30 ~ 82	水口あり
	52	—	5.80	—	75.16	2	3	66 ~ 105	—	—	水口あり
	53	—	11.80	—	75.14	4	0.5	106 ~ 124	5	57 ~ 93	水口あり
	54	—	18.51	—	75.13	4	8	57 ~ 85	—	—	
	55	—	8.10	—	75.10	0	0.5	29 ~ 52	1	60 ~ 79	
	56	—	3.45	—	75.11	0	2	30 ~ 31	4	69 ~ 72	
	57	—	18.40	—	75.15	1	3	58 ~ 95	—	—	
	58	—	10.05	—	75.12	2	—	—	4	62 ~ 110	
	59	—	19.65	—	75.10	3	3	67 ~ 95	—	—	
	60	—	10.15	—	75.09	0	—	—	2	—	
5 f 区	61	—	—	—	75.09	0	8	129 ~ 150	—	—	
	62	—	—	—	—	—	—	65 ~ 70	—	—	
	63	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

## 2 As-B層下足跡列

## 2・3 区1号足跡列(遺構: 第22図、図版9)

位置: 2 b 区東側1面に位置する。北東・南西側が調査区外にかかる。残存状況: 足跡の中にのみ、As-B一次堆積層が残存していた。形態: 南西→北東方向に直行する。計測値: 走行方位N-23°-E、残存長9.60 m、幅0.25 ~ 0.30 m。遺物: 出土しなかった。

### 3 平安時代末期の溝

#### 2・3区13号溝（遺構：第22図、図版9）

**位置：**2 b区東側・3区北側1面に位置する。**形態：**南北に直行する。底面の高低差はほとんどない。断面は浅い弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-1°-W、残存長5.00m、幅0.22～0.43m、確認面からの深さ6cm。**埋没状態：**下層は黒褐色粘質土、上層はAs-B一次堆積層が埋没する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より平安時代末期に比定され、その前段階から使用されていたと推測される。

#### 2・3区16号溝（遺構：第22図、図版9）

**位置：**3区北側1面に位置し、東側は調査区外にかかる。**形態：**北西-南東に直行する。底面は南東側が若干低い。断面は浅い弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-52°-W、残存長3.30m、幅0.20～0.51m、確認面からの深さ3cm。**埋没状態：**下層は黒褐色粘質土、上層はAs-B一次堆積層により埋没する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より平安時代末期に比定され、その前段階から使用されていたと推測される。

#### 5区8c号溝（遺構：第23図、図版3）

**位置：**5 a区中央1面に位置し、北・南側は調査区外にかかる。5区6号溝および5区8 a・b・d・e号溝と重複する。本溝が5区8 d・e号溝より新しく、5区8 a・b号溝より古い。**形態：**南北にやや蛇行して走行し、底面は南側が若干低い。断面は弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-17°-E、残存長16.90m、幅7.90～8.10m、壁面で確認した深さ62cm。**埋没状態：**北側では部分的にAs-B層が検出された。これを境にして下層に褐灰色砂質土、上層に疊を含む灰褐砂質土が堆積する。南側は下層に小縫を含む灰色粗砂および灰黄色砂質土が堆積し、中～上層は褐灰色砂質土と褐灰色粘質土の互層となる。**遺物：**出土しなかった。**時期：**重複関係・埋没状態より平安時代末期に比定され、As-B降下前・後も機能していたと推測される。

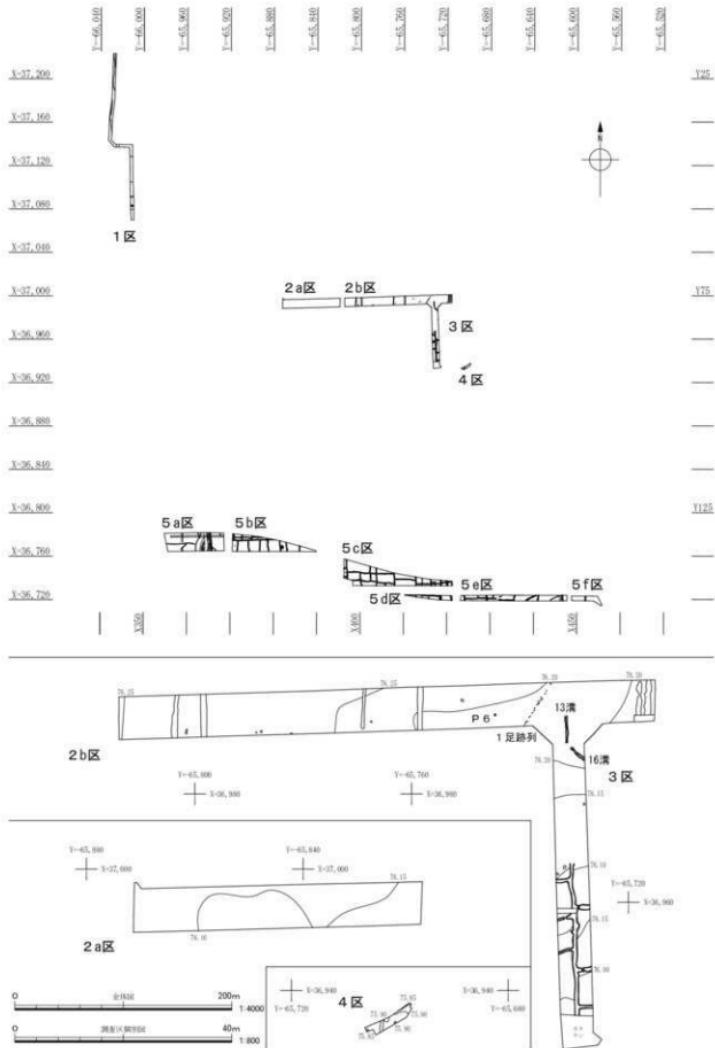
### 4 平安時代末期の井戸

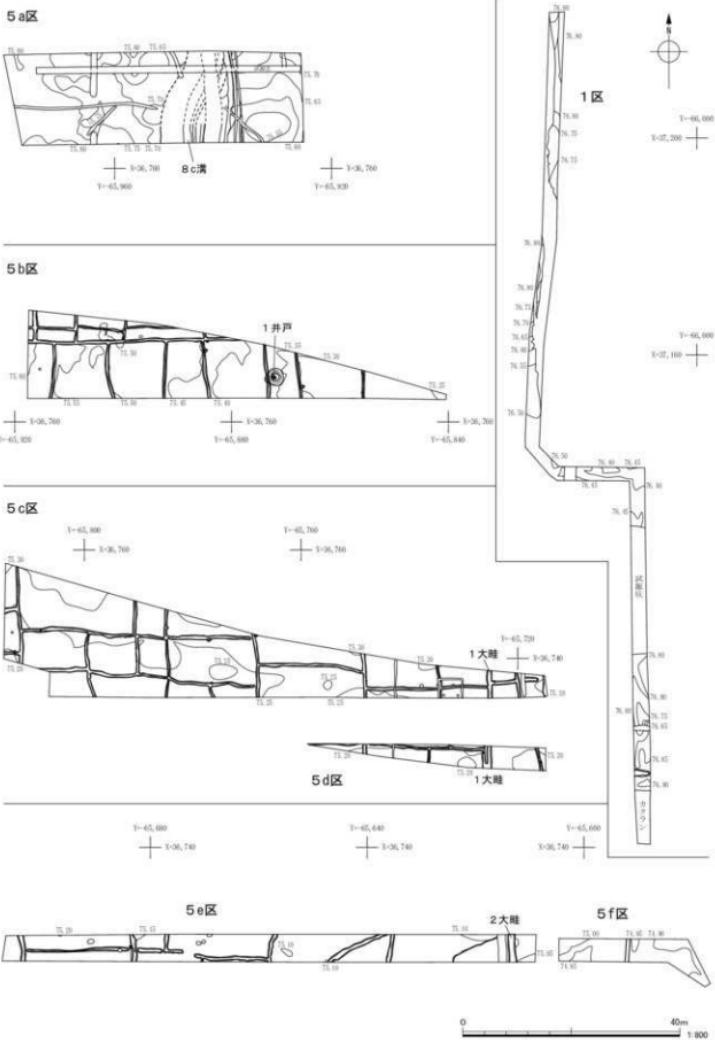
#### 5区1号井戸（遺構：第22図、図版9）

**位置：**5 b区東側1面に位置する。周堤の高まりがAs-B層下水田の区画15南北小畦畔と一体化するが、本井戸が新しいと推察される。**形態：**平面はほぼ円形を呈する。壁は西側が直線的に、東側が段を持って立ち上がる。掘り込みの周囲には、堤状に土が寄せられている。この土は水田土壤と同じ黒褐色粘質土で、As-Bの混入は認められない。周堤とAs-B層下水田面との比高は最高7cmである。**計測値：**主軸方位N-1°-E、掘り込みの長径1.48m、短径1.45m。周堤範囲の長径3.43m、短径3.18m。As-B層下水田面からの深さ77cm。**埋没状態：**上層には砂と黒褐色粘質土ブロックを含む灰色粘質土が堆積し、人為的に埋め戻された状況を示していた。最下層にはにぶい黄褐色砂質土が堆積している。周堤はAs-B一次堆積層で覆われていた。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態・重複関係より、As-B降下時には埋められていたと判断される。

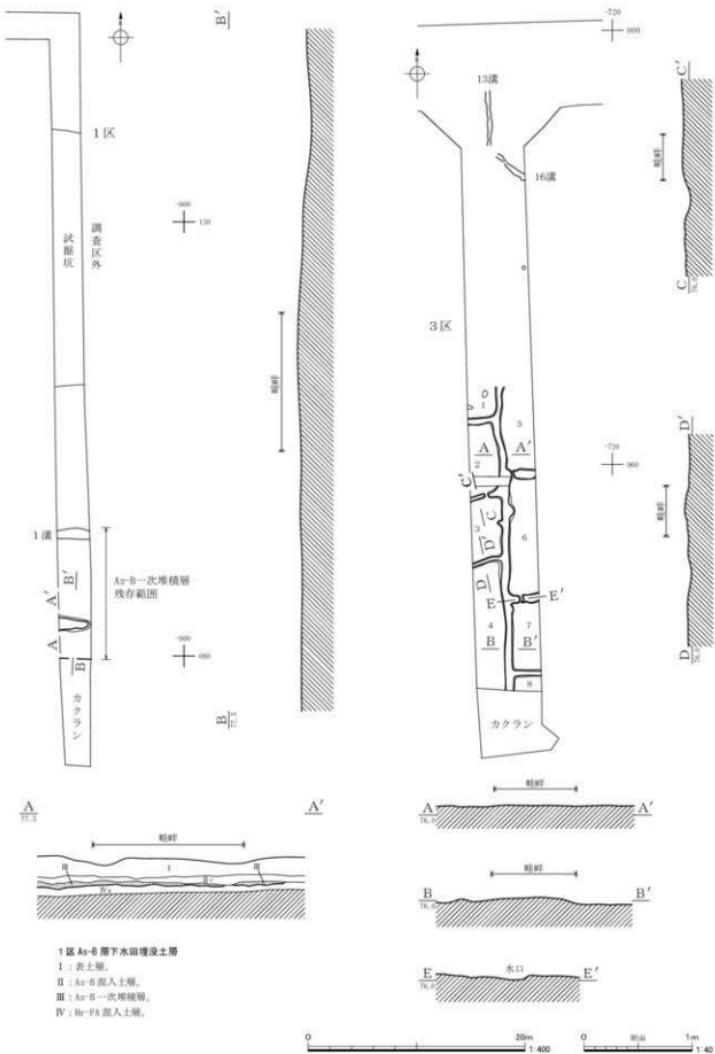
#### 5 平安時代末期の小穴（ピット）（遺構：第13図）

平安時代末期の小穴として、2 b区東側1面で1基が検出された。2・3区6号ピットが該当し、As-B一次堆積層で埋没する。平面はほぼ円形を呈し、規模は長径34cm、短径28cm、底面までの深さは8cmである。遺物は出土しなかった。

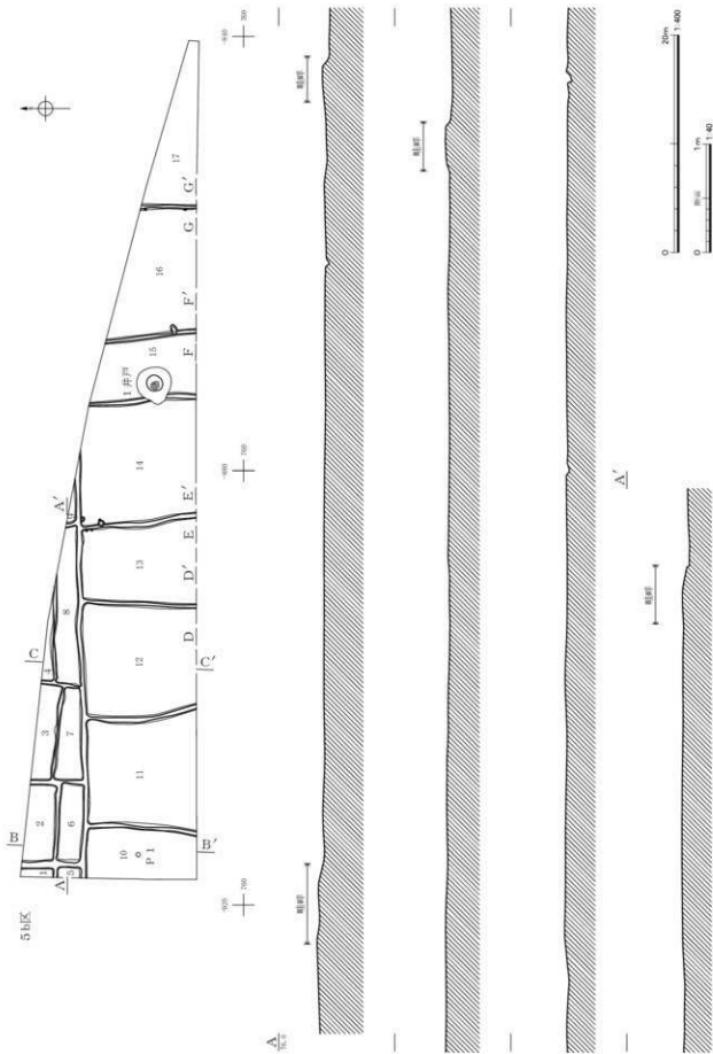




第14図 平安時代末期の全体図（2）

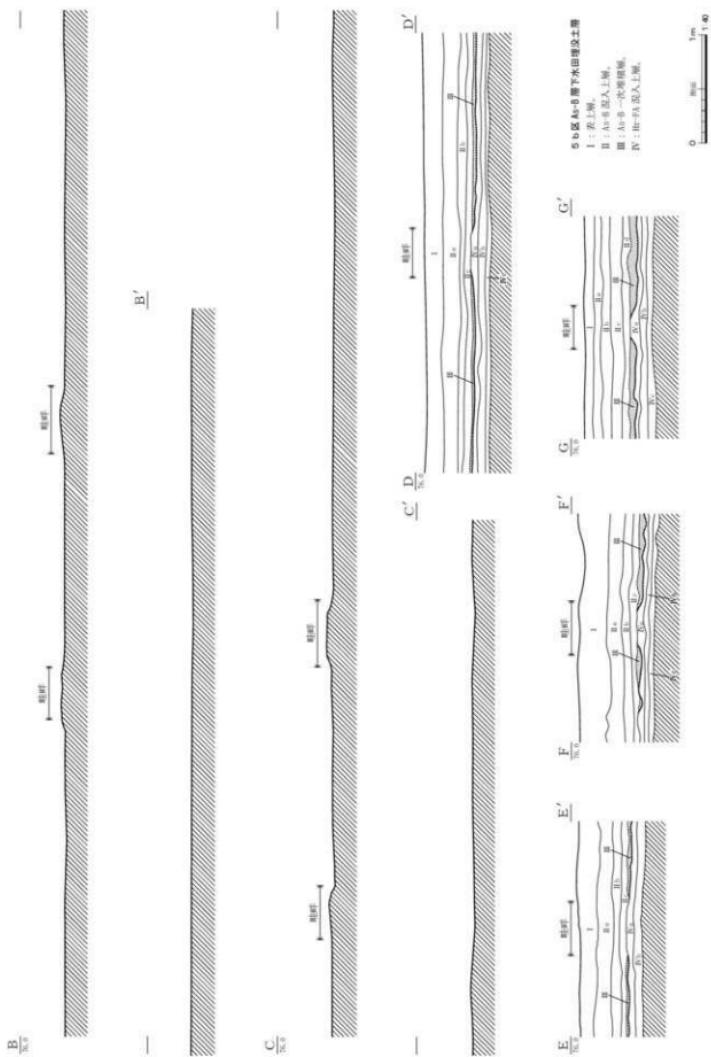


第15図 As-B 層下水田 (1)

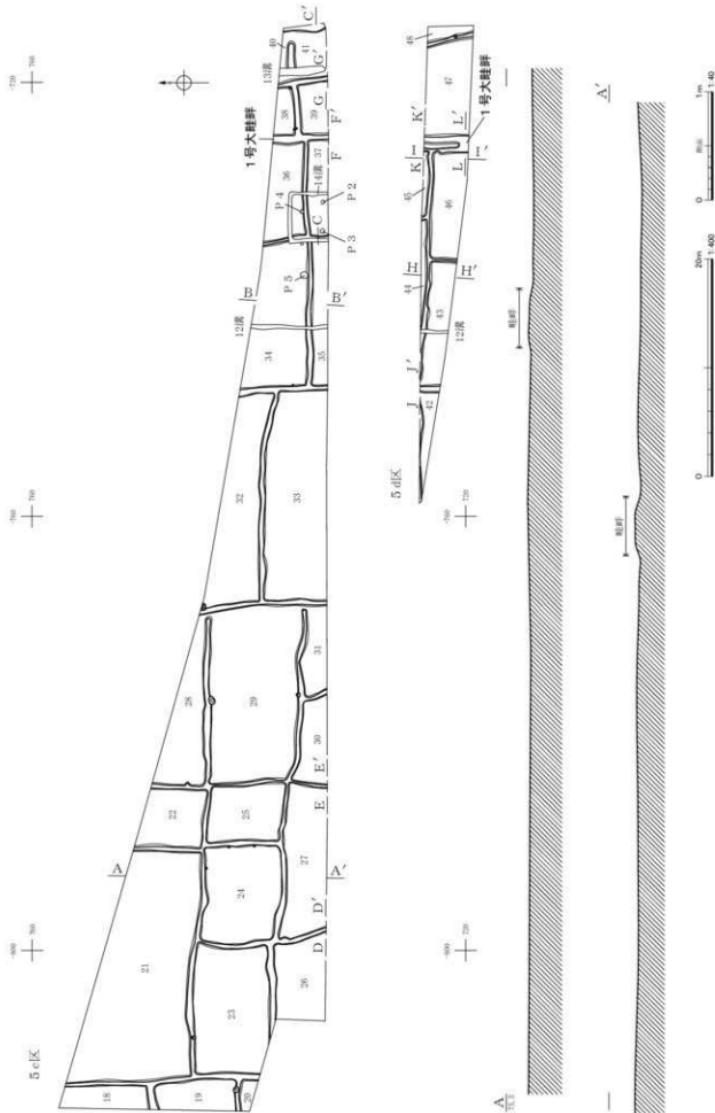


第16図 As-B層下水田(2)

平安時代末期

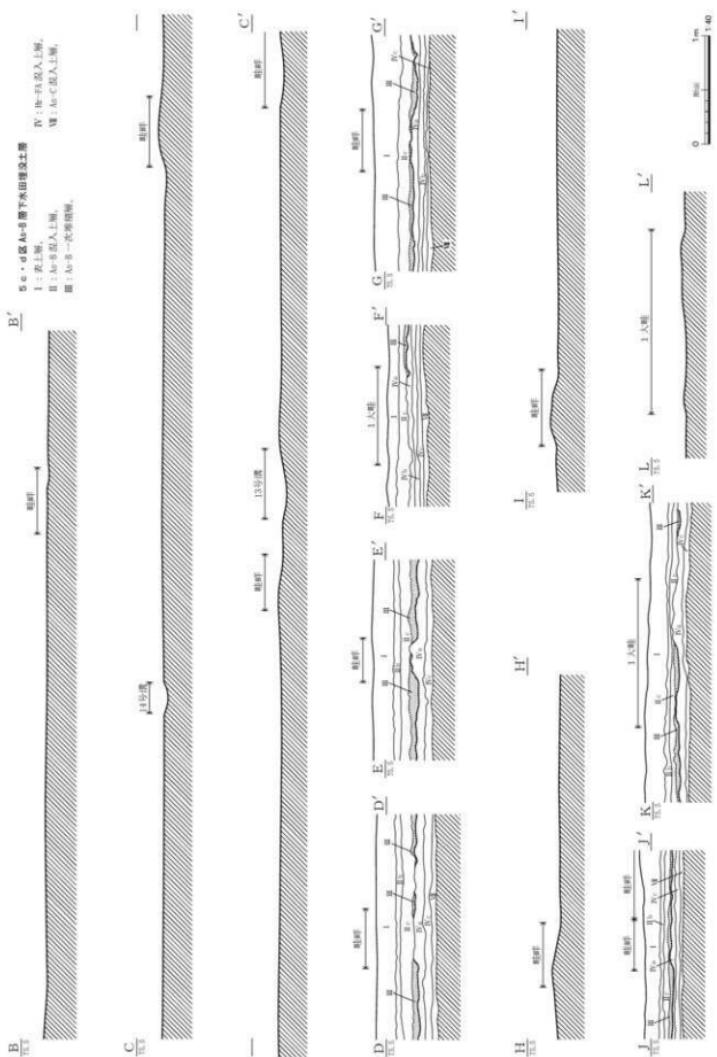


第17図 As-B層下水田(3)

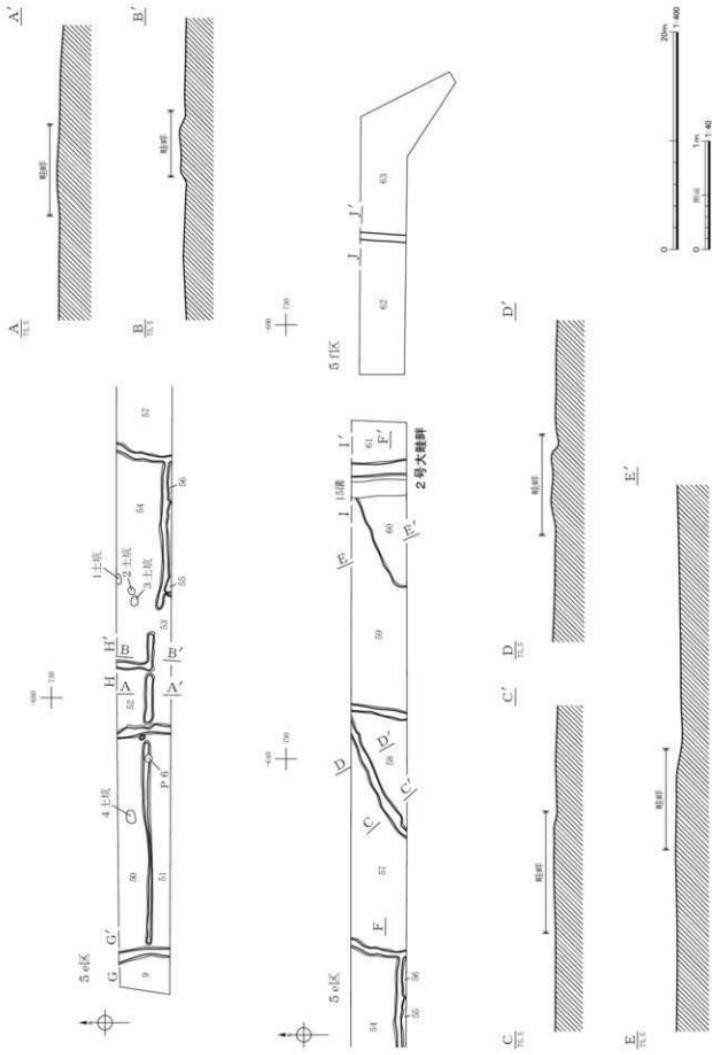


第18図 As-B層下水田(4)

平安時代末期

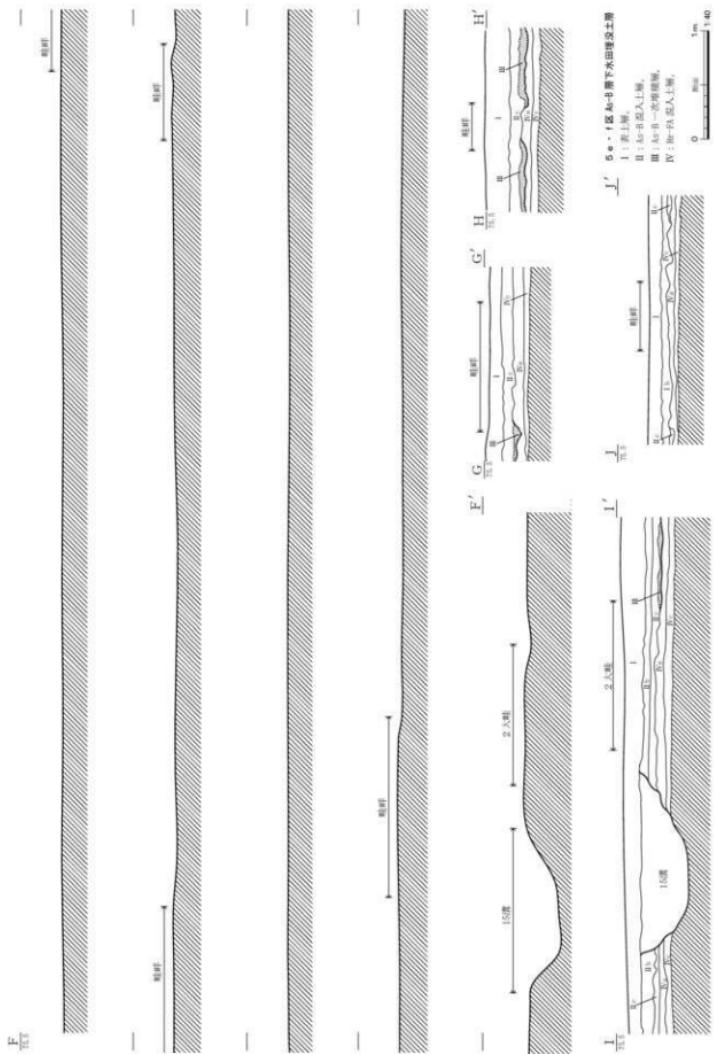


第19図 As-B層下水田(5)



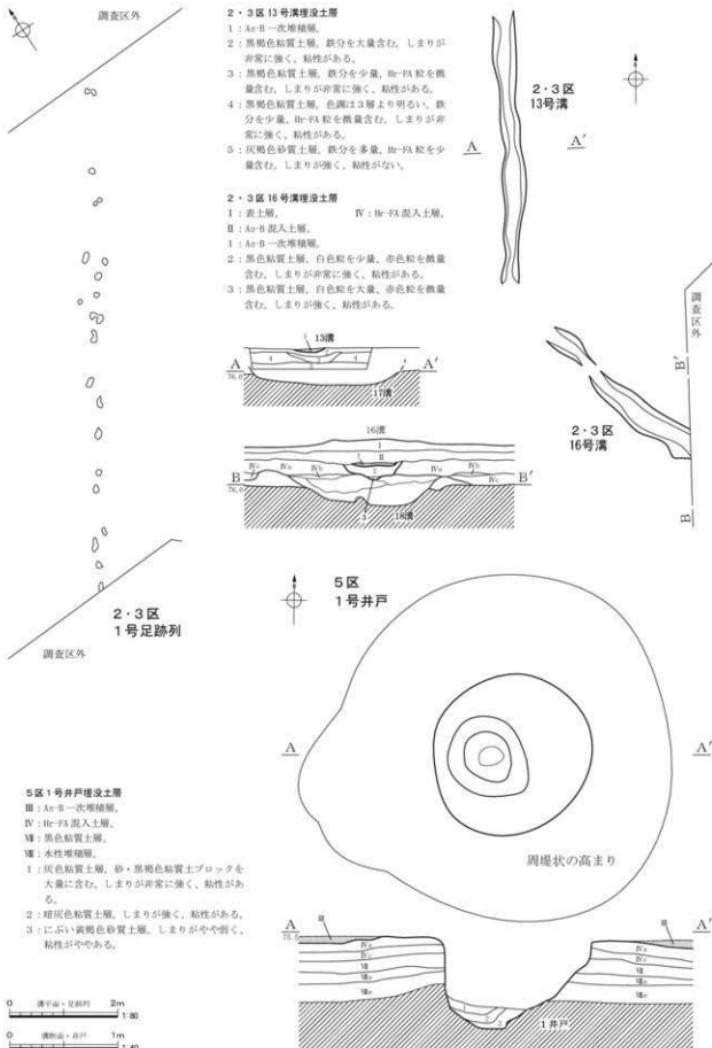
第20図 As-B層下水田(6)

平安時代末期

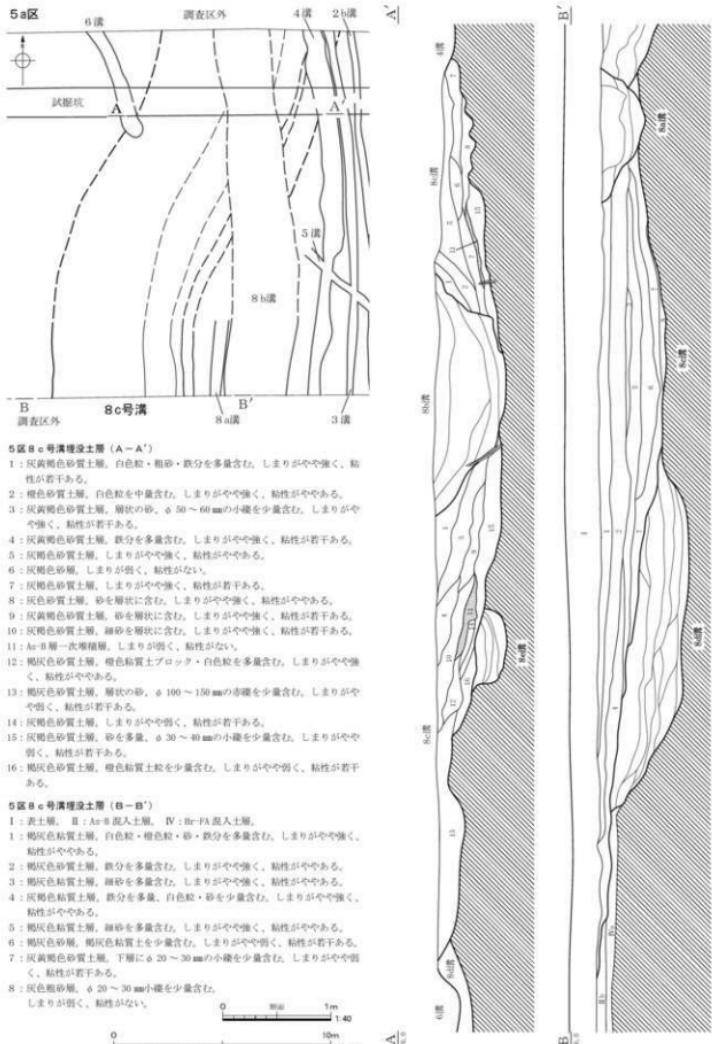


第21図 As-B層下水田(7)

平安時代末期



第22図 平安時代末期の足跡列・溝（1）・井戸



第23図 平安時代末期の溝（2）

## VII 古墳時代から平安時代の遺構と遺物

### 1 Hr-FA 混入土層水田

耕作により Hr-FA（6世紀初頭降下）が混入する層と畦畔部分に相当する帯状の無耕作部分（いわゆる「疑似畦畔」）により、水田区画を確認することができた。水田面はIV層中に想定されるが、判別は難しい。

#### 2区 Hr-FA 混入土層水田（遺構：第26図、図版10）

**位置：**2a区1面に位置する。2・3区8a号溝と重複し、本水田が古い。1号南北大畦畔は条里型地割の坪境に位置し、2・3区8b号溝上に構築されている。**水田面の状態：**上位はII層に削平され、当時の地表面を窺うことは難しい。**区画：**7区画が検出されたものの、全容を把握できる区画はない。東西長は、区画2で13.50m、区画5で12.80m、区画6で10.25mを測る。南北軸はN-11°～14°-Wを示し、やや西に傾く。**畦畔：**1号南北大畦畔は幅137～242cmを測る。他の畦畔は南北畦畔が73～258cm、東西畦畔が25～112cmである。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態より、平安時代に比定される。また、畦畔の位置から、As-B層下水田（1108年）地割との関係が窺われる。

### 2 Hr-FA 層下水田

Hr-FA（6世紀初頭降下）一次堆積層の浅黄色テフラを包含する小窪み群が検出され、Hr-FA層（V層）下で耕作された水田の痕跡に想定された。水田面は残存しない。明瞭な区画は認められなかったが、小窪み群の展開から、自然地形に沿った造成が窺われた。水田は2a区・5b区の狭い範囲で確認されており、後世の削平を免れ得た当時の低位面に位置するものと推測される。灌漑用の水路には、水田と同様の主軸を有する5区18号溝やHr-FA一次堆積層で埋没する5区19号溝が想定され、水田内やその脇に配されている。

#### 2区 Hr-FA 層下水田（遺構：第27図、図版10）

**位置：**2a区西側2面に位置し、およそ2・3区1号溝より南東側に展開する。南側は調査区外にかかる。**水田面の状態：**IVb層に削平され、水田面は残存しない。Hr-FA層を包含する小窪みが散在する。**区画：**区画となる畦畔は認められなかった。小窪み群によって示される主軸方位はN-40°-Wであるが、隣接する下阿内志町畠遺跡（群馬県理文2001）の成果を参照すると、北東-南西方向に展開するようである。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期（6世紀初頭）に比定される。

#### 5区 Hr-FA 層下水田（遺構：第27～28図、図版10）

**位置：**5b区東側2面に位置し、5区18号溝より東側に展開する。南北側は調査区外にかかる。**水田面の状態：**IVd層に削平され、水田面は残存しない。Hr-FA層を包含する小窪みが群在し、その分布は5区18・19号溝間により集中する。**区画：**明瞭な区画は認められなかった。小窪み群が示す主軸方位はN-18°-Wで、5区18号溝に近似する。**畦畔：**5区18号溝の東脇に小窪み群が分布しない帯状の部分が認められ、耕作の及ばない畦畔を反映したものと推測された。この畦畔は水田域と水路を区画する機能が看取られる。畦畔の幅は35～83cmを呈する。**水路：**5区19号溝が同時に使用されていた水路に推定される。5区18号溝は、畦畔の走行に近似することから本水田との関連が予想されるものの、Hr-FA降下時には埋没していたものと見受けられる。**遺物：**古墳時代後期の土師器片が2点認められた。**時期：**埋没状態・出土遺物より、古墳時代後期（6世紀初頭）に比定される。

### 3 突状遺構

#### 2・3区突状遺構（遺構：第29図、図版10）

**位置：**2・3区中央2面に位置し、北側が調査区外にかかる。南側は残存状態が悪く、不明瞭である。2・3区8b号溝の東側に配列する。**形態：**細長い土坑が20～40cm程の間隔で並列する。上位はIVb層に削平されていた。**計測値：**小溝の主軸方位：N-77°～79°-E、長さ：2.44～2.72m、幅：15～50cm、壁面で確認した深さ8cm。**埋没状態：**黒色粘質土ブロックやHr-FA軽石粒を含む灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**2・3区8b号溝との位置関係より、平安時代に想定される。

### 4 古墳時代から平安時代の溝

#### 2・3区1a号溝（遺構：第30図、図版11 / 遺物：第38図、表5、図版15）

**位置：**2・3区西端2面に位置し、北・西側が調査区外にかかる。2・3区1c号溝と重複し、本溝が新しい。**形態：**北東～南西にやや屈曲して走行し、底面は南西側が低い。断面は築研状で屈曲部などの壁が棚状を呈する。また、張り出し状を呈する部分も認められる。**計測値：**主軸方位N-48°～73°-E、残存長15.18m、幅1.14～2.26m、確認面からの深さ18～40cm。**埋没状態：**主に、Hr-FA軽石粒を含む黒色・暗灰色粘質土が堆積し、砂が互層状に認められる。**遺物：**多量の土師器、須恵器、繩文土器片が出土した。古墳時代前期の小片資料でほとんど占められるものの、破損の少ない古墳時代後期の模倣坏が中層で検出された（第38図11）。また、少量の大型罐が下層や張り出し部分の上層で散見された。それらは円・角縁の安山岩で、折損やタールの付着が認められる。**時期：**走向・埋没状態・出土遺物より、古墳時代後期（6世紀後半～7世紀初頭）に比定される。

#### 2・3区1b号溝（遺構：第30図、図版11）

**位置：**2・3区西端2面に位置し、北・西側が調査区外にかかる。2・3区1a号溝に近接して並走する。**形態：**北東～南西にはほぼ直行し、底面は南西側が若干低い。断面は浅い弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-56°-E、残存長5.63m、幅0.18～0.35m、確認面からの深さ2～6cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒を含む暗灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態より、古墳時代後期に比定される。

#### 2・3区1c号溝（遺構：第30図、図版11）

**位置：**2・3区西端2面に位置する。北西側で2・3区1a号溝と直交し、本溝が古い。**形態：**残存状態が良い。北西～南東に走行し、断面は非常に浅い逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-40°-W、残存長1.51m、幅0.46m、確認面からの深さ11cm。**埋没状態：**Hr-FA浅黄色テフラを含む灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期（6世紀前半）に比定される。

#### 2・3区2a号溝（遺構：第31図、図版11）

**位置：**2・3区西側2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。2・3区1a号溝に並走する。北東側で2・3区1a・2b・5号溝、南東側で2・3区3号溝と重複し、本溝が2・3区1a・2b号溝より新しい。**形態：**北東～南西にはほぼ直行し、底面は南西側が若干低い。断面は弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-46°～61°-E、残存長11.76m、幅0.19～0.33m、壁面で確認した深さ16cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒や多くの褐色砂・黒色粘質土ブロックを含む暗灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態より、古墳時代後期に比定される。

**2・3区2b号溝**（遺構：第31図、図版11／遺物：第38図、表5、図版15）

**位置：**2a区西側2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。北東側で2・3区1a・2a・5号溝、南西側で2・3区3・4号溝と重複し、いずれよりも本溝が古い。**形態：**北東－南西にはば直行し、底面は南西側が低い。断面は薬研状を呈し、北東側は上位の幅が不整に広がる。**計測値：**主軸方位N=47°-E、残存長12.63m、幅0.61～1.94m、壁面で確認した深さ20cm。**埋没状態：**主に、As-C粒を含む黒褐色粘質土・暗灰色砂質土などが堆積し、北東側の上層に黒色粘質土・黄灰色粘質土・灰色砂質土・Hr-FA浅黄色テフラが混入する。**遺物：**多量の土師器片が出土した。古墳時代前期の資料でほとんど占められるが、古墳時代後期のものも散見される。また、土製の管玉が特記されよう。**時期：**埋没状態・遺物の出土傾向より、古墳時代前期に比定される。ただし、北東部の不整な部分は古墳時代後期（6世紀前半）に形成された可能性がある。

**2・3区3号溝**（遺構：第32図、図版11～12／遺物：第38図、表5、図版15）

**位置：**2a区南側2面に位置し、南東側が調査区外にかかる。2・3区4号溝に並走し、As-B層下水田で見出された条里型地割における東西方向の坪境に当たる。西側で2・3区2a・2b・5・8号溝、中央で2・3区8b号溝、東側で4号溝と重複し、本溝が2・3区2a・2b・5・8号溝より新しく、2・3区4号溝より古い。ただし、2・3区8b号溝の下層は同時に使用されていた可能性がある。**形態：**東西にやや蛇行しながら直行し、底面は東側が若干低い。断面は逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N=90°-E、残存長45.88m、幅0.45～0.75m、確認面からの深さ3～20cm。**埋没状態：**主に、Hr-FA軽石粒を含む暗灰褐色粘質土や灰色砂質土などが堆積し、多量の黒色粘質土が部分的に認められる。**遺物：**少量の土師器・須恵器片が出土した。古墳時代の小片資料が多いものの、比較的残存率の良好な平安時代の須恵器（第38図16）も下層で認められた。**時期：**走向・埋没状態・出土遺物より、平安時代（9世紀中葉以降）に比定される。

**2・3区4号溝**（遺構：第32図、図版11～12）

**位置：**2a区南側2面に位置し、南側が調査区外にかかる。2・3区3号溝と並走し、As-B層下水田で見出された条里型地割における東西方向の坪境に当たる。西側で2・3区2b・5号溝、中央で2・3区8b号溝、東側で3号溝と重複し、いずれよりも本溝が新しい。ただし、2・3区8b号溝は同時に使用されていた可能性がある。**形態：**東西にはば直行し、底面は東側が低い。断面は弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N=89°-E、残存長35.20m、確認面からの深さ6～25cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒を含む灰色粘質土・暗灰色・灰色砂質土などが堆積する。部分的に灰白色シルトや黒色粘質土が層状に認められる。**遺物：**少量の土師器片が出土した。古墳時代の資料が多い。**時期：**走向・埋没状態より、平安時代に比定される。

**2・3区5号溝**（遺構：第31図、図版12）

**位置：**2a区西側2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。北側で2・3区2a・2b号溝、南側で2・3区3・4号溝と重複し、本溝が2・3区2b号溝より新しく、2・3区3・4号溝より古い。**形態：**南北にはば直行し、底面は南側が低い。断面は逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N=9°-W、残存長8.10m、幅0.23～0.31m、確認面からの深さ7～11cm。**埋没状態：**黒色粘質土・Hr-FA浅黄色テフラを含む灰色粘質土などが堆積し、部分的に砂が認められる。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期（6世紀前半）に比定される。

**2・3区6号溝**（遺構：第33図、図版12）

**位置：**2a区中央2面に位置し、北側が調査区外にかかる。**形態：**残存状態が良くない。南北に直行し、南側が浅くなつて途切れる。断面は逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N=15°-W、残存長1.16m、幅0.61m、

壁面で確認した深さ 13cm。埋没状態：Hr-FA 軽石粒を含む灰色砂質土が堆積する。遺物：少量の土師器片が出土した。古墳時代の資料が多い。時期：埋没状態より、古墳時代後期～平安時代に比定される。

#### 2・3区7号溝（遺構：第33図、図版12）

位置：2a区中央2面に位置し、北側が調査区外にかかる。形態：残存状態が良好でない。南北に蛇行しながら走行し、南側が浅くなつて途切れる。断面は浅い弧状を呈する。計測値：主軸方位N-7°-E、残存長3.68m、幅0.26～0.59m、壁面で確認した深さ9cm。埋没状態：主に、灰色粘質土、Hr-FA 浅黄色テフラを含む灰色砂質土などが堆積する。遺物：少量の土師器片が出土した。古墳時代前期の資料が多い。時期：埋没状態より、古墳時代後期（6世紀前半）に比定される。

#### 2・3区8b号溝（遺構：第33図、図版12）

位置：2a区中央2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。As-B層下水田で見出された条里型地割における南北方向の坪境に当たる。南側で2・3区3・4号溝と重複し、同時に使用されていた可能性がある。また、2区Hr-FA混入土層水田の1号南北大畦畔が直上に構築されていた。形態：南北に直行する。底面は南側が低く、凹凸が著しい。断面は弧状を呈する。計測値：主軸方位N-5°-E、残存長8.22m、幅1.20～2.00m、壁面で確認した深さ28cm。埋没状態：主に、暗灰色粘質土・灰色砂が堆積し、下層には黒色粘質土層が認められる。本溝の埋没後、その両脇がHr-FA混入土層水田の耕作土（IVa・b層）によって搅拌されていた。遺物：古墳時代前～後期の土師器片が少量出土した。時期：走向・埋没状態より、開削は平安時代に比定される。また、IVa・b層を耕作土とするHr-FA混入土層水田の構築前に埋没している。

#### 2・3区17号溝（遺構：第34図、図版12～13）

位置：2b区東側・3区北側2面に位置し、北側が調査区外にかかる。As-B層下水田で見出された条里型地割における南北方向の坪境に当たる。ほぼ同じ走行でAs-B一次堆積層を包含する2・3区13号溝（第22図）と重複し、本溝が古い。南側では2・3区18号溝と接しており、同時に使用されていた可能性が見受けられる。形態：南北にほぼ直行する。北側の残存状態が悪く、一部浅くなつて途切れていった。分岐が予想される張り出し部分が中央および南側に認められる。底面は南側が低く、断面は不整形である。周間にHr-FA軽石粒を含む小塙み群が集中する。計測値：主軸方位N-4°-W、残存長12.23m、幅0.33～1.44m、確認面からの深さ5～18cm。埋没状態：Hr-FA軽石粒を含む灰色粘質土が堆積する。遺物：出土しなかつた。時期：走向・埋没状態より、平安時代に比定される。

#### 2・3区18号溝（遺構：第34図、図版12～13）

位置：3区北側2面に位置し、東西側が調査区外にかかる。As-B層下水田で見出された条里型地割における坪境の交点に当たる。2・3区16（第22図）・17・19号溝と重複し、本溝がAs-B一次堆積層を包含する2・3区16号溝より古い。2・3区17・19号溝は同時に使用されていた可能性が見受けられる。また、西側に2・3区3・4号溝がつながると予想される。形態：東西に走行するが、西半部が溜井状に著しく広がる。東側の壁は不整な櫛状を呈する。底面は西側が低く、断面は不整形である。周間にHr-FA軽石粒を含む小塙み群が集中する。計測値：主軸方位N-83°-E、残存長6.28m、幅1.18～5.70m、壁面で確認した深さ30～32cm。埋没状態：上層にHr-FA軽石粒を含む灰色粘質土、下層に砂が堆積する。遺物：古墳時代後期の土師器片が1点出土した。時期：走向・埋没状態より、平安時代に比定される。

**2・3区19号溝**（遺構：第34～35図、図版12～13）

**位置：**3区北東側2面に位置し、南側が調査区外にかかる。As-B層下水田で見出された条里型地割における南北方向の坪境に当たる。2・3区18・20・22号溝と重複し、本溝が2・3区22号溝より新しい。2・3区18号溝とは同時に使用されていた可能性が見受けられる。**形態：**ほぼ南北に蛇行しながら走行し、底面は南側が低い。断面は弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-6°-W、残存長31.70m、幅0.50～1.55m、確認面からの深さ9～14cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒を含む灰色粘質土・砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態より、平安時代に比定される。

**2・3区20号溝**（遺構：第34～35図、図版12～13）

**位置：**3区やや北側2面に位置し、As-B層下水田で見出された条里型地割における南北方向の坪境に当たる。2・3区19号溝と重複する。**形態：**南北に走行し、底面は南側が低い。断面は浅い弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N-2°-E、残存長10.50m、幅0.10～0.27m、確認面からの深さ2cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒を含む灰色砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態より、平安時代に比定される。

**2・3区21号溝**（遺構：第34～35図、図版12～13）

**位置：**3区2面に位置し、As-B層下水田で見出された条里型地割における南北方向の坪境に当たる。2・3区22号溝と重複し、本溝が新しい。**形態：**南北に直行し、南側で不整格円状に広がる部分が認められる。底面は南側が低くなり、不整格円状部分で途切れる。また、径20～30cm・深さ20cm程度の小穴が連続する。断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-1°-W、残存長45.40m、幅0.25～1.85m、深さ2～10cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒を含む灰色砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態より、平安時代に比定される。

**2・3区22号溝**（遺構：第34～35図、図版12～13）

**位置：**3区中央2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。2・3区19・21号溝と重複し、本溝が古い。なお、本溝の南側にAs-C混入土層(VI層)が残存していた。**形態：**北西～南東に直行し、底面は南東側が低い。断面は弧状・逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-26°-W、残存長12.17m、幅0.22～0.56m、確認面からの深さ4～8cm。**埋没状態：**As-C軽石粒を含む黒色砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態・遺物の出土傾向より、古墳時代前期に比定される。

**2・3区23号溝**（遺構：第35図、図版13）

**位置：**2b区東側2面に位置し、北側が調査区外にかかる。**形態：**北東～南西に直行し、底面は南西側が若干低い。断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-77°-E、残存長7.96m、幅0.16～0.34m、確認面からの深さ4cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒を含む灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期～平安時代に比定される。

**2・3区26号溝**（遺構：第35図、図版14）

**位置：**2b区東側2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。**形態：**残存状態が悪く、一部途切れる。北東～南西に走行し、断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N-62°-E、残存長7.45m、幅0.12～0.22m、壁面で確認した深さ6cm。**埋没状態：**Hr-FA軽石粒を含む灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期～平安時代に比定される。

**2・3区 27号溝**（遺構：第35図、図版14）

**位置：**2 b 区東側2面に位置する。**形態：**残存状態が良好でない。北東—南西に直行し、両端が浅くなって途切れる。断面は浅い逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N=66°—E、残存長1.50m、幅0.07～0.17m、確認面からの深さ2cm。**埋没状態：**Hr-FA 軽石粒を含む灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期～平安時代に比定される。

**5区8d号溝**（遺構：第36図、図版3）

**位置：**5 a 区中央2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。As-B層下水田で見出された条里型地割における南北方向の坪境に当たる。平安時代末期から中世の5区6・8 c号溝下で確認されており、本溝が古い。**形態：**残存状態は良好でない。南北に直行し、底面は南側が若干低い。断面は逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N=2°—W、残存長16.90m、幅3.10～4.40m、壁面で確認した深さ56～58cm。**埋没状態：**Hr-FA 軽石粒を含む褐灰色・灰色粘質土、灰色砂質土などが堆積し、底面に砂礫層が認められる。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態・重複関係より、平安時代に比定される。

**5区8e号溝**（遺構：第36図、図版3）

**位置：**5 a 区中央2面に位置する。As-B層下水田で見出された条里型地割における南北方向の坪境に当たる。平安時代末期の5区8 c号溝下で確認されており、本溝が古い。**形態：**残存状態が良好でない。南北に直行し、断面は長方形形状を呈する。部分的な検出のため高低差は不明である。**計測値：**主軸方位N=1°—E、残存長1.22m、幅0.80m、壁面で確認した深さ30cm。**埋没状態：**褐灰色・暗灰色砂が堆積し、上層に粗砂が多い。**遺物：**出土しなかった。**時期：**走向・埋没状態・重複関係より、平安時代に比定される。

**5区16号溝**（遺構：第37図、図版14）

**位置：**5 b 区西側2面に位置する。**形態：**南北に直行し、断面は逆台形状を呈する。**計測値：**主軸方位N=1°—E、残存長1.86m、幅0.17～0.25m、確認面からの深さ6cm。**埋没状態：**Hr-FA 軽石粒を含む灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期～平安時代に比定される。

**5区17号溝**（遺構：第37図、図版14）

**位置：**5 c 区中央2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。**形態：**北東—南西に直行する。底面は数条に分かれ、凹凸が著しい。南西側が低くなる。**計測値：**主軸方位N=62°—E、残存長10.42m、幅2.40～2.56m、壁面で確認した深さ16cm。**埋没状態：**主に、Hr-FA 軽石粒を含む褐灰色粘質土が堆積する。**遺物：**古墳時代後期の土器片が散点出土した。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期～平安時代に比定される。

**5区18号溝**（遺構：第37図、図版14）

**位置：**5 b 区東側2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。本溝の東側に5区Hr-FA層下水田が展開していた。**形態：**北西—南東に直行し、底面は南東側が低い。断面は逆台形状で西壁が棚状を呈する。**計測値：**主軸方位N=20°—W、残存長3.76m、幅1.19～2.02m、壁面で確認した深さ24cm。**埋没状態：**As-C 軽石粒を含む粘質土・砂質土が堆積する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態・配置より、古墳時代後期初頭に比定される。

**5区19号溝**（遺構：第37図、図版14）

**位置：**5 b 区東側2面に位置し、南北側が調査区外にかかる。本溝の周間に5区Hr-FA層下水田が展開していた。

**形態：**北西～南東に直行する。底面は南東側が低く、小溝が多く認められる。断面は浅い弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N=40°-W、残存長4.65m、幅0.54~0.72m、壁面で確認した深さ10cm。埋没状態：Hr-FA一次堆積層を包含し、5区Hi-FA層下水田に連続する。**遺物：**出土しなかった。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期（6世紀初頭）に比定される。

#### 5区20号溝（遺構：第37図、図版14）

**位置：**5区東側2面に位置する。南側が調査区外にかかる。**形態：**残存状態が良好でない。南北に直行し、北側が浅くなつて途切れる。断面は弧状を呈する。**計測値：**主軸方位N=6°-W、残存長2.90m、幅0.27~0.59m、確認面からの深さ12cm。埋没状態：Hr-FA軽石粒を含む黒褐色・褐灰色粘質土が堆積する。**遺物：**出土しなかつた。**時期：**埋没状態より、古墳時代後期～平安時代に比定される。

### 5 古墳時代から平安時代の小穴（ピット）（遺構：第24～25図、表4）

古墳時代から平安時代の小穴として2a区で2基、5a区で1基、5b区で2基が確認された。当該期の溝と同様のHr-FA軽石粒が混入する灰色粘質土などが埋没する。規模は平面径21~49cm・深さ13~18cmを呈する。それぞれ規則的な配置や出土遺物は認められなかった。

表4 古墳時代から平安時代の小穴計測表

								単位：cm	
遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ	遺構名	長径・短径・深さ		
2・3区P.11	21・17・13	2・3区P.12	46・36・14	5区P.7	40・28・15	5区P.8	35・33・13		
5区P.9	49・47・16								

### 6 古墳時代から平安時代の遺構外出土遺物（遺物：第38図、表5、図版15）

本節では、表採、表土層・擾乱層、As-B層より下位の包含層から出土したもの、二次的に混入した遺構内出土遺物などを対象とする。土師器・須恵器が出土し、土師器の小片がほとんどを占める。

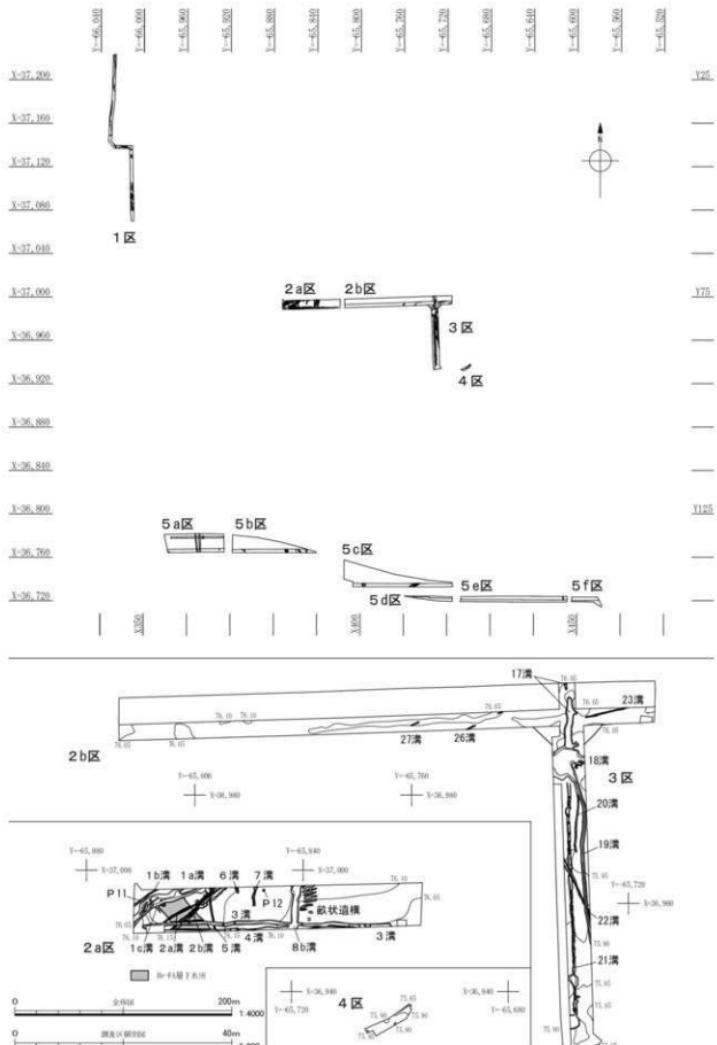
土師器・須恵器は調査区全体で検出されたが、2a区に偏在する。古墳時代前期～平安時代の資料が認められ、古墳時代前期のものが多い。Hr-FA混入土層（IV層）では比較的残りの良い7世紀前半の土師器（第38図18）や9世紀初頭の須恵器（第38図19）が認められ、Hr-FA混入土層形成に係わる水田の運営時期などが示唆される。この出土傾向は、隣接する西田遺跡南側や下阿内志町畑遺跡北西側と同様の傾向が窺われる。

### VIII 縄文時代の遺物（遺物：第38図、表5、図版15）

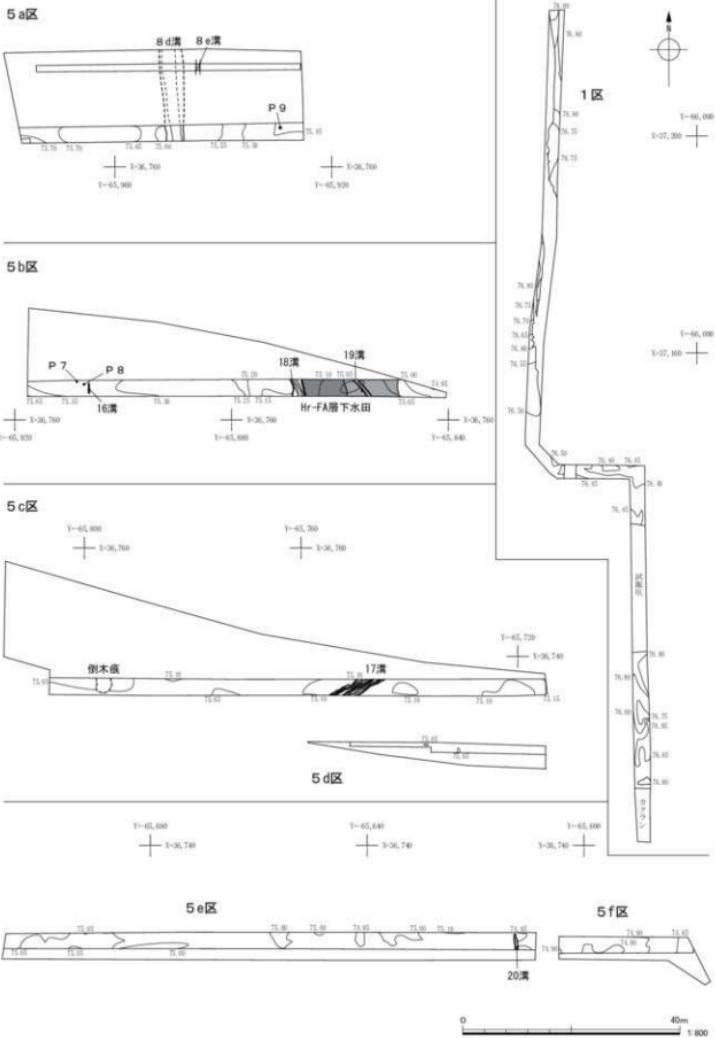
縄文時代の遺物として縄文土器や石器が少量検出された。当該期の遺構は認められず、遺物は古墳時代～平安時代の遺構やHr-FA混入土層（IV層）から出土した。2a区の2・3区1a・2b号溝内に偏在する。

縄文土器はいずれも小片である。型式の判明するものは後期前葉塙之内2式（第38図20・21）に比定された。2a区に偏在する分布は西田遺跡南側・下阿内志町畑遺跡北西側の微高地における活動を反映したものと推測される。下阿内志町畑遺跡の1号円形建物跡は、当該期の住居跡である可能性も視野に入れる必要があろう。

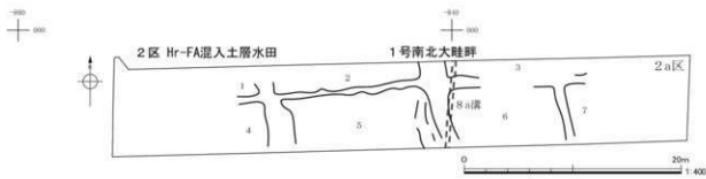
石器は石鏃（第38図22-23）と敲石が認められた。石鏃はいずれも黒曜石製である。第38図22は2a区の2・3区4号溝で検出されており、縄文土器の出土傾向に沿うものと推測される。敲石は安山岩製で、折損していた。



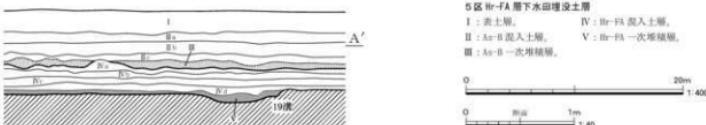
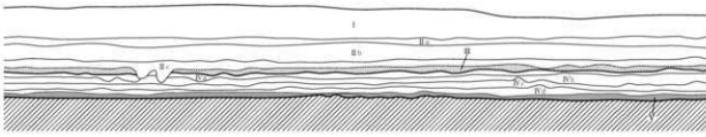
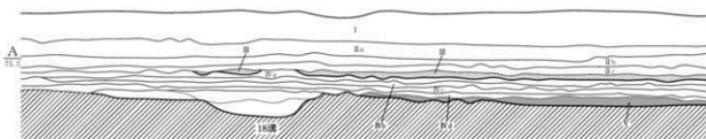
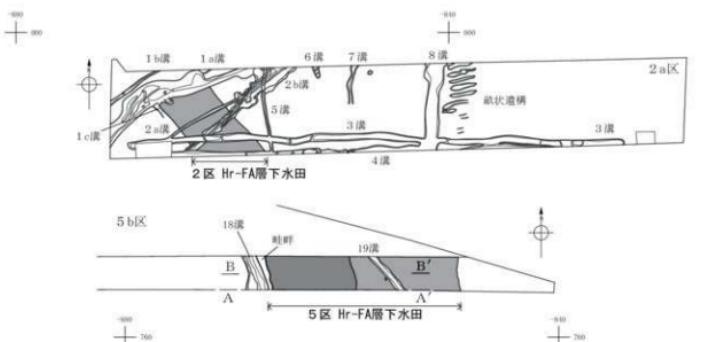
第24図 古墳時代から平安時代の全体図（1）



第25図 古墳時代から平安時代の全体図（2）



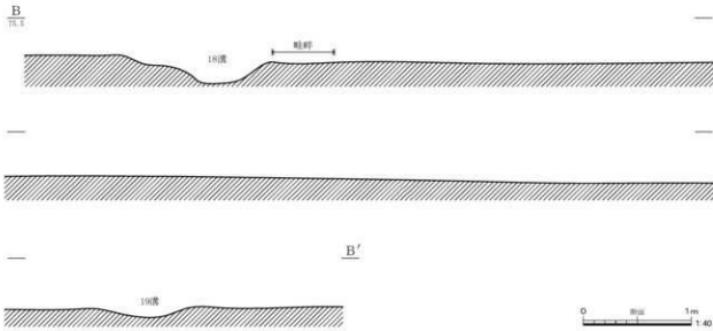
第26図 Hr-FA 混入土層水田



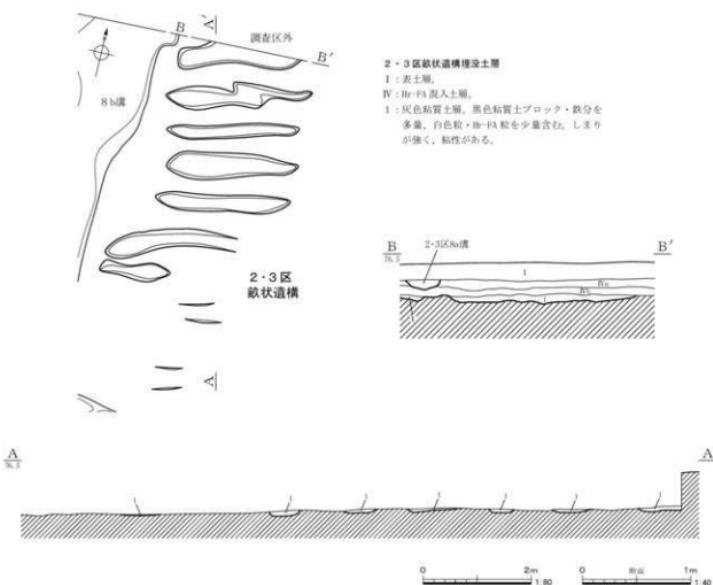
第27図 Hr-FA 層下水田 (1)

5区 Hr-FA 層下水田理査用  
 I : 表土層。 IV : Hr-FA 層入土層,  
 II : A+B 混入土層。 V : Hr-FA 一次堆積層。  
 III : A+B 一次堆積層。

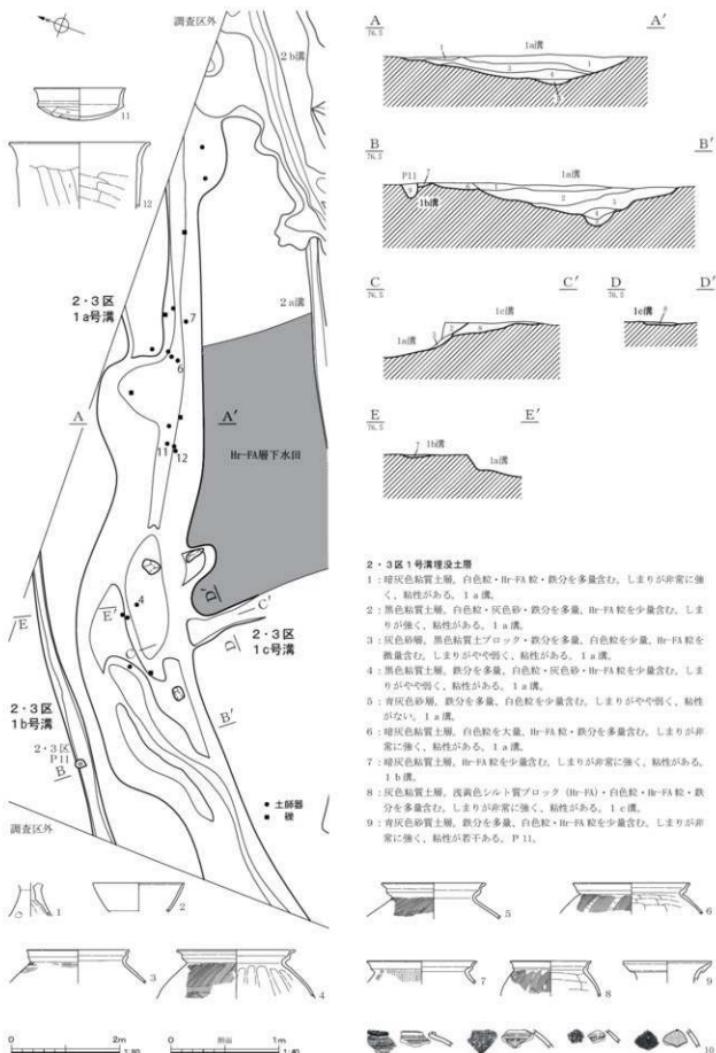
0 20m 1:400  
0 1m 1:40



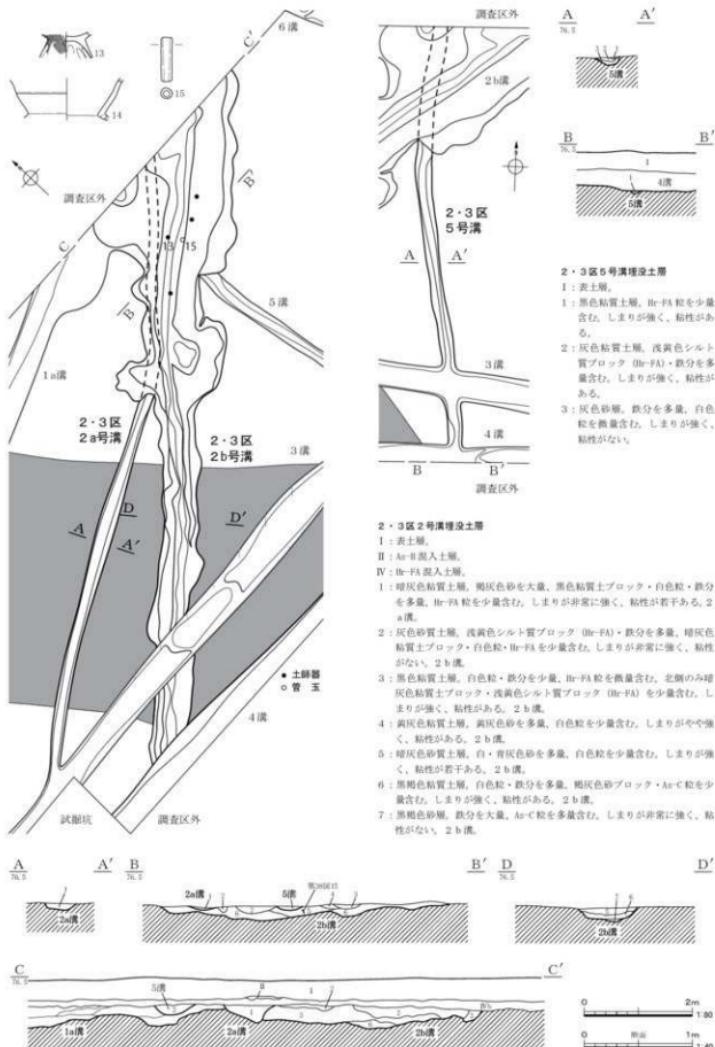
第28図 Hr-FA層下水田(2)



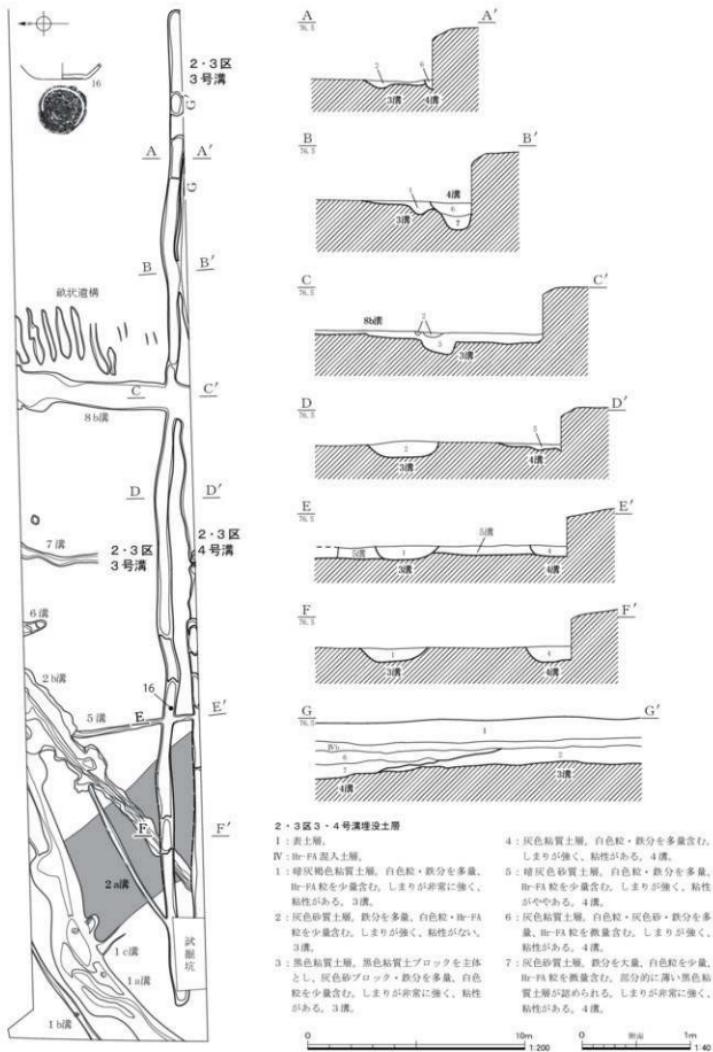
第29図 紋状造構



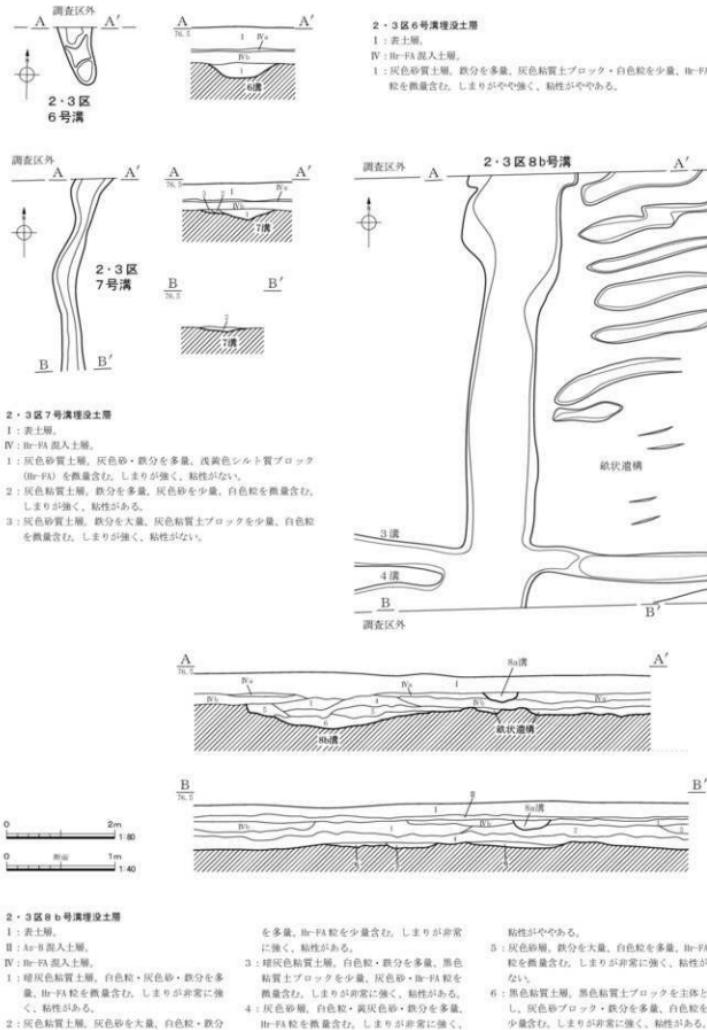
第30図 古墳時代から平安時代の溝（1）



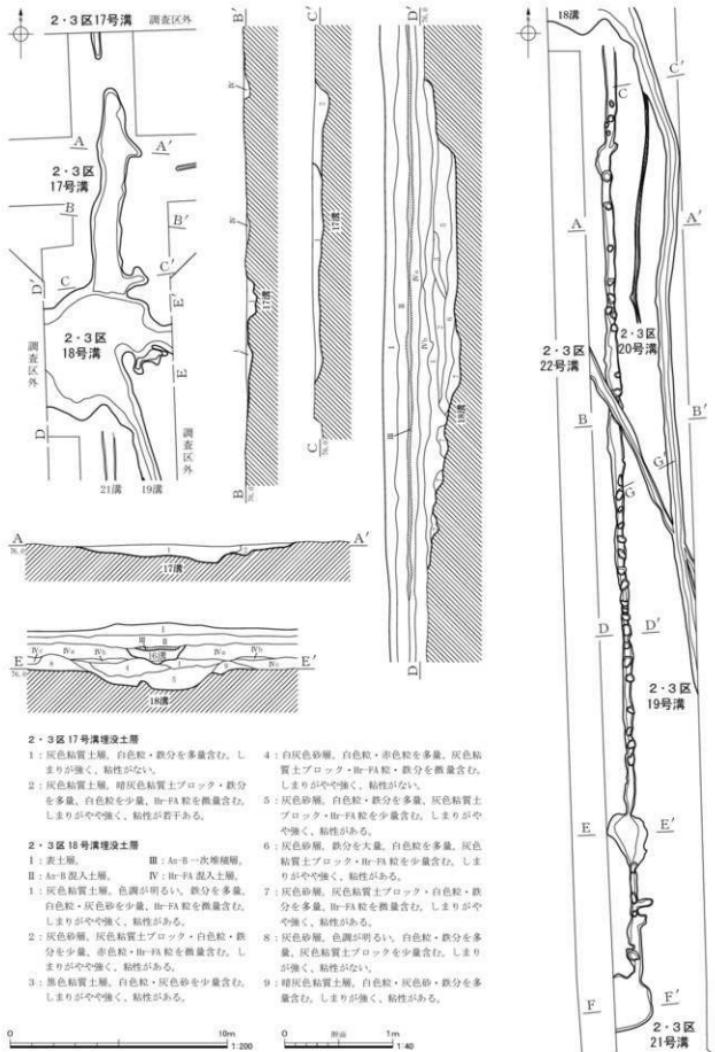
第31図 古墳時代から平安時代の溝（2）



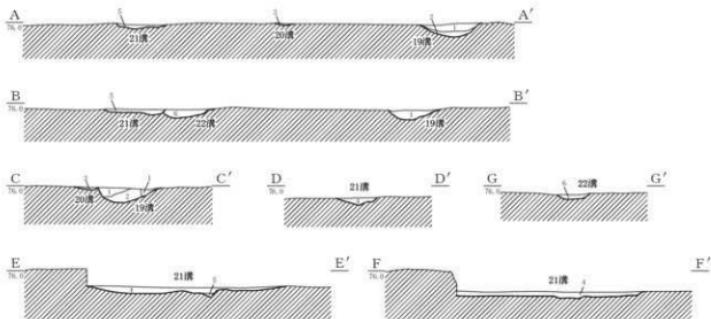
第32図 古墳時代から平安時代の溝（3）



第33図 古墳時代から平安時代の溝 (4)



第34図 古墳時代から平安時代の溝（5）



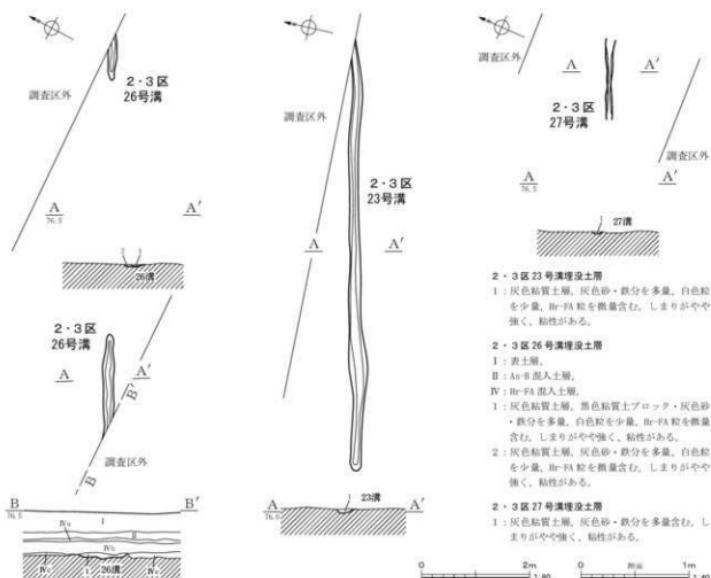
2・3区 19・20・21・22号溝埋没土層

- 1: 灰色粘質土層。灰色砂・鉄分を少量含む。しまりがやや弱く、粘性がある。19溝。
- 2: 灰色砂質土層。鉄分を多量。白色粒を少量。Hr-FA粒を微量含む。部分的に薄い灰色砂層が認められる。しまりがやや強く、粘性がややある。19溝。

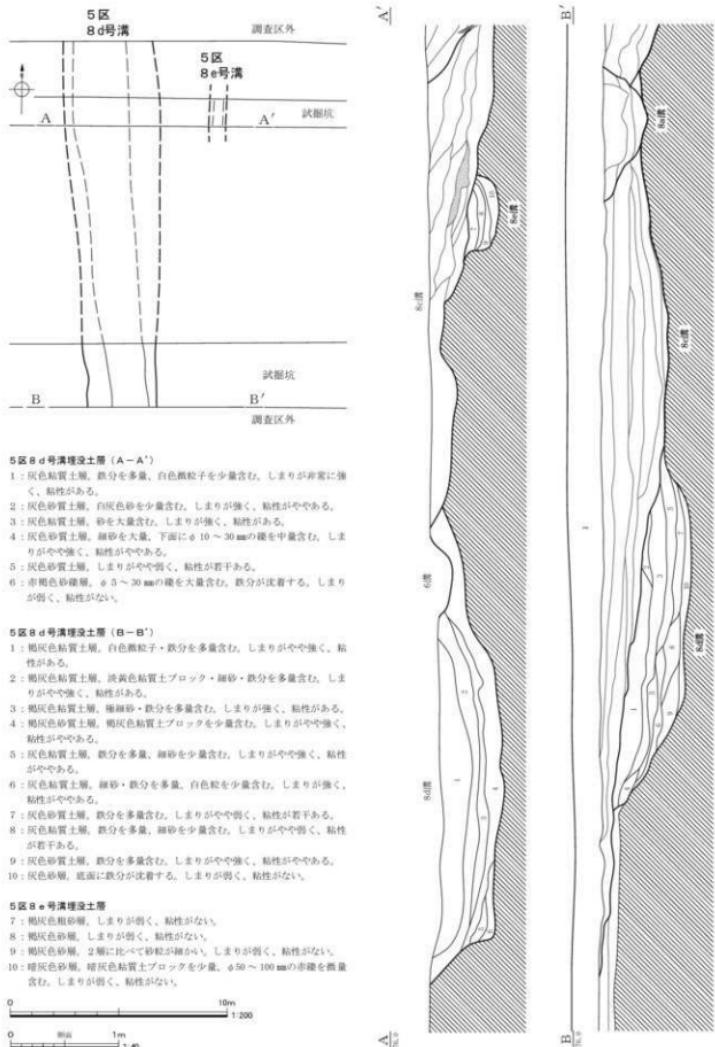
- 3: 灰色砂質土層。鉄分を多量。白色粒を少量。Hr-FA粒を微量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。19溝。
- 4: 灰色の質土層。黒色粘質土ブロック・鉄分を多量。白色粒を少量。Hr-FA粒を微量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。21溝。

- 5: 灰色砂質土層。鉄分を多量。白色粒を少量。Hr-FA粒を微量含む。しまりがやや強く、粘性がややある。21溝。
- 6: 黑色砂質土層。白色粒 (Ar-C)・鉄分を多量含む。しまりが弱く、粘性がややある。22溝。

古墳時代から平安時代  
古墳時代から平安時代

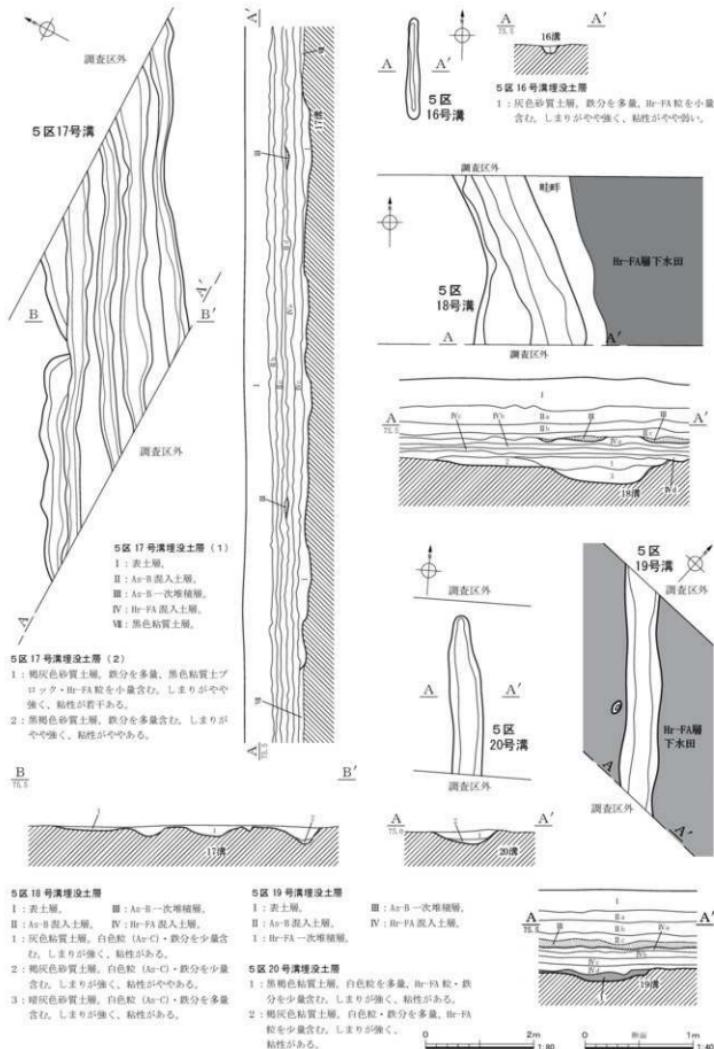


第35図 古墳時代から平安時代の溝 (6)

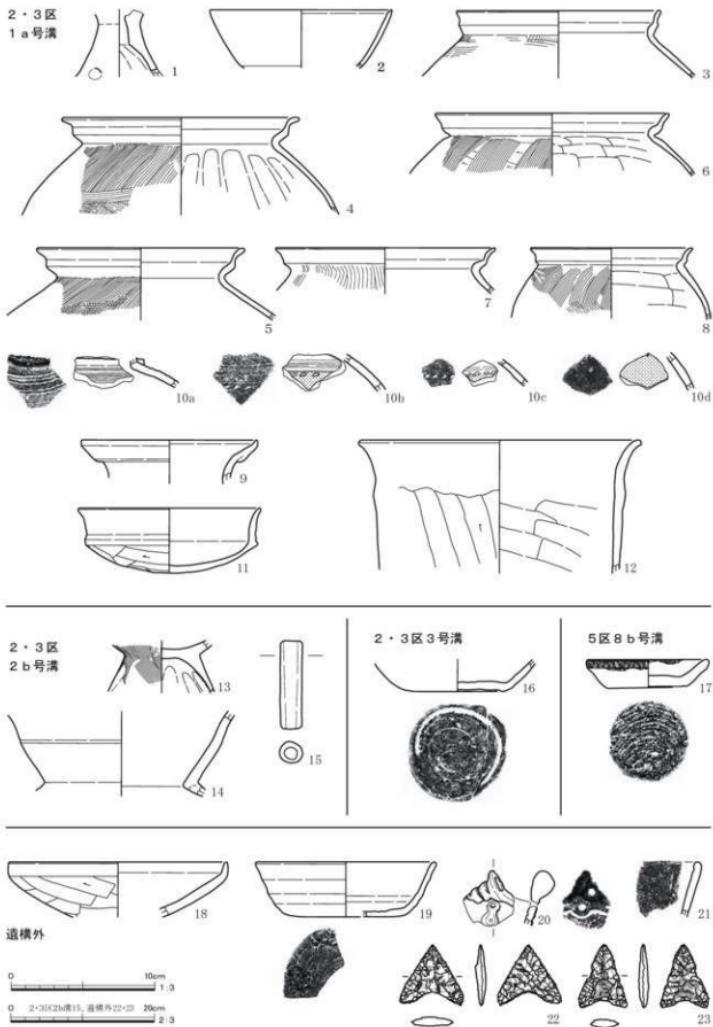


第36図 古墳時代から平安時代の溝(7)

古墳時代から平安時代  
溝



第37図 古墳時代から平安時代の溝 (B)



第38図 出土遺物

表5 出土遺物観察表

No.	遺物名	器種	法量 (cm)	特徴	①胎土 ②色調	備考
1 2・3区 1 a号	土師器 器 台	口径: — 底径: — 器高: 残4.6	外面: 頭部ナダ。透孔あり。 内面: 頭部ナダ。	①チャート・黒色粒 ②外: にぶい黄橙 内: にぶい橙	脚部1/3残存。 外面部透孔。 古墳時代前期。	
2 2・3区 1 a号	土師器 壺	口径: (12.6) 底径: — 器高: 残4.0	外面: ロ緑部ヨコナダ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。	①白色粒・黒色粒 ②外: 淡黄橙 内: 黄橙	ロ緑部片。 古墳時代前期。	
3 2・3区 1 a号	S字狀口縁 台付壺	口径: (14.2) 底径: — 器高: 残4.4	外面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナマヘカの後、肩部ヨコハケ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。胴部ナダ。	①チャート・黒色粒 ②外: 淡黄橙 内: 黄橙	ロ緑～脚部片。 外面部透孔。 古墳時代前期。	
4 2・3区 1 a号	S字狀口縁 台付壺	口径: (16.4) 底径: — 器高: 残6.6	外面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナマヘカの後、肩部ヨコハケ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。胴部ナマ指ナダ。	①白色粒・黒色粒 ②外: にぶい黄橙 内: 淡黄橙	ロ緑～脚部片。 古墳時代前期。	
5 2・3区 1 a号	S字狀口縁 台付壺	口径: (14.4) 底径: — 器高: 残5.0	外面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナマヘカの後、肩部ヨコハケ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナダ。	①チャート・黒色粒 ②外: にぶい黄橙 内: 淡白	ロ緑～脚部片。 内面部透孔。 古墳時代前期。	
6 2・3区 1 a号	S字狀口縁 台付壺	口径: (16.2) 底径: — 器高: 残4.3	外面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ケリの後、ナナメハケ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナラナダ。	①白色粒・黒色粒 ②外: 淡白 内: 淡白	ロ緑～脚部片。 古墳時代前期。	
7 2・3区 1 a号	S字狀口縁 台付壺	口径: (15.2) 底径: — 器高: 残3.1	外面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナマヘカ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナダ。	①チャート・黒色粒 ②外: 淡白 内: 淡白	ロ緑～脚部片。 内面部透孔。 古墳時代前期。	
8 2・3区 1 a号	S字狀口縁 台付壺	口径: (11.2) 底径: — 器高: 残4.9	外面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナマヘカ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナラナダ。	①チャート・黒色粒 ②外: 淡白 内: 淡白	ロ緑～脚部片。 古墳時代前期。	
9 2・3区 1 a号	土師器 壺	口径: (12.2) 底径: — 器高: 残3.0	外面: ロ緑部ヨコナダ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。	①角閃石・白色粒 ②外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	ロ緑部片。 古墳時代前期。	
10 2・3区 1 a号	土師器 二重口縁 壺	口径: — 底径: — 器高: 4.5	外面: 脚部突筋貼付。胸部上位ヨコハケの後斜文突、刺突から下は赤彩。 内面: 胸部指ナダ。	①白色粒・黒色粒 ②外: 明赤胎・赤 内: 灰褐	胸部片。 古墳時代前期。	
11 2・3区 1 a号	土師器 壺	口径: 12.6 底径: — 器高: 4.5	外面: ロ緑部ヨコナダ。体部～底部ケリ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。体部～底部ナラナダ。	①褐色粒・黒色粒 ②外: 橙 内: 橙	完形。 古墳時代後期 (6 c 後半～7 c初頭)。	
12 2・3区 1 a号	土師器 壺	口径: (19.5) 底径: — 器高: 残9.2	外面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ケリ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。胸部ナラナダ。	①白色粒・黒色粒 ②外: 橙 内: 橙	ロ緑～脚部片。 古墳時代後期 (6 c 後半～7 c初頭)。	
13 2・3区 2 b号	S字狀口縁 台付壺	口径: — 底径: — 器高: 残3.6	外面: 脚部ナマヘカ。 内面: 脚部指ナダ、台上面に砂付着。	①片岩・チャート ②外: にぶい黄橙 内: 灰灰	台面のみ残存。 古墳時代前期。	
14 2・3区 2 b号	土師器 壺	口径: — 底径: — 器高: 残5.8	外面: ロ緑部ヨコナダ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。	①チャート・褐色粒 ②外: にぶい黄橙 内: 淡黄	ロ緑部1/2残存。 古墳時代前期。	
15 2・3区 2 b号	土製品 管 玉	長さ: 3.1 厚さ: 0.7	ナダ調整。	①黑色粒 ②外: 淡白 内: 淡白	一部欠失。	
16 2・3区 3号	須恵器 环	口径: — 底径: 6.7 器高: 残2.2	外面: ロクロ調整。底部回転糸切り。 内面: ロクロ調整。	①チャート・黒色粒 ②外: 灰白 内: 灰白	底部のみ残存。 平安時代(9 c中葉)。	
17 5区 8 b号	須恵器 皿	口径: 8.5 底径: 5.5 器高: 2.0	外面: ロクロ調整。底部回転糸切り。 内面: ロクロ調整。	①白色粒・褐色粒 ②外: にぶい黄橙 内: 灰灰	完形。酸化焼成後、 ロ緑部内側面上に油煙 付着。古代。	
18 遺構外	土師器 环	口径: (15.0) 底径: — 器高: 残3.8	外面: ロ緑部ヨコナダ。体延ケリ。 内面: ロ緑部ヨコナダ。体部ナラナダ。	①チャート・石英 ②外: 橙 内: 明赤胎	1/3残存。2 a区 2面出土。古墳時代後 期(7 c前半)。	
19 遺構外	須恵器 环	口径: (12.5) 底径: (8.6) 器高: 3.8	外面: ロクロ調整。底部へ切り後ナダか。 内面: ロクロ調整。	①白色粒 ②外: 灰 内: 灰	1/5残存。 2 a区2面出土。 平安時代(9 c初頭)。	
20 遺構外	調文土器 深 口	口径: — 底径: — 器高: —	口唇部に突起。焼成前穿孔。器面荒れ。 外面: 唇下に8字状貼付文。 内面: 突起・口唇下に貼付文・單枕線。	①石英 ②外: にぶい橙 内: にぶい橙	ロ緑部片。 2・3区1号構出土。 壁之内2式。	
21 遺構外	調文土器 深 林	口径: — 底径: — 器高: —	器面荒れ。	①片岩・石英 ②外: 灰黄 内: にぶい黄橙	ロ緑部片。 2・3区1号構出土。 壁之内2式。	
22 遺構外	石 器	長さ: 2.1 幅: 2.2 厚さ: 0.4	基盤無気。押圧剥離による調整。 石材: 透明度がやや高い黒曜石。 重さ: 0.9g	—	完形。 2・3区4号構出土。	
23 遺構外	石 器	長さ: 2.2 幅: 1.7 厚さ: 0.4	基盤無気。押圧剥離による調整。表面裏面の基部～中央に研削痕。石材: 不純物が多く、透明度が高い黒曜石。重さ: 0.9g。	—	完形。 5 e区出土。	

## IX 自然科学分析

### 1 土層とテフラ

関東地方北西部に位置する前橋市とその周辺には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

南部拠点地区遺跡群 No. 1 の発掘調査区でも、層位や年代が不明なテフラや土層が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定を行って、土層の層序や層位さらに年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、2 b 区基本層序、2・3 区 18 号溝、2・3 区 19 号溝、2・3 区 22 号溝、5 b 区基本層序、5 c 区基本層序、5 区 4 号溝、5 区 7 号溝の 8 地点である（第 4・39 図）。

#### テフラ検出分析の試料と分析方法

土層断面から採取された試料のうち、18 点についてテフラ検出分析を行い、軽石や火山ガラスなどテフラ粒子の特徴やその産出状況の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

①試料 8 g を秤量。②超音波洗浄により泥分を除去。③ 80 °C で恒温乾燥。④ 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

#### テフラ検出分析の分析結果

分析の結果を表 6 に示す。軽石は 4 種類が検出された。最下位にある軽石（最大径 3.7 mm）は、灰白色でスポンジ状に比較的よく発泡しており、斑晶に斜方輝石や單斜輝石が認められる。その上位には、発泡がさほど良くない白色の軽石（最大径 2.0 mm）が認められる。その斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。その上位の軽石は、淡褐色で比較的よく発泡しており、斑晶に斜方輝石や單斜輝石が認められる。この軽石は、成層したテフラ層に多い。最上位の軽石は、白色で光沢をもち、比較的よく発泡している。斑晶には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。ほかに、これらの軽石の細粒物である火山ガラスのほか、無色透明の軽石型ガラスや、分厚い中間型ガラスも検出された。

#### 屈折率測定の試料と測定方法

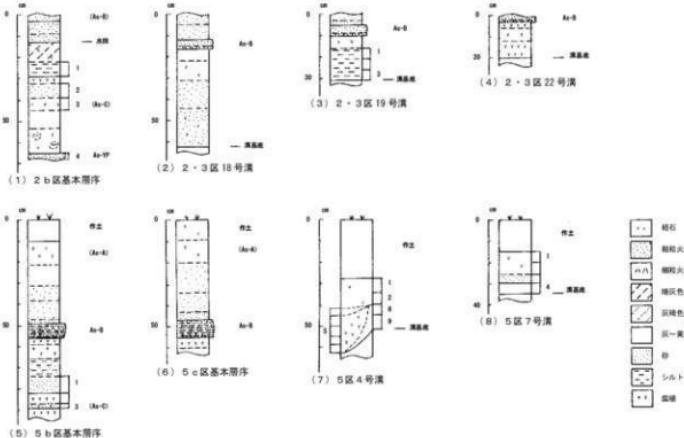
テフラ検出分析の対象となった試料のうち、5 b 区基本層序の試料 3 に含まれる As-C と考えられる軽石のガラス部について、実体顕微鏡下でハンドピッキングの後に軽く粉碎して、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製 MAIOT）により、火山ガラスの屈折率 ( $n$ ) の測定を実施し、同定精度のチェックを実施した。

#### 屈折率測定の結果

屈折率測定の結果を表 7 に示す。5 b 区基本層序の試料 3 に含まれる軽石のガラス部の屈折率は、1.516–1.520 (30 粒子) である。

#### 考 察

テフラ検出分析で認められた 4 種類の軽石のうち、最下位の軽石については、軽石の岩相、斑晶鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率などから、4 世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間 C 軽石 (As-C,



#### 土層の層序

(1) 2 b 区基本層序：2 b 区基本層序では、下位より緑灰色粗粒火山灰層（層厚 3cm）、黄色がかった灰色シルトブロック混じり灰色泥炭（層厚 12cm）、暗灰色粘質土（層厚 8cm）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 6cm）、灰白色粗粒火山灰層に埋められた灰色粘質土（層厚 7cm）、黒褐色粗粒火山灰層（層厚 3cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 7cm）、軽石の最大径 4mm、灰白色粗粒火山灰層（層厚 9cm）、軽石の最大径 4mm、黄褐色砂質土（層厚 4cm）、黄褐色砂質土（層厚 6cm）、砂層に埋められた灰色粗粒火山灰層（層厚 10cm）が認められる。

発達調査では、これらのうち黄褐色土層の下から水田跡が検出されている。

(2) 2・3 区 18 号溝：2・3 区 18 号溝の覆土は、下位より白褐色石を含む灰色泥炭（層厚 18cm、軽石の最大径 8mm）、白色粗粒土を含む灰色砂質土（層厚 15cm、軽石の最大径 6mm）、白色粗粒土を含む灰色泥炭（層厚 6cm）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 3cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 7cm）、軽石の最大径 4mm、灰白色粗粒火山灰層（層厚 9cm）、軽石の最大径 4mm、黄褐色砂質土（層厚 4cm）、黄褐色砂質土（層厚 6cm）、砂層に埋められた灰色粗粒火山灰層（層厚 10cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より灰色砂質粗粒火山灰層（層厚 0.3cm）と、灰白色粗粒火山灰層（層厚 3cm）からなる。このテフラ層は、層相から 1108（Kt）年に浅間大山から噴出した浅間大山テフラ（As-II、荒牧 1969、新井 1979）に同定される。

(3) 2・3 区 19 号溝：2・3 区 19 号溝の覆土は、下位より埋められた灰色粗粒火山灰層（層厚 6cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 3cm）、成層したテフラ層（層厚 4cm）、灰白色粗粒土（層厚 2cm）、砂層に埋められた灰色土（層厚 3cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より白色粗粒火山灰層（層厚 2cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 2cm）、成層したテフラ層（層厚 4cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 4cm）からなる。このテフラ層は、層相から As-II に同定される。ここでも、このテフラ層に埋められた水田跡が検出されている。

(4) 2・3 区 22 号溝：2・3 区 22 号溝の覆土は、下位より埋められた灰色粗粒火山灰層（層厚 6cm、軽石の最大径 3mm）、黒褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、灰白色粗粒土（層厚 1cm）、成層したテフラ層（層厚 2cm）と、基盤に粗粒の軽石を含む黄褐色粗粒火山灰層（層厚 4cm、軽石の最大径 5mm）からなる。このテフラ層は、層相から As-II に同定される。ここでも、このテフラ層に埋められた水田跡が検出されている。

(5) 5 b 区基本層序：5 b 区基本層序では、下位より黒褐色土（層厚 5cm 以上）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 2cm）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 3cm）、成層したテフラ層（層厚 4cm）、白褐色砂質土（層厚 5cm）、黄褐色砂質土（層厚 8cm）、砂層に埋められた灰色シルト層（層厚 7cm）、黄褐色土（層厚 10cm）、白色粗粒軽石を多く含む白色土（層厚 11cm、軽石の最大径 3mm）、少しあ色調が帶いだ灰色土（層厚 10cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質粗粒火山灰層（層厚 0.2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、成層したテフラ層（層厚 1cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）からなる。このテフラ層は、層相から As-II に同定される。ここでも、土と土との直前の土層に含まれる白色粗粒軽石の発達は比較的良好く、層相も合わせると、1783（明治 3）年に浅間大山から噴出した浅間大山テフラ（As-II、荒牧 1969、新井 1979）に由来すると考えられる。

(6) 5 c 区基本層序：5 c 区基本層序では、下位より灰色粘土土（層厚 9cm 以上）、灰黑色粘土土（層厚 5cm）、成層したテフラ層（層厚 6cm）、白褐色砂質土（層厚 4cm）、灰白色粗粒土（層厚 9cm）、砂層に埋められた灰色土（層厚 14cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 11cm、軽石の最大径 3mm）、白色細粒軽石混じり灰色土（層厚 9cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質粗粒火山灰層（層厚 0.2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）、成層したテフラ層（層厚 1cm）、白褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）からなる。このテフラ層は、層相から As-II に同定される。ここでも、このテフラ層に埋められた水田跡が検出されている。なお、土作中に含まれる白色粗粒軽石の発達は比較的良好く、層相も合わせると由来される。

(7) 5区4号溝：5区4号溝の覆土は、下位より黄褐色土（層厚 11cm、軽石の最大径 3mm）、若干の調の帶いだ灰色土（層厚 2cm）からなる。

(8) 5区7号溝：5区7号溝の覆土は、下位より少しあ色調が帶いだ灰色土（層厚 5cm）、白褐色粗粒火山灰層を多く含む灰色土（層厚 4cm）、白色細粒軽石混じり灰色土（層厚 11cm、軽石の最大径 3mm）、黄褐色土（層厚 15cm）からなる。

第39図 基本層序柱状図

荒牧 1968, 新井 1979, 友廣 1988, 若狭 2000) に同定される。

下位より 2 層目の白色軽石は、岩相から 6 世紀初頭に棲名火山から噴出した棲名二ツ岳浪波川テフラ (Hr-FA, 新井 1979, 坂口 1986, 早田 1989, 町田・新井 1992)、または 6 世紀中葉に棲名火山から噴出した棲名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井 1962, 坂口 1986, 早田 1989, 町田・新井 1992) に由来すると考えられる。その上位の軽石は As-B、また最上位の軽石は As-A にそれぞれ由来すると考えられる。

分析対象地点のうち、2 b 区基本層序では、試料 1 に As-C や Hr-FA または Hr-FP 起源の軽石が含まれている。その下位にこれら軽石が認められないことから、As-C の降灰層準は何らかの作用で失われており、少なくとも Hr-FA 降灰後に発生した洪水性堆積物により覆われていると推定される。試料 3 層準で認められる軽石については、当初 As-C の可能性も考えられたが、その特徴的な軽石は認められないことから、さらに下位のテフラに由来する可能性が考えられる。試料 4 が採取された粗粒火山灰層については、粒度や含まれる火山ガラスの特徴から、約 1.5 ~ 1.65 万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄褐色軽石 (As-YP, 新井 1962, 町田・新井 1992・2003) かも知れない。一方、最上部の砂質土については、層相や周囲のテフラの産出状況から、As-B が多く混在していると思われる。したがって、周辺で検出されている As-B 直下の水田（後述）とほぼ同じ水田と推定されよう。

2・3 区 18 号溝および 2・3 区 19 号溝の覆土の最下部からは、As-C と Hr-FA または Hr-FP 起源の軽石が検出された。したがって、これらの試料が採取された洪水性堆積物については、2 b 区基本層序で検出されたものと同じ可能性がある。つまり、これらの溝は洪水性堆積物で埋没したのかも知れない。2・3 区 22 号溝については、覆土最下部の試料 1 から As-C 起源の軽石が多く検出された。この溝の年代については、Hr-FP 降灰年代を測る可能性もある。

5 b 区基本層序では、試料 3 から As-C 起源のテフラ粒子が比較的多く検出された。層相も合わせるとこの試料付近に As-C の降灰層準があると考えられる。また、その上位の砂層（試料 1）から、As-C のほかに Hr-FA または Hr-FP に由来する可能性のあるテフラ粒子が検出された。

5 区 4 号溝では、いずれの試料からも As-B と As-A に由来する可能性のあるテフラ粒子が検出された。したがって、この遺構については、As-A 降灰後につくられた可能性が考えられる。5 区 7 号溝については、覆土最下部の試料 4 にも少量ながら As-B 起源の火山ガラスが含まれているものの、その上位の試料 3 に As-B 起源のテフラ粒子は多く、この溝については Hr-FA の上位で As-B の下位にある可能性が指摘される。

なお、Hr-FA と Hr-FP の噴火の際には、それぞれ火山泥流が発生して、赤城山山麓下流部以外の利根川扇状地河川沿いを覆っている（早田 1989）。したがって、今回検出された洪水性堆積物もいずれかの火山泥流堆積物の可能性がある。

表 6 テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	色調	色調
2 b 区基本層序	1	*	pm	灰白, 白			
	2	*	pm	透明			
	3	*	pm	透明			
	4	*	nd	透明			
3 区 18 号溝	7	*	灰白	3.7	*	pm	灰白, 白
3 区 19 号溝	3	*	pm	灰白, 白			
3 区 22 号溝	1	**	灰白	2.2	**	pm	灰白
5 c 区基本層序	2	**	淡褐色	2.5	**	pm	淡褐色
**** : とくに多い, *** : 多い, ** : 中程度, * : 少ない 最大径の単位は mm, pm : バブル型, nd : 中間型, pm : 軽石型,							
地名	試料	軽石・スコリア	量	色調	火山ガラス	量	色調
5 b 区基本層序	1	**	灰白	4.1	***	pm	灰白, 白
	2		, 白	2.0	*	pm	灰白
	3	**	灰白	2.8	**	pm	灰白
5 区 4 号溝	1	*	白	2.8	**	pm	白, 淡褐色
	3	**	白	4.3	***	pm	白, 淡褐色
	7	**	白	5.2	***	pm	白, 淡褐色
	9	*	白	3.4	**	pm	白, 淡褐色
5 区 7 号溝	1	*	淡褐色	2.1	**	pm	淡褐色, 白
	3	**	淡褐色	2.2	**	pm	淡褐色
	4		pm	灰, 白, 白, 淡褐色			

表 7 屈折率測定結果

地点名	試料	火山ガラスの屈折率 (n)	測定粒子数
5 b 区基本層序	3	1.516~1.520	30

屈折率の測定は、M10T による。

## まとめ

南部拠点地区遺跡群 No. 1において、地質調査、テフラ検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、下位より、浅間C軽石 (As-C, 4世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年)、浅間Aテフラ (As-A, 1783年)などの指標テフラのほか、As-CとAs-Bの間に、榛名ニッ岳波川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)または榛名ニッ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 6世紀中葉)に伴う火山泥流の可能性のある洪水性堆積物が検出された。溝状構造の中には、この堆積物によって埋没したものも認められる。

## 2 プラント・オバール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_3$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オバール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オバール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡（稻作跡）の検証や探査が可能である（杉山 2000）。

### 分析試料と分析方法

分析試料は、5 b 区基本層序トレーンから採取された4点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す（第40図）。分析方法は、ガラスピーズ法（藤原 1976）を用いて、次の手順で行った。

①試料を  $105^{\circ}\text{C}$  で 24時間乾燥（絶乾）。②試料約 1g に対し直徑約  $40\text{ }\mu\text{m}$  のガラスピーズを約 0.02g 選加（電子分析天秤により  $0.1\text{mg}$  の精度で秤量）。③電気炉灰化法 ( $550^{\circ}\text{C}$ ・6時間) による灰化処理。④超音波水中照射 ( $3000\cdot42\text{kHz}\cdot10\text{ 分間}$ ) による分散。⑤沈底法による  $20\text{ }\mu\text{m}$  以下の微粒子を除去。⑥封入液（オイキット）中に分散してプレパラートを作成。⑦撮影・計数。

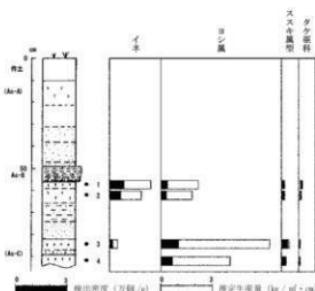
同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オバールを対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オバールとガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中のプラント・オバール個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{ g}$ ）をかけて、単位面積で層厚 1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。

### 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケベ科の主要な 6 分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 8 および第41図に示した。第41図に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

### 考 察

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オバールが試料 1gあたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山 2000）。ただし、密度が



第40図 プラント・オバール分析結果

3,000 個/g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個/g として検討を行った。

5 b 区基本層序では、As-B 直下層（試料 1）から As-C 直下層（試料 4）までの層準について分析を行った。その結果、As-B 直下層（試料 1）とその下層（試料 2）、および As-C 直上層（試料 3）からイネが検出された。このうち、As-B 直下層（試料 1）とその下層（試料 2）では、密度が 8,300 個/g および 6,400 個/g と高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-C 直上層（試料 3）では、密度は 1,500 個/g と比較的低い値であるが、直上を砂層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられる。

### まとめ

プラント・オパール分析の結果、As-B 直下層とその下層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-C と As-B の間にある洪水分堆積物直下でも稲作が行われていた可能性が認められた。

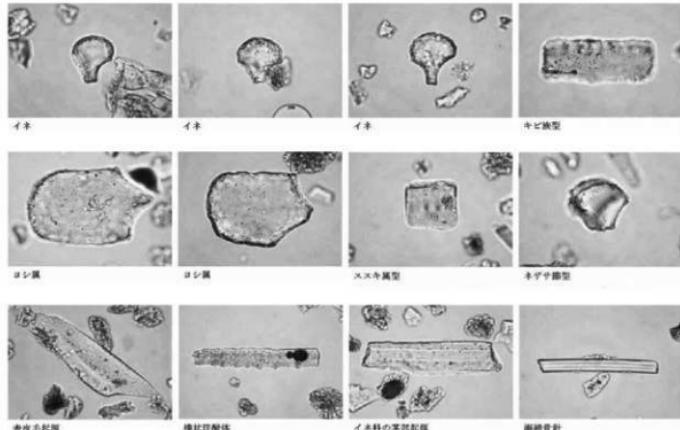
表 8 プラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100 個/g）

分類群	学名	5 b 区基本層序地点			
		1	2	3	4
イネ	<i>Oryza sativa</i>	83	64	15	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	35	29	102	65
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	14	14	36	22
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	21	14	7	7

推定生産量（単位：kg/m<sup>2</sup>・cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

分類群	学名	5 b 区基本層序地点			
		1	2	3	4
イネ	<i>Oryza sativa</i>	2.44	1.89	0.43	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.18	1.81	6.42	4.12
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.17	0.18	0.45	0.27
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	0.10	0.07	0.03	0.03



第 41 図 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真 ————— 50 μm

## X まとめ

本遺跡群では、古墳時代から中近世に至る土地利用の変遷を把握することができた。調査区が後背湿地に立地することから水田域として利用され続けてきたが、その形態は各時期における経済・社会的背景などを反映して大きく変容してきていた。また、周辺では北関東自動車道や県道13号前橋・長瀬線などの建設に伴う発掘調査により多くの事例が蓄積されてきており<sup>1)</sup>、前橋南部地区における様相が広い範囲で明らかになりつつある。以下では、これら的事例を踏まえ、各時期の成果を概観していきたい。

註1) 西田遺跡（前橋市理文1996）、西田II遺跡（前橋市理文1998）、西田III遺跡（前橋市理文1999）、西田IV遺跡（前橋市理文2001）、西田V遺跡（前橋市理文2001）、西田VI遺跡（前橋市理文2001）、西田遺跡（群馬県理文2002）、村中遺跡（群馬県理文2002）、村中II遺跡（前橋市理文2001）、下阿内町畠遺跡（群馬県理文2001）、下阿内前田遺跡（群馬県理文2001）、鶴光路根植遺跡（群馬県理文2002）、鶴光路根植II遺跡（前橋市理文2000）、徳丸高堰遺跡（群馬県理文2005）、徳丸高堰II遺跡（前橋市理文1999）、徳丸高堰III遺跡（前橋市理文2000）、徳丸高堰IV遺跡（前橋市理文2001）

### 1 古墳時代から平安時代の水田・溝について（第42図）

本節では、As-C降下（4世紀初頭）以後、As-B降下（1108年）までの層位で確認された遺構を対象とする。時期判断の難しいものも認められるが、古墳時代前期・後期、平安時代の遺構が区別できた。

#### 古墳時代前期の溝

当該期の遺構として、2・3区2b号溝下層、2・3区22号溝が確認された。これらは、As-C粒を含む黒色砂質土が堆積することから他の遺構と区別することができる。Hr-FA降下（6世紀初頭）までの時期幅が見込まれるもの、本調査における検出遺物量比から前期が主体を占めるものと推し量られた。

微高地に位置する西田遺跡F区や下阿内町畠遺跡1区でも同様の溝が集中する。下阿内町畠遺跡2号溝－西田遺跡267号溝－283号溝は本遺跡2・3区2b号溝に連続する可能性があり、微高地を迂回する状況が俯瞰できる。これらの溝は水田の灌漑水路として利用されていたと考えられ、その水田は西田遺跡中央・村中遺跡西側・下阿内前田遺跡南側で確認されたAs-C混入土層水田が対応する。同様の水田跡は本遺跡群で確認されなかつたが、水田耕作土に比定されるAs-C混入土が各溝付近に分布しており、水田化が及んでいたものと推定される。

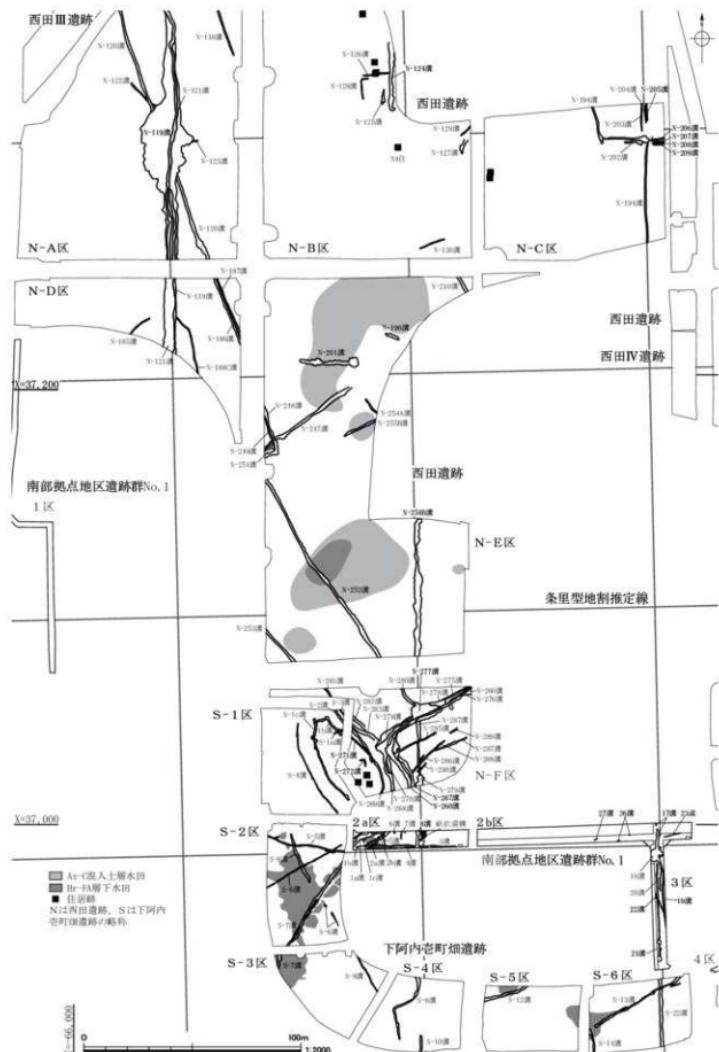
#### 古墳時代後期の水田・溝

古墳時代後期の遺構として、2区・5区Hr-FA層下水田、2・3区1a・1b・1c・2a・2b・5・7号溝、5区18・19号溝などが確認できた。これらはHr-FAの混入状態や共伴遺物から所産時期を判断している。

水田はHr-FA一次堆積層下で検出され、6世紀初頭に比定される。水田面は残存せず、明瞭な区画も認められなかった。同様の水田痕跡は西田遺跡・下阿内町畠遺跡でも確認されており、小区画を呈する畦畔が報告されている。本遺跡群2区Hr-FA層下水田は南西側に展開する下阿内町畠遺跡2区に連続することが見込まれる。なお、これらの水田に伴う水路として、畦畔に並走しHr-FAを含まない5区18号溝やHr-FA一次堆積層を含む5区19号溝が挙げられ、前者は降灰前、後者は降灰と同時に廃棄されたものと看做される。

2・3区1c・5・7号溝および2・3区2号溝の一部にはHr-FAの浅黄色テフラが塊状に混入しており、降灰時に比較的近い埋没時期が予想される。これらは2a区西側の微高地脇に集中し、およそ南北に走向する。

2・3区1a号溝は出土遺物より6世紀後半から7世紀初頭に比定され、先述の水田や溝より開口時期が後出する。この溝は、西田遺跡260号溝ないし268号溝、下阿内町畠遺跡7号溝などに連続することが予想され、微高地を迂回する様子は古墳時代前期から続く灌漑方法を勢努らせる。これらの溝には約370mにわたって走行する西田遺跡120・187・187・248・252・280号溝、西田III遺跡2・6・8号溝が接続しており、長大な灌漑施



第42図 古墳時代から平安時代における周辺の道路

設の展開を垣間見ることができる。2・3区1b号溝も西田遺跡253・269号溝や下内志町畠遺跡6号溝などと連続して2・3区1a号溝などと並走することから、同様の灌漑体系に属していたものと推測される。

#### 平安時代の水田・溝

平安時代の遺構として、2区Hr-FA混入層水田、2・3区3・4・8b・17~21号溝、5区8d・8e号溝などが確認できた。これらはAs-B層下水田の調査から導き出された方格地割に沿った配置が施されており、条里型水田の構築に伴う時期が想起された。その時期は、西田遺跡で検出された住居跡の上にAs-B層下水田が営まれていたことなどから、9世紀後半以降に求められている（新井2001）。

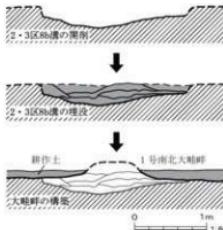
2区Hr-FA混入層水田は、正位の方格区画を呈し、1号南北大畦畔が条里型地割の坪境に重なることから、As-B層下水田に先行する条里型水田に想定された。大畦畔は埋没した2・3区8b号溝の直上に構築されている。

2・3区8b号溝は基幹水路に推定され、同じ坪境に並ぶ溝として西田遺跡124・254B・279号溝、西田II遺跡9号溝、下内志町畠遺跡9・10号溝が報告されている。西田遺跡124号溝-254B号溝間の軸線上で西田遺跡4号住居跡が認められることから、この水路は9世紀後半以降に開削されたことが見込まれる。また、西田II遺跡9号溝で9世紀後半から10世紀前半の遺物が包含されており、当該期までは開口していた可能性が示唆される。水路の埋没後は大畦畔として利用され（第43図）、平安時代末期まで継続することが周辺遺跡の様相から窺われた。この坪境における水路の再構築は認められないため、10世紀前半から12世紀初頭における灌漑体系の大規模な改編が予想されよう。このような変容は宿横手三波川遺跡（群馬県埋文2001）・横手南川端遺跡（群馬県埋文2002）・砂町遺跡（玉村町教委2007）など周辺地域でも類例が挙げられる。ところで、2・3区8b号溝に沿って2・3区岐状遺構が検出された。畠の存在が想起されるものの、水田と同じ低地に立地することが不自然である。むしろ、2・3区8b号溝との位置関係を鑑み、坪境を担う水路脇の道路痕跡を考慮する必要がある。

5区8d・8e号溝は、後述するように、As-B層下前後の5区8c号溝、中近世の5区8a・8b号溝が同走向で重複しており、繰り返される再掘削を経ながら継続して使用してきた様相が確認できた。その北側は同様の経過を有する西田遺跡119・121号溝に連続するものと考えられ、全長が条里型地割における1条（6町：約654m）以上に及ぶ。これらは、水田灌漑の基幹を担っていたものと想定され、後世の土地利用にまで影響を与えた。先述の2・3区8b号溝に連なる水路が、条里地割に則って一坪西へ付け替えられた可能性も想像されよう。

2・3区17・19~21号溝は、As-B層下水田の3区1号-5区1号南北大畦畔相当下で確認された。2・3区19~21号溝はAs-B層下期まで継続しない。一方、坪境交点より北側の2・3区17号溝は規模が縮小されるものの2・3区13号溝に受け継がれる。なお、同じ坪境に並ぶ溝として、西田遺跡194・203~205号溝、下内志町畠遺跡22号溝が報告されている。2・3区22号溝の底面には小土坑が連続し、同様の特徴が約280m離れた西田遺跡194号溝南側でも認められる。

東西に走る2・3区3・4号溝は、東側が2・3区18号溝、西側が下内志町畠遺跡5号溝に連続すると推測され、全長約180mに至る。As-B層の残存が良好でなかったため、As-B層下水田との関係は不明であった。坪境の交点に位置する2・3区18号溝は溜井状を呈しており、高崎市矢中遺跡群天王前遺跡・矢中村東遺跡（高崎市教委1982・1984）などで類例が見受けられる。なお、2・3区3号溝から9世紀中葉の須恵器が検出されており、想定されている条里型水田の構築時期と整合的ではなかった。造成が部分的に先行していた可能性も想起されるが、検出資料が貧弱でもあり、隣接地における事例の蓄積を踏まえて判断する必要があろう。（高橋）



第43図 2・3区8b号溝の変遷

## 2 平安時代末期の水田について（第44図）

### 条里型地割の設定について

As-B層下の水田には、一町（109 m）四方の方格地割を採用した、いわゆる「条里型地割」が認められる。本遺跡群でも大畦畔や水路の位置から条里型地割が看取できた。第44図は下阿内宅町畠・前田遺跡の大畦畔を基準とし、一方町のラインを大畦畔に合わせて設定した図である。これにより南北大畦畔の方位はN-0°～1°-Wを指し、西へ傾いて設定されていることが分かった。小畦畔も大畦畔に連動して、南北畦畔がわずかに西に傾くものが多い。東西大畦畔の方位はN-91°-Eを指す。南北大畦畔とは直交せず、北西から南東方向へわずかに傾く様子が窺えた。各大畦畔間の距離は概ね110 mである。

前橋台地上で広範囲に施工される条里型地割は、各遺跡群により大畦畔の傾斜や距離に違いが認められ、全てが厳密に同一の規格で施工されたものではないことが明らかにされている<sup>1)</sup>。いくつかの施工単位に分かれていたと考えられ、この傍証となり得るのが、下阿内前田遺跡で検出された南北の2a・2b号大畦畔である。両大畦畔は約12 mと近接して設定されている<sup>2)</sup>。2a号大畦畔を基軸として東側、2b号大畦畔を基軸として西側にそれぞれ条理型地割を設定したところ、おおよそ110 m間隔で大畦畔や水路が検出された。即ち、どちらか片方のみを基軸として設定すると、実際に検出されている大畦畔や水路の位置とは齟齬をきたすようになる。さらに、2a号大畦畔はN-0°-W、2b号大畦畔はN-1°-Wを指し、傾きにも若干の違いが認められた。これらのことから、2a・2b号大畦畔を境に施工単位や時期が異なる可能性が想定される。なお、2b号大畦畔は南下して本遺跡群の5区2号大畦畔へと続く。2a号大畦畔も本遺跡群の5f区で継ぎが検出されるはずであるが、調査区全体が搅乱されていたため確認することはできなかった。

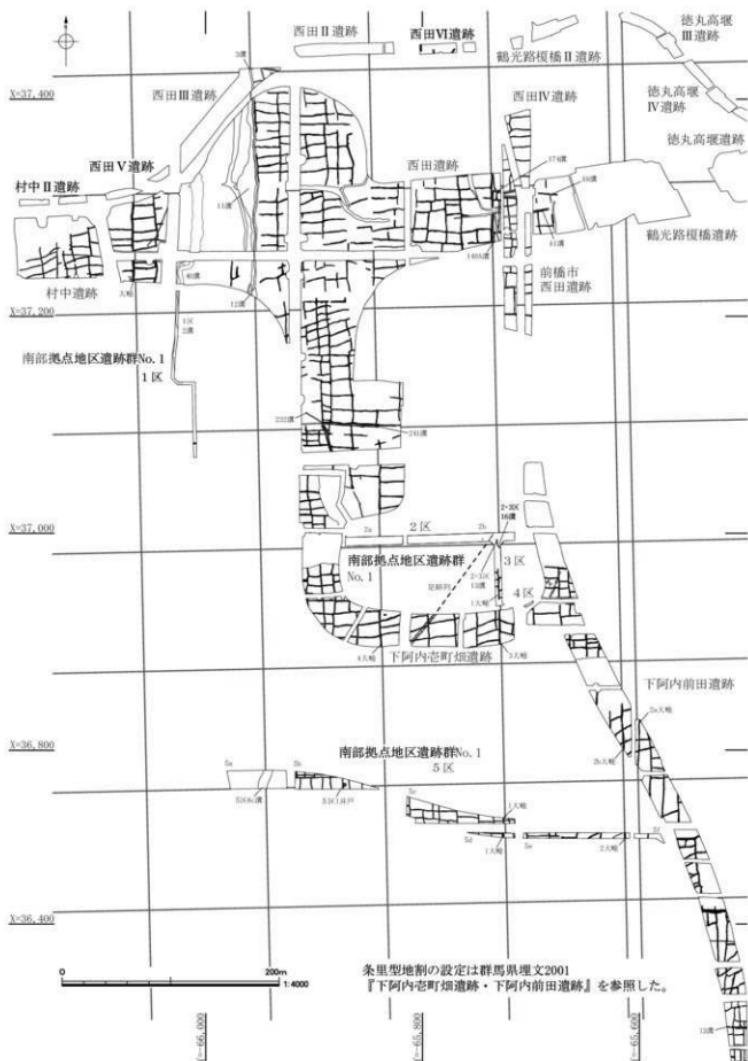
東西大畦畔については、規模が小畦畔と変わらないものや、推定位置に検出されない場合があり、坪境に対する規制は南北大畦畔と比べて弱い印象を受ける。

### As-B降下時の水田使用状況

区画によって水田面の状態に違いが認められた。詳細に観察すると様々な痕跡が捉えられるが、大きくは、①などらかで全体的に浅い凹凸がある区画、②全体的に深めの凹凸がある区画に分けることができる。5区では南北大畦畔である1号大畦畔を境にして様相が異なり、西側が①、東側が②となる。①の凹凸には人の足跡と判別できるものもあるが、数は少なく、分布に規則性は認められない。②では深めの凹凸に加え、その脇に土塊がある区画（区画54・57）も見られる。

①のAs-B降下時における水田使用状況は、5区1号井戸の存在から推測することができる。井戸の時期はAs-B降下以前に求められ、区画15の水田面を掘り込んでいる。井戸を使用している間、水田は機能していないかたと推定されることより、井戸構築時からAs-B降下直前までの期間は耕作されていなかつたといえよう。ここから類推すると、水田面が区画15と同様①の状態である1号大畦畔以西は、休耕田または耕作が放棄された田であったのではないだろうか。自然科学分析を実施したところ、プラント・オバールが高い密度で検出されたが、As-B降下直前の耕作でなくとも同様の結果は得られるため、これをもってAs-B降下時に耕作田であったと言ふことはできないだろう。一方、②については深めの凹凸が残っており、耕作されていない田であれば、水田面が風化してなどらかになると推測されることから、耕作田であった可能性が挙げられる。なお、1区および3区の水田面は、5区における①の状態と酷似していた。また、こうした水田面の違いに対応して畦畔の状態にも差が生じるかと思われたが、規模や形態に大差はない、相関関係を見出すことはできなかった。

ところで、2b区東側では、南西→北東方向へ直行する足跡列が検出された。南西方向へ直線的に延長すると、下阿内宅町畠遺跡の1号足跡列へと繋がり、直線距離は130 m以上を測る。小区画内を斜めに横切っている痕跡



第44図 平安時代末期における周辺の遺跡

が見受けられ、植えられた稲に規制されないで歩いたものと考えられる。2 b 区東側は後世の耕作により水田面は残存していなかったが、休耕田であった可能性が指摘される。

古代には、「見作」と「不作」の割合が年によって大きく変動する「不安定耕地」が広く存在していたことが文献史から明らかにされている<sup>3)</sup>。宿横手三波川遺跡(群馬県埋文 2002)では耕作していたと推測される区画と、耕作されていなかったと推測される区画が南北大畦畔を挟んで隣接する状況が確認された。本遺跡群も南北大畦畔を境にして水田面に違いが見られ、使用状況の異なる区画が混在する様相を窺い知ることができる。

#### 水利について

灌漑用の基幹水路には、条里型地割の南北坪境に位置する5 区 8 c 号溝が想定される。本遺跡群の北に所在する西田遺跡 11・12 号溝および西田Ⅲ遺跡 3 号溝は同一の構造で、前時代に引き続き長距離にわたって幹線水路が敷かれていた様子が窺える。走行方位は N - 1° - W を指し、大畦畔と同様わずかに西に傾く。本遺跡群の 5 区 8 c 号溝では最下層に砂礫層が 10 cm 程度堆積している。その上は A-B 層で覆われるが、部分的にしか残存していないことから、本水路は A-B 層下後も機能していたと推察される。

この幹線水路から、給排水のための小規模水路が有機的に結びついており、条里型地割に合致するものとしないものがある。合致する溝として、南北方向は本遺跡群 2・3 区 13 号溝-西田遺跡 140 A 号溝が挙げられる。本遺跡群 2・3 区 13 号溝は、そのまま南下せず 2・3 区 16 号溝で南東へ進路を変えていく。西田遺跡 140 A 号溝は大畦畔の中央を走行し、同ライン上の本遺跡群 5 d 区 1 号大畦畔でも、中央にごく浅い溝状の窪みを確認した。東西方向は西田遺跡 241 号溝、下阿内前田遺跡 13 号溝、西田遺跡 174 号溝、鶴光路櫻橋遺跡 A 9 号溝の 4 溝があり、それぞれ大畦畔の中央や脇を走行している。これらの水路は北から南へ、西から東へ流下する。西田遺跡では南北の 140 A 号溝から東西の 174 号溝へと坪交点で分水する状況が確認された。条里型地割に合致しない溝としては、南北方向の西田遺跡 232 号溝、東西方向の鶴光路櫻橋遺跡 A 1 号溝があるものの、数は少ない。

小規模水路から引かれた水は、水口を介して小区画内に行き渡らせる構造をとる。だが、本遺跡群 5 区や西田遺跡のように水口がほとんど検出されない場合も多い。この理由として、溝水になった水田から畦畔をオーバーフローして順次水を送る「かけ流し」の場合と、水口の深さが畦畔の基部まで達していないため、後世の耕作により削平され確認できなかった場合とが考えられる。

(有山)

注 1) 群馬県史編さんにあたって、条里型地割の傾きや地割一辺の距離を割り出すために詳細な検討が行われている(高崎市市史編さん委員会 2003)。

2) 大畦畔が近接する理由について、①水路・畦畔等は造成後新たに造り替えられるながら存続していくために、大畦畔・水路の位置にむずが生じてきている可能性、②造成時に土地の起伏等の地形的な制約を受けて、距離・方位にわずかにずれが生じた可能性、③施工の時差・起點にずれがあった可能性、以上の 3 点が挙げられている(群馬県埋文 2001『下阿内赤堀遺跡・下阿内前田遺跡』)。

3) 古代の水田は、一坪内の全ての区画が耕作されているのではなく、その時点で現実に耕作されていた田「見作」と、耕作されていない田「不作」が混在する状態にあった(高井 2006)。

### 3 中世以降の溝について

中世になると微高地には屋敷地が造営されるようになるが、低地は近世に至るまで水田として利用され続けている。本遺跡群でも水路と想定される溝が検出された。これらの溝は南北・東西に走行し、前時代からの条里型地割が守られているように見える。本遺跡群の 2 区 8 a 号溝・5 区 13 号溝・5 区 15 号溝は、A-B 層下水田の大畦畔や水路と同位置、もしくはその脇に検出されており、坪境が強く意識されていたことが推測される。一方、同じく坪境に開削されていた西田遺跡 140 A 号溝・241 号溝は中世になると失われている。基幹水路については、5 区 8 c 号溝から 5 区 8 b 号溝・5 区 8 a 号溝への改修までは坪境の東脇を保持している。しかし、その後、中世のある段階になると、約 70 m 西の西田遺跡 40 号溝へと移動し、坪境と関係のない位置へ外れていく(第 44 図)。

この基幹水路は近世ではほぼ同位置に掘り直され、続きが本遺跡群1区2号溝で検出されている。このように中世以降、条里型地割を織密に路襲しようとする意識が徐々に薄れていった様子も窺える。

(有山)

#### 本文参考文献

- ( ) はⅡ章2節「歴史的環境」の遺跡番号を示す。
- 前橋市教委 1982『金冠塚（山内二子山）古墳調査概報』(B)
- 前橋市教委 1991『前橋市埋蔵文化財調査地一覧表』(A・E)
- 西野清地道路調査会 1995『西野清治道跡』(1)
- 前橋市教委 1996『文殊山古墳群調査報告書』(C)
- 前橋市理文 1996『前田遺跡』(21)
- 前橋市理文 1997『下増田中道跡』(7)
- 前橋市理文 1997『鶴光路跡引跡』(17)
- 前橋市理文 1998『前田遺跡』(3)
- 前橋市理文 1998『下佐鳥中道以前道跡』(11)
- 前橋市理文 1998『手手湯田遺跡、西田II遺跡』(22・31)
- 前橋市理文 1998『横手湯田遺跡、徳丸仲田II遺跡、西善寺司II遺跡、下増田城跡遺跡』(2・4・31)
- 前橋市理文 1998『手手湯田IV遺跡』(31)
- 前橋市理文 1999『西田III遺跡』(25)
- 前橋市理文 1999『西田IV遺跡』(21)
- 前橋市理文 1999『西田V遺跡』(21)
- 前橋市理文 1999『西田高堰II遺跡、徳丸仲田III遺跡、西善寺司III遺跡、下増田常木II遺跡、下増田城跡IV遺跡』(3・4・5)
- 前橋市理文 2000『鶴光路複数II遺跡、徳丸高堰III遺跡』(6・27)
- 前橋市理文 2000『横手湯田VI遺跡』(31)
- 前橋市理文 2001『徳丸高堰IV遺跡』(6)
- 前橋市理文 2001『横手湯田VII遺跡、徳丸仲田IV遺跡』(4・31)
- 前橋市理文 2001『龜里石面遺跡』(15)
- 前橋市理文 2001『龜里城跡遺跡』(15)
- 前橋市理文 2001『下中II遺跡、西田V遺跡』(19・24)
- 前橋市理文 2001『西田VI遺跡』(25)
- 前橋市理文 2004『横手宮田II遺跡』(33)
- 前橋市理文 2004『下佐鳥中道以前II遺跡』(11)
- 前橋市理文 2005『龜里油免II遺跡』(16)
- 玉村町教委 1989『金免遺跡』(50)
- 玉村町教委 1994『下道西遺跡』(第1次・第2次調査) (47)
- 玉村町教委 2000『下口下道遺跡』(49)
- 玉村町教委 2002『玉神前道跡』(46)
- 玉村町教委 2004『一本木遺跡』(48)
- 玉村町教委 2007『町野遺跡』(第1～3次調査)、尾柄町III遺跡、中之坊遺跡(5)
- 高崎市教委 1982『矢中遺跡群(Ⅱ) 天王前遺跡』
- 高崎市教委 1984『矢中遺跡群(Ⅳ) 矢中町東遺跡』
- 前橋市教委は前橋市教育委員会、前橋市理文は前橋市埋蔵文化財発掘調査部、玉村町教委は玉村町教育委員会、高崎市教委は高崎市教育委員会、群馬県教委は群馬県教育委員会、群馬県理文は群馬県埋蔵文化財調査事業団の略称である。

#### 自然科学参考文献

- 新井房夫 1962『関東平野北西部の第四紀編年』『群馬大学紀要、自然科学研究』10, p.1-79.
- 新井房夫 1979『関東地方北西部の調査時代以降の示標ツブラ解』『考古学ジャーナル』no.157, p. 41-52.
- 荒牧重雄 1968『霞ヶ火山の地質』『地質研究導論』no. 45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫 1992『火山灰アトラス』東京大学出版社, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版社, 336p.
- 板口 一 1986『櫛名二つ岳起源FA・FP 層下の土器層と須恵器』『荒川北原遺跡、今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会, p.103-119.
- 早田 輝 1989『6世紀における櫛名火山の2回の噴火とその災害』『第四紀研究』27, p.297-312.
- 友廣哲也 1988『古式土器類出現期の様相と浅間山C帯石』『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.325-336.
- 若狭 徹 2000『群馬の生土器が軽かるとき』『人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流』かみつけの里博物館, p.41-43.
- 杉山眞二 2000『植物遺存体（プラント・オバール）』『考古学と植物学』同成社, p.189-213.
- 藤原宏志 1976『プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)－多種イネ科栽培植物の硅酸体標本と定量分析法－』『考古学と自然科学』9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 1984『プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オバール分析による水田遺跡の探査－』『考古学と自然科学』17, p.73-85.

# 写 真 図 版



5 b区 A3-B 層下水田の汚染状態



図版 1

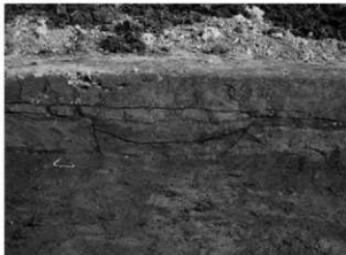


遺跡の位置と周辺の地形（上が北）

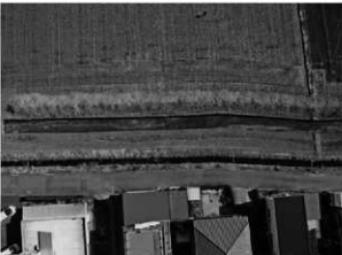


2 b・3区1面、2a区2面全景（南から）

図版 2



1区 1号溝埋没状態（西から）



1区 2号溝（西から）



1区 2号溝（北から）



1区 2号溝埋没状態（南から）



2・3区 11号溝（南から）



2・3区 12号溝（南から）



4区 1号溝（東から）



4区 1号溝（北から）

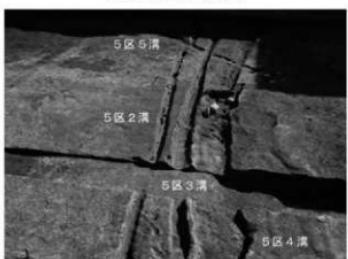
中近世以降



5a区1面全景（北から）



5区1号溝（南から）



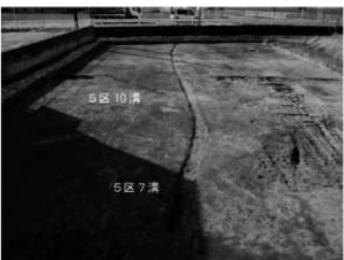
5区2~5号溝（北から）



5区2~4号溝（南から）



5区6号溝（南東から）



5区7・10号溝（東から）

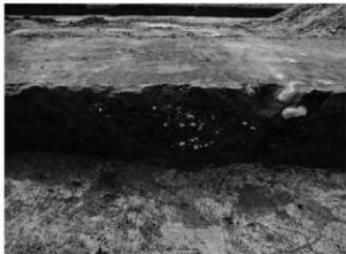


5区8号溝（北から）



5区8号溝南側試掘坑（北東から）

図版 4



5区8号溝 (北から)



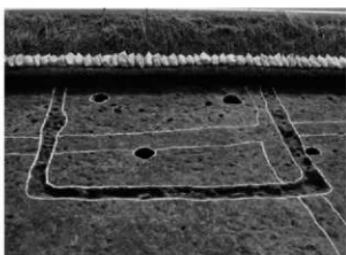
5区9号溝 (北から)



5区12号溝 (南から)



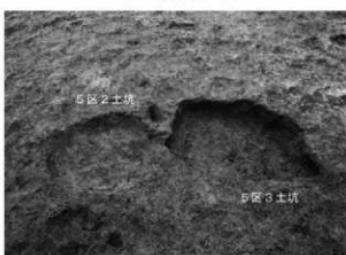
5区13号溝 (北から)



5区14号溝 (北から)



5区1号土坑 (南から)



5区2・3号土坑 (北から)



5区4号土坑 (北から)

平安時代末期



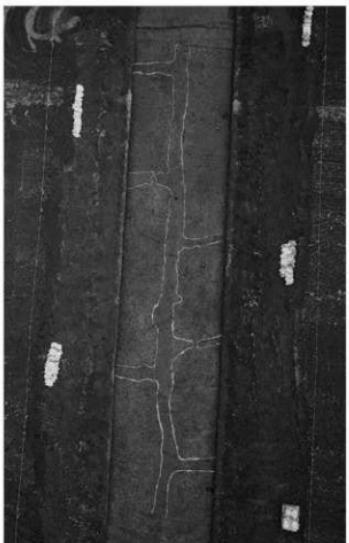
1区 As-B 層下水田（北から）



1区 As-B 層下水田（南西から）



1区 As-B 層下水田作業風景（北西から）



3区 As-B 層下水田（北から）



3区 As-B 層下水田（南から）



3区 As-B 層下水田水口（南から）

図版 6



5 b 区 As-B 層下水田（南から）



5 b 区 As-B 層下水田（東から）

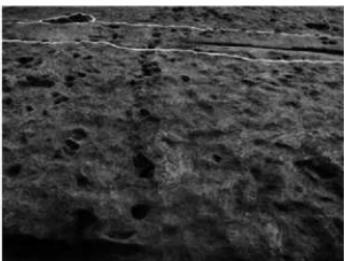
平安時代末期



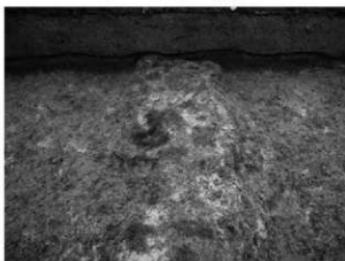
5c + d 区 As-B 層下水田（南から）



5c 区 As-B 層下水田（南東から）



5c 区 As-B 層下水田灌み列（北から）



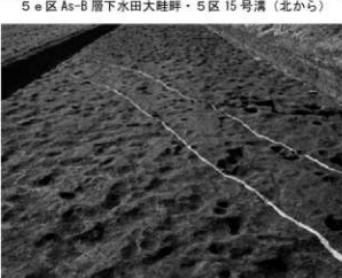
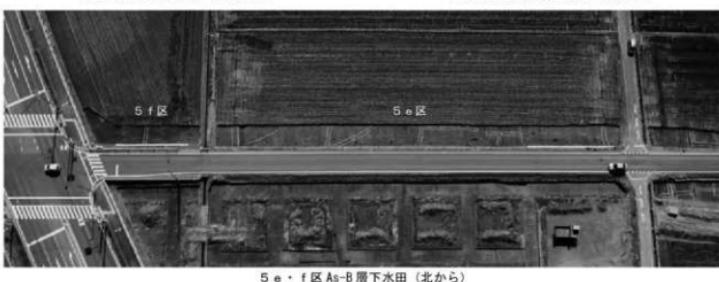
5c 区 As-B 層下水田畦畔（北から）



5c 区 As-B 層下水田畦畔断面（北から）

図版 8

平安時代末期



平安時代末期



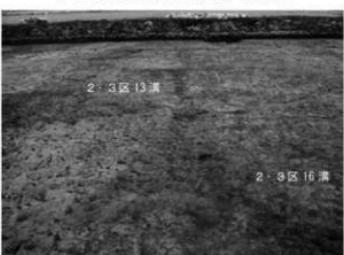
5e区 As-B層下水田水口（北から）



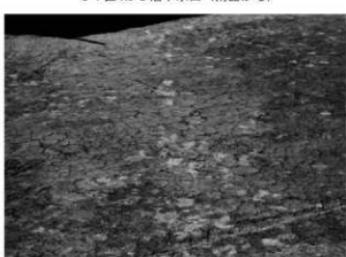
5e区 As-B層下水田作業風景（西から）



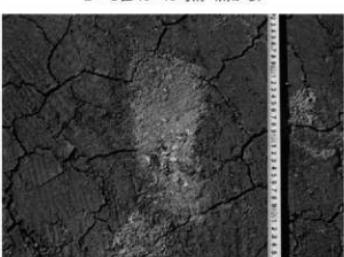
5f区 As-B層下水田（南西から）



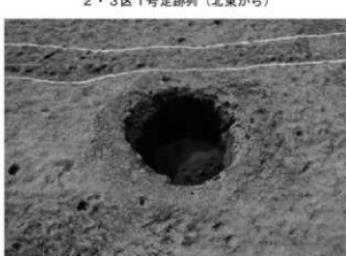
2・3区 13・16号溝（南から）



2・3区 1号足跡列（北東から）



2・3区 1号足跡列（南西から）



5区 1号井戸（東から）



5区 1号井戸（北東から）

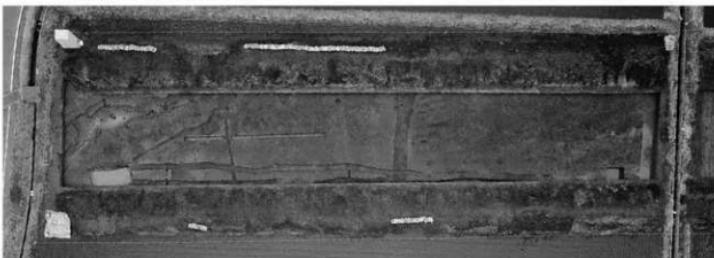
図版 10



2区 Hr-FA 混入土層水田（東から）



2区 Hr-FA 層下水田（西から）



2 a区第2面と2区 Hr-FA 層下水田（南から）



5区 Hr-FA 層下水田（東から）



5区 Hr-FA 層下水田畦畔（北から）



2・3区鉢状造模（西から）

古墳時代から平安時代

図版 11



2・3区1号溝（北東から）



2・3区1a号溝（南西から）



2・3区1a号溝埋没状態（南西から）



2・3区1a号溝遺物出土状態（北西から）



2・3区2a号溝（南西から）



2・3区2b号溝（南西から）



2・3区3・4号溝（西から）

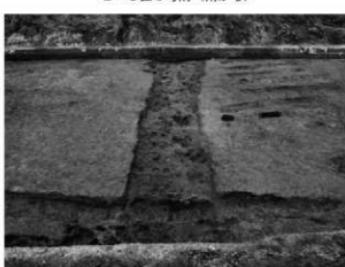
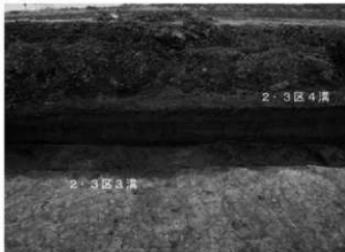


2・3区3・4号溝東半部（北西から）

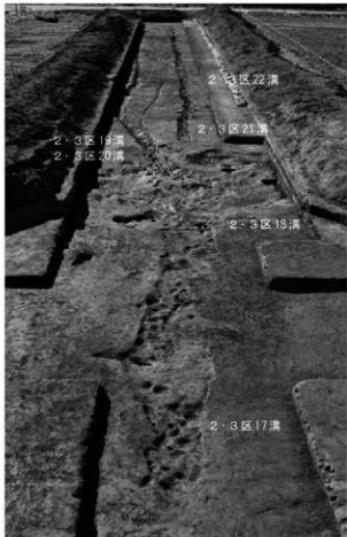
古墳時代から平安時代

図版 12

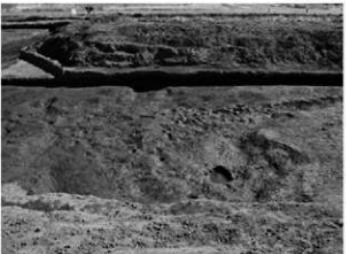
古墳時代から平安時代



古墳時代から平安時代



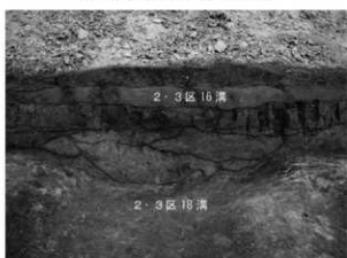
2・3区17～22号溝（北から）



2・3区18号溝（西から）



2・3区18号溝埋没状態（東から）



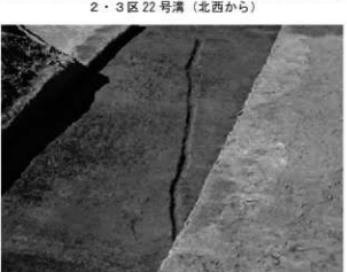
2・3区18号溝埋没状態（西から）



2・3区22号溝（北西から）



2・3区21・22号溝埋没状態（南から）



2・3区23号溝（北東から）

図版 14



2・3区 26号溝（北東から）



2・3区 27号溝（北東から）



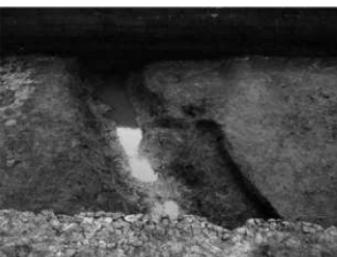
5区 16号溝（北から）



5区 17号溝（北東から）



5区 18・19号溝（東から）



5区 18号溝（北から）



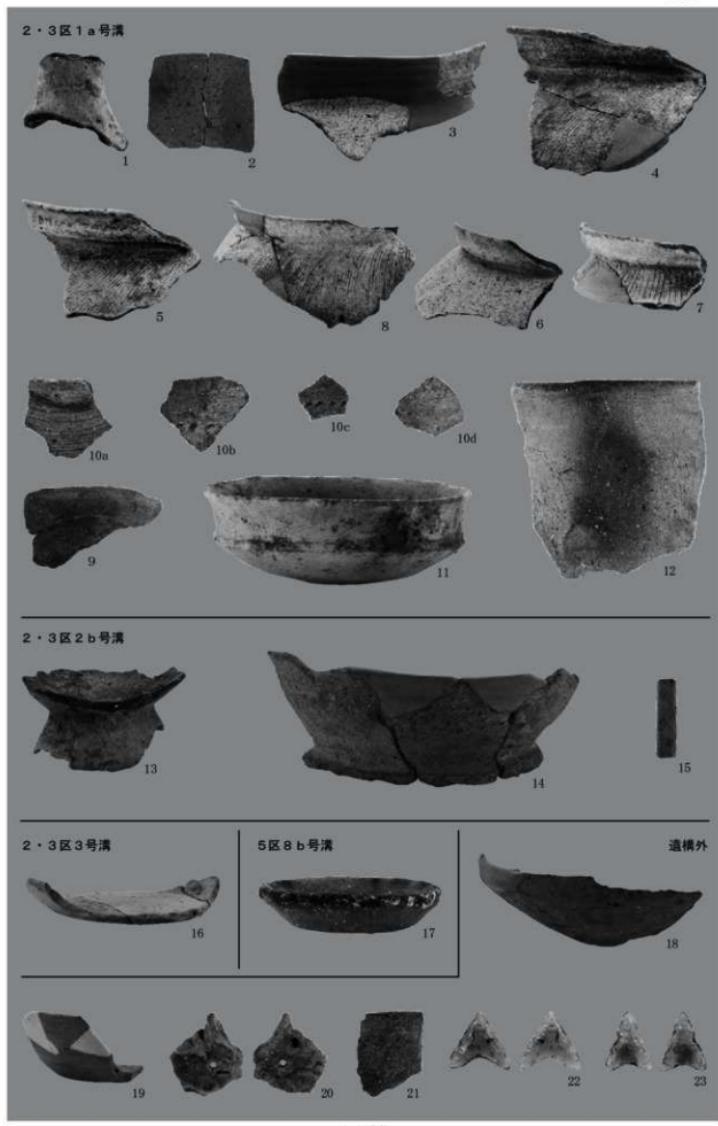
5区 19号溝（北西から）



5区 20号溝（北から）

古墳時代から平安時代

図版 15



## 抄 錄

ふりがな	なんぶきよてんちくいせきぐんNo.1
書名	南部拠点地区遺跡群No.1
副書名	前橋市南部拠点地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山下歳信 高橋清文 有山径世
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel027-265-1804
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2 Tel027-231-9531
発行年月日	西暦 2009(平成21)年3月19日

## 南部拠点地区遺跡群No.1

前橋市南部拠点地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

---

平成21年3月13日 和刷

平成21年3月19日 楽行

編集／有限会社毛野考古学研究所  
発行／前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
371-0018 群馬県前橋市三袋町二丁目10-2  
TEL 027-231-9531

---

印刷／朝日印刷工業株式会社

